

噴 火 と 防 災

—伊豆大島噴火後の防災対策と住民心理—

平成元年 3 月

東京大学新聞研究所
「災害と情報」研究班

噴火と防災

—伊豆大島噴火後の防災対策と住民心理—

Inhabitants' Responses to the Volcanic Disaster, One Year
after the 1986 Eruption of Izu-Oshima

広井 脩
Osamu Hiroi

田崎 篤郎
Tokurou Tazaki

はじめに

昭和61年11月21日、伊豆大島は、安永6（1777）年から8（1779）年にかけての噴火以来およそ200年ぶりの大噴火に見舞われ、わずか12時間のあいだに1万人を超える住民が島外避難を余儀なくされた。そしてその後ほぼ1ヶ月間、島民たちは東京23区の避難所などに分散し、不安で不自由な日々を送ることになった。

結局、これらの人々は、61年12月19日から22日にかけてほぼ全員が帰島したが、とはいえ噴火の危険が完全に去ったというわけではない。

たとえば、噴火後ときおり発表されている『伊豆大島の火山活動に関する火山噴火予知連絡会の統一見解』や『火山噴火予知連絡会伊豆大島部会コメント』では、

「三原山山頂では噴火が起こる可能性が高いと考えられる」（62年1月10日火山噴火予知連絡会伊豆大島部会コメント）

「今後も噴火が起こる可能性が高いと考えられるので、厳重な監視を続けることが重要である」（1月28日火山噴火予知連絡会伊豆大島部会コメント）

「火山性微動、みかけ比抵抗、陥没量等の状況から考えて、伊豆大島では今後も噴火が繰り返される可能性が高いと考えられる」（2月10日火山噴火予知連絡会統一見解）

「噴火が起こる可能性が依然として高いと考えられるので、厳重な監視を続けることが重要である」（2月23日火山噴火予知連絡会伊豆大島部会コメント）

「現時点では新たな噴火がさし迫っていることを明瞭に示すデータは得られていないが、今後も噴火が起こる可能性は高いと考えられるので、厳重な監視を続けることが重要で

本調査は、文部省科学研究費・自然災害重点領域研究「社会組織の防災力」（代表・水野欽司）の一環として行なったものである。

なお、本報告の執筆分担は、以下の通りである。

広井 脩：はじめに、第1章、第3章、第4章、第5章1～3、5～7、第6章1

田崎篤郎：第2章、第5章4・8、第6章2・3

ある」(3月6日火山噴火予知連絡会伊豆大島部会コメント、3月19日火山噴火予知連絡会統一見解、3月27日火山噴火予知連絡会伊豆大島部会コメント)

「火山性微動等の継続、みかけ比抵抗が低いこと等から考えて、今後も噴火が起こる可能性があると考えられるので、厳重な監視を続けることが重要である」(5月7日火山噴火予知連絡会統一見解)

「地震、火山性微動、みかけ比抵抗等から見て、今後も噴火が起こる可能性があると考えられるので、厳重な監視を続けることが重要である」(6月25日火山噴火予知連絡会伊豆大島部会コメント)

「地殻変動、重力測定、みかけ比抵抗等の結果は、山頂直下においてマグマの一部が深部に戻ったと解釈することもできる。しかし、火山性微動が続いており、三原山山頂の地震が増加していることは、地下でマグマの活動が続いていると解釈することもできる。

また過去の噴火活動では休止期において再び噴火した例が少なくないことから、今後も噴火が起こる可能性があると考えられ、厳重な監視を続けることが重要である」(10月12日火山噴火予知連絡会統一見解)

などと、微妙なニュアンスの相違を含みながらも、依然として再噴火の危険性を指摘していた。

そして、大噴火からはほぼ1年が経過した62年11月16日には、小規模ながら実際に三原山が噴火したのである。この噴火は、11月16日午前10時47分、山頂の旧火口より発生したもので、その噴煙はおよそ1,500メートルの高さになり、島の南部地域に小量の降灰があった。また18日3時2分と10時4分の2度にわたりふたたび噴火が起こり、このときの噴煙の高さは1,600メートルと2,400メートルに達して島の西部地域に降灰があった。

このように、伊豆大島では客観的に危険な状態が継続しており、しかも再噴火が実際に発生している。けれども一方、このような状況にもかかわらず、身体に感じられるような大噴火の兆候はほとんどなく、しかも11月16日の噴火が小規模でかつ単発的だったこともあって、住民のあいだには、もう噴火は起こらないのではないかと、あるいは噴火があってもそう大きくならないのではないかと、という希望的観測が広がっていることも事実である。

一般に、大災害を経験した直後には、住民の防災意識と防災対策がいちじるしく向上し、ふたたび大災害の危険がある場合にとりわけその傾向が強いことは、災害社会学の常識である。けれども、災害から時間が経過するにつれ、またとくに危険の兆候があまり感じられない場合には、そうした防災意識がしだいに低下していくことも、もう一つの常識なのである。

そこでこの報告では、昭和61年11月21日の大噴火からすでに1年以上が経過した時点での、大島住民の防災意識と防災対応について、東京大学新聞研究所「災害と情報研究班」が63年2月から3月にかけて行なったアンケート調査の結果を述べていきたい。

なお、われわれは62年2月下旬にも伊豆大島においてアンケート調査を実施し、その結果を『1986年伊豆大島噴火における災害情報の伝達と住民の対応』(昭和63年1月)としてすでに発表している。今回の調査は、そのときと同じ対象者を選んで行ったもの(「パネル調

査」)であり、質問によっては、62年から63年にかけての1年間の住民の意識や防災対策の推移を比較できる構造になっている。そこで、前回調査との比較も適宜していくことにしたい。^(注1)

第1章 調査項目・調査の概要・回答者の属性

1. 調査項目

本調査の調査項目は次の通りであり、報告もこの順序で行なうこととする。なお、調査結果の単純集計は付属資料1に示してある。

(1) 61年11月21日の大噴火後の生活

- 1) 島外避難した場所と帰島した時期(問1, 問2)
- 2) 島外避難中の収入減(問3)
- 3) 帰島後1年間の収入減(問4)
- 4) 収入減への噴火の影響(問4付問1)
- 5) 帰島後の生活の変化(問5)
- 6) 大島全体の地域経済の変化(問6)

(2) 再噴火への不安

- 1) 再噴火への不安(問7)
- 2) 再噴火の可能性(問8)

(3) 噴火予知への信頼

- 1) 噴火予知一般への信頼(問9, 問11, 問12)
- 2) 三原山噴火予知への信頼(問10)
- 3) 予知情報に対する評価(問13, 問14)

(4) 行政の防災対策

- 1) 行政の防災対策への評価(問15)
- 2) 防災無線への評価(問17)
- 3) 自主防災組織への評価(問18)
- 4) 防災訓練への参加と評価(問23)
- 5) もっと充実してほしい防災対策(問16)
- 6) 防災対策一般への評価(問19, 問24)
- 7) 島外避難命令への態度(問20)
- 8) 火山と観光(問25)

(5) 自宅の防災対策・生活上の心配事

- 1) 自宅の防災対策(問21)

2) 62年11月16日の噴火時の対応 (問22)

3) 生活上の心配事 (問26)

2. 調査の概要

(1) 調査対象者

昭和62年2月調査(大島町に在住する20才以上の男女1,000名)のうち、住所・氏名を特定できた750人。

(2) 調査方法

留め置き自記式

(3) 調査期間

昭和63年2月25日～3月15日

(4) 回収数

577票

(5) 回収率

76.9%

(6) 地区別回収内訳

泉 津	29 票
岡 田	66
北 の 山	43
元 町	177
野 増	48
差 木 地	93
下 地	59
波 浮	62

3. 回答者の属性

本調査の回答者の属性は、以下の通りである。

(1) 性

	%	N (人)
男	41.2	238
女	58.8	339
計	100.0	577

(2) 年 齢

	％	N (人)
20 歳 代	3. 6	21
30 歳 代	16. 1	93
40 歳 代	23. 1	133
50 歳 代	22. 2	128
60 歳 代	19. 6	113
70 歳 以 上	15. 4	89
計	100. 0	577

(3) 職 業

	％	N (人)
農 業	9. 5	55
漁 業	2. 4	14
商 業	10. 9	63
サービス業	10. 2	59
旅館・民宿	5. 9	34
公務員	7. 3	42
会社員	8. 0	46
無職（主婦を除く）	10. 6	61
主 婦	23. 6	136
その他	7. 1	41
DK・NA	4. 5	26
計	100. 0	577

(4) 定 住 意 思

	％	N (人)
ずっと住んでいたい	80. 8	466
移転してもいい	11. 1	64
ぜひ移転したい	1. 2	7
その他	2. 3	13
DK・NA	4. 7	27
計	100. 0	577

(5) 島 へ の 愛 着

	％	N (人)
強い愛着を感じる	66. 7	385
少し愛着を感じる	15. 8	91
どちらかといえば嫌い	2. 8	16
嫌 い	0. 7	4
どちらともいえない	7. 8	45
何も感じない	0. 7	4
DK・NA	5. 5	32
計	100. 0	577

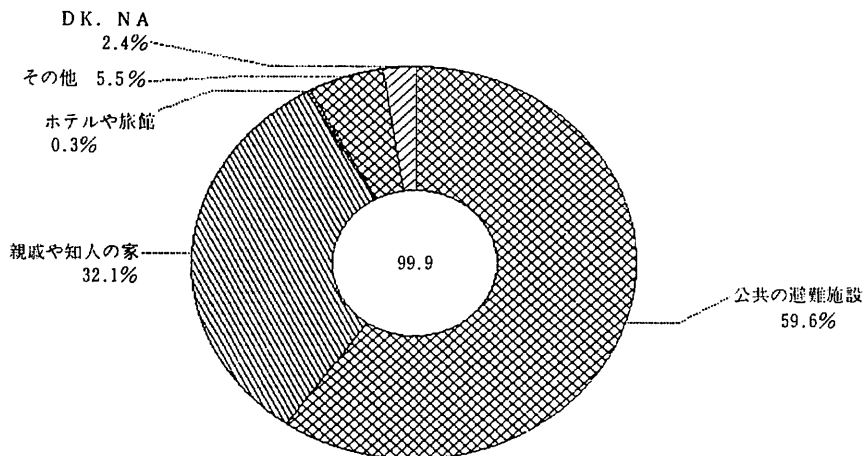
第2章 61年11月21日の大噴火後の生活

1. 島外避難した場所と帰島した時期

次に、アンケート調査の結果を報告していく。まず、61年11月21日の大噴火後の生活に関する質問からスタートしたい。

本調査では最初に、調査対象者が島外避難してからふたたび大島に戻るまでのあいだ、もっとも長くいた所はどこかをたずねた。その結果をみると、「公共の避難施設」という回答がもっとも多く、59.6%と過半数を占めており、次いで、「親戚や知人の家」という人が32.1%あった（図2-1）

図2-1 島外避難してから帰島までのあいだもっとも長くいた場所（N=577人）



なお、この島外避難した場所を属性別にみると、年齢と職業で統計的な有意差があり、年齢別では40歳代と50歳代に、職業別では漁業・サービス業・会社員などに公共の避難施設で過ごした人が多かった（表2-1）。

表2-1 年齢・職業×もっとも長くいた場所

年 齢 × 島外避難の場所

	標本数	公共の 避難施設	親戚や 知人の家	ホテル ・旅館	その他
全 体	563	61.1	32.9	0.4	5.7
20 代	21	57.1	38.1	—	4.8
30 代	92	64.1	26.1	—	9.8
40 代	129	75.2	17.1	—	7.8
50 代	124	73.4	19.4	0.8	6.5
60 代	108	51.9	46.3	—	1.9
70 歳 以 上	89	32.6	64.0	1.1	2.2

(χ^2 検定: $P < 0.01$)

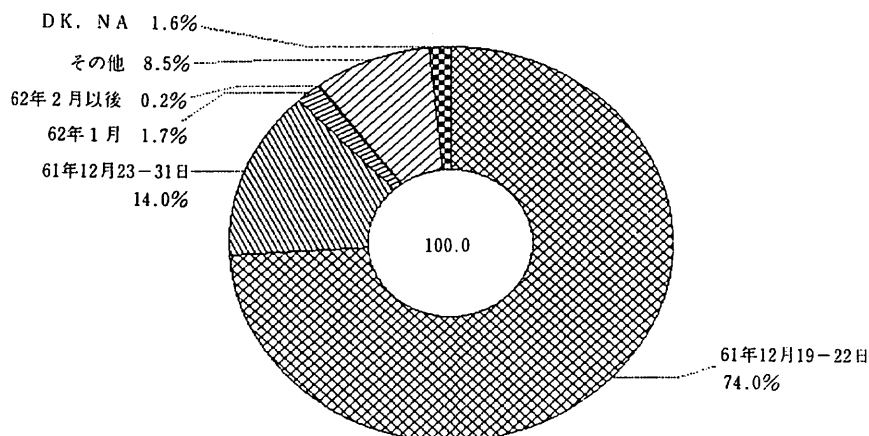
職 業 × 島外避難の場所

	標 本 数	公 共 の 避難施設	親 戚 や 知人の家	ホ テ ル ・ 旅 館	そ の 他
全 体	539	61. 6	32. 3	0. 2	5. 9
農 業	54	55. 6	42. 6	1. 9	—
漁 業	13	84. 6	7. 7	—	7. 7
商 業	63	71. 4	20. 6	—	7. 9
サービス業	57	75. 4	22. 8	—	1. 8
旅館・民宿	34	67. 6	26. 5	—	5. 9
公 務 員	41	61. 0	26. 8	—	12. 2
会 社 員	45	73. 3	17. 8	—	8. 9
無 職（主婦を除く）	61	41. 0	57. 4	—	1. 6
主 婦	132	53. 8	40. 2	—	6. 1
そ の 他	39	66. 7	20. 5	—	12. 8

(χ^2 検定: $P < 0.01$)

またこれらの回答者に対し、帰島した時期について質問したところ、集団帰島が始まった「61年12月19日～22日」までのあいだに帰島した人が74%とほぼ4人に3人の割合に達していたが、一方、「12月23日～31日」という人が14%、さらに「62年1月」とか「62年2月以後」という人もほぼ2%あった（図2-2）。

図2-2 帰島した時期（N=577人）



この帰島時期を属性別にみると、性、年齢、職業、および居住地区などに有意差があって、性別では女性、年齢別では40歳代と50歳代、職業別では漁業や旅館業、また地区別では泉津地区や岡田地区において、比較的早い時期に帰島した人が多かった。なお、下地区と波浮地区の住民は帰島時期が遅くなっているが、これは、こうした地区が他地区にくらべて噴火の危険度が高かったからと考えられる（表2-2）。

表 2-2 性・年齢・職業・居住地区×帰島した時期

性 × 帰島した時期

	標本数	61年 12月19日 ～22日	61年 12月23日 ～31日	62年1月	62年2月	その他
全 体	568	75.2	14.3	1.8	0.2	8.6
男 性	236	67.4	14.8	1.3	—	16.5
女 性	332	80.7	13.9	2.1	0.3	3.0

(χ^2 検定: $P < 0.01$)

年 齢 × 帰島した時期

	標本数	61年 12月19日 ～22日	61年 12月23日 ～31日	62年1月	62年 2月以後	その他
全 体	568	75.2	14.3	1.8	0.2	8.6
20 代	21	66.7	19.0	—	—	14.3
30 代	93	75.3	11.8	3.2	—	9.7
40 代	132	78.0	9.1	—	—	12.9
50 代	126	77.8	9.5	0.8	—	11.9
60 代	111	74.8	18.9	1.8	0.9	3.6
70 歳 以 上	85	69.4	24.7	4.7	—	1.2

(χ^2 検定: $P < 0.01$)

職 業 × 帰島した時期

	標本数	61年 12月19日 ～22日	61年 12月23日 ～31日	62年1月	62年 2月以後	その他
全 体	543	75.0	14.2	1.7	0.2	9.0
農 業	54	75.9	16.7	3.7	—	3.7
漁 業	14	85.7	14.3	—	—	—
商 業	62	62.9	8.1	3.2	—	25.8
サービス業	59	72.9	15.3	—	—	11.9
旅館・民宿	34	79.4	5.9	—	—	14.7
公 務 員	41	75.6	17.1	—	—	7.3
会 社 員	46	58.7	13.0	2.2	—	26.1
無職（主婦を除く）	58	72.4	24.1	1.7	1.7	—
主 婦	134	82.8	14.9	2.2	—	—
そ の 他	41	82.9	7.3	—	—	9.8

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

地 区 × 帰島した時期

	標本数	61年 12月19日 ～22日	61年 12月23日 ～31日	62年1月	62年 2月以後	その他
全 体	568	75.2	4.3	1.8	0.2	8.6
泉 津	29	96.6	—	—	—	3.4
岡 田	66	83.3	17.6	1.5	1.5	6.1
北 の 山	43	76.7	18.6	—	—	4.7
元 町	176	77.3	12.5	0.6	—	9.7
野 増	45	75.6	15.6	4.4	—	4.4
差 木 地	91	70.3	13.2	3.3	—	13.2
下 地	57	66.7	19.3	5.3	—	8.8
波 浮	61	63.9	26.2	—	—	9.8

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

2. 島外避難中の収入減

この約1ヶ月にわたった島外避難のため、どの程度の島民が、どの程度経済的打撃を受けたらうか。「島外避難をしているあいだ、お宅では収入が減りましたか」という質問に対して「非常に減った」と回答した人は42.5%、「少し減った」という人が26.2%であり、7割近い島民が収入減を訴えている。

島外避難中の経済的影響は、年齢別、職業別、地区別でかなり異なっている。まず、年齢別にみると、表2-3に示されるように、島外避難中に収入が減ったという人は、50歳代に最も多く、40歳代、60歳代がそれに続いている。これらの中年層にくらべると、20歳代では収入減を訴えているものが少ない。

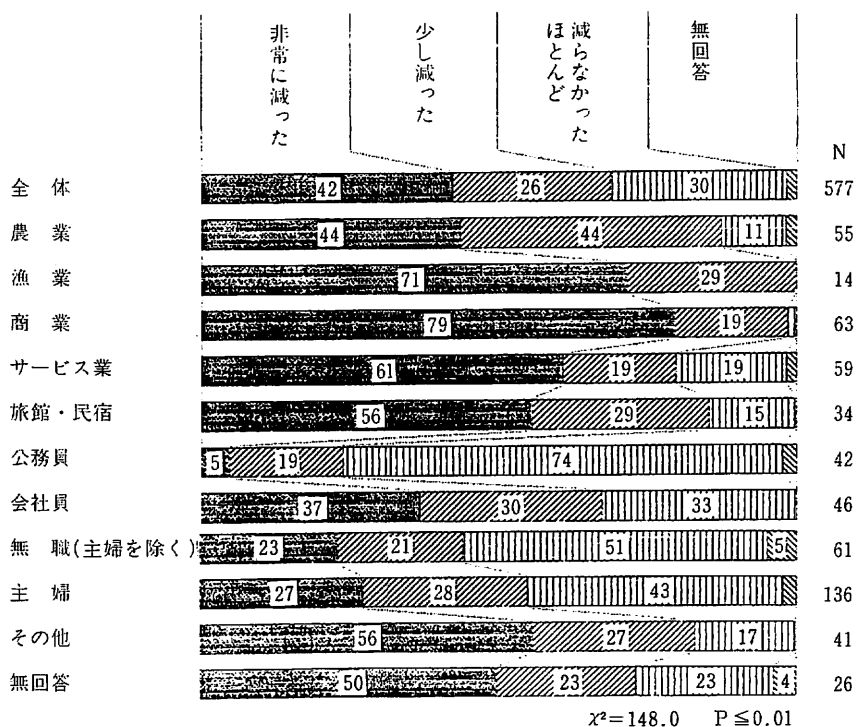
表2-3 避難中の収入源の有無×年齢

	計 (人数)	非常に 減った	少し減った	ほとんど変ら なかった	無回答
全 体	100.0 (577)	42.5	26.2	29.6	1.7
20 代	100.0 (21)	19.0	23.8	57.1	0.0
30 代	100.0 (93)	37.6	22.6	36.6	3.2
40 代	100.0 (133)	49.6	21.1	28.6	0.8
50 代	100.0 (128)	50.8	28.9	20.3	0.0
60 代	100.0 (113)	43.4	23.9	31.0	1.8
70 歳 以 上	100.0 (89)	29.2	37.1	29.2	4.5

($\chi^2 = 36.18$ $P < 0.01$)

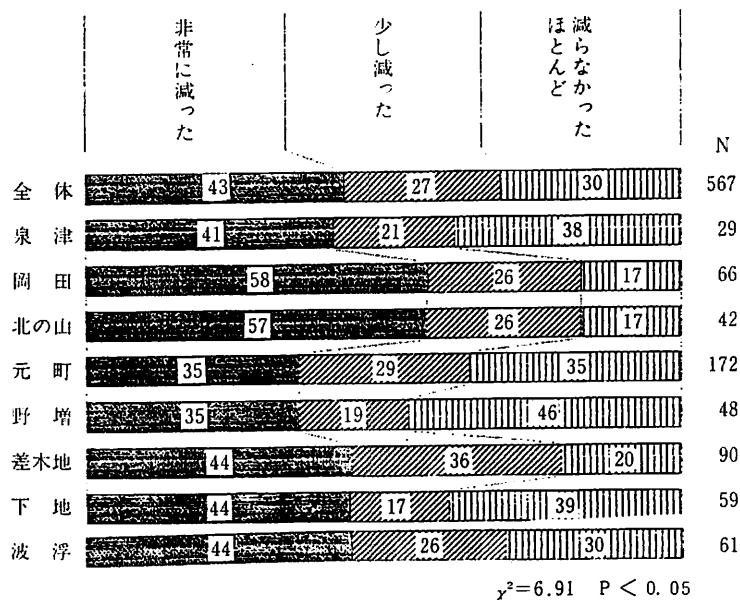
また、図2-3に見られるように、島外避難のために収入が大幅に減ったという人は、商業や漁業従事者に多く、また、サービス業や旅館・民宿を経営しているものでも過半数を占めている。他方、公務員や会社員の間では、島外避難により経済的打撃を受けたものは比較的少ない。

図2-3 島外避難中の収入減の有無－職業別



地域別で見ると、どの地域でも、収入が「ほとんど減らなかった」という人は半数以下であるが、「非常に減った」という人は、岡田地区や北の山地区では6割近くになっているのが目につく。それにくらべると、元町や野増地区ではそのように訴える人は相対的に少ない(図2-4)。

図 2-4 避難中の収入減の有無—地域別



3. 帰島後1年間の収入減

また、帰国後の1年間で収入が減ったかどうかをきいた質問では、約半数（50.6％）が「変わらない」と答えているが、37.4％の島民は「収入が減った」としている。「収入はむしろ増えたと思う」という人は、2.1％ときわめて少ない。

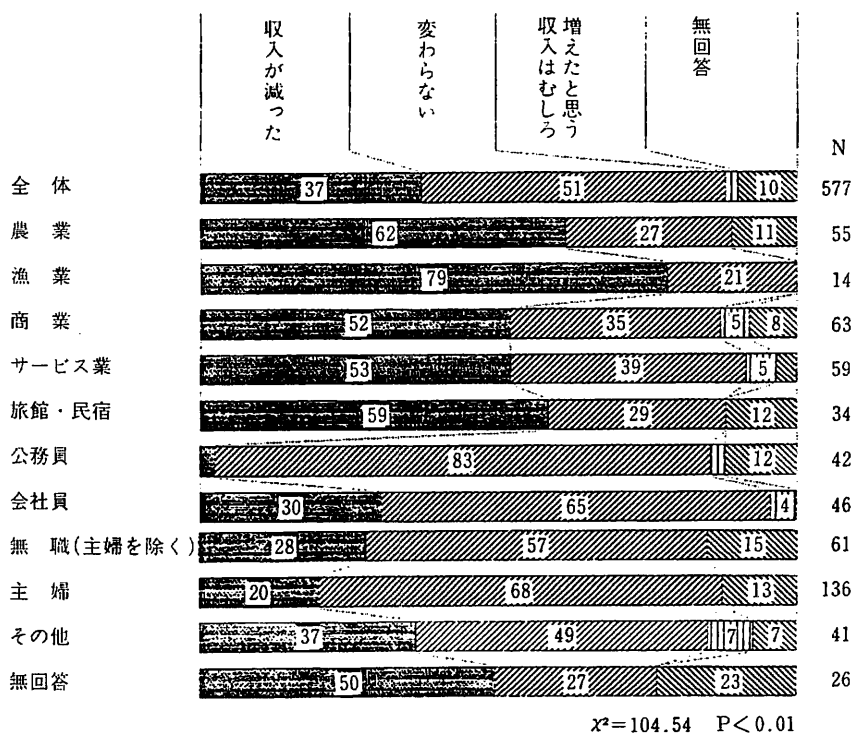
表 2-4 帰島後1年間の収入源の有無×年齢別

	計 (人数)	収入が 減った	変わらない	収入はむしろ 増えたと思う	無回答
全 体	100.0 (577)	37.4	50.6	2.1	9.9
20 代	100.0 (21)	9.5	71.4	0.0	19.0
30 代	100.0 (93)	19.4	68.8	3.2	8.6
40 代	100.0 (133)	36.1	55.6	3.0	5.3
50 代	100.0 (128)	44.5	43.0	3.1	9.4
60 代	100.0 (113)	47.8	39.8	0.9	11.5
70 歳以上	100.0 (89)	41.6	43.8	0.0	14.6

($\chi^2 = 27.66 \quad P < 0.01$)

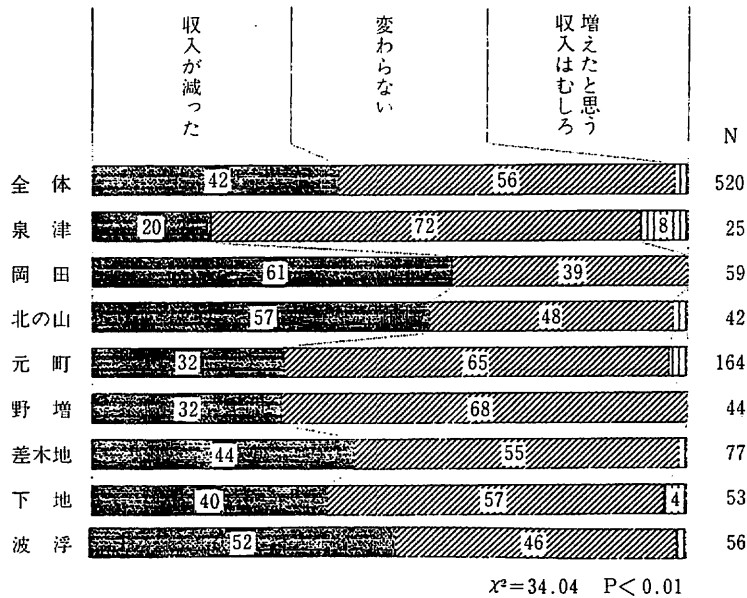
年齢別では、「収入が減った」という人は20代、30代では少ないが、50代以上では4割を越え、30代でも約3分の1いる（表2-4）。職業別では、漁業従事者に収入減を訴えるものが8割以上いるのが目立ち、農業、商業、サービス業、旅館・民宿などを経営している人でも過半数は経済的打撃を感じている。これらに対し、公務員や会社員など給与生活者には「収入が減った」というものが少ない（図2-5）。

図2-5 帰島後1年間の収入減の有無－職業別



地区別では、岡田、北の山の両地区で、「収入が減った」という人が6割前後いることがわかる。また、波浮地区もこの両地区に次いで多い。泉津、元町、野増地区ではそのような人は3分の1以下である（図2-6）。

図 2-6 帰島後 1 年間の収入減の有無—地域別



4. 収入減への噴火の影響

帰島後の 1 年間の収入が、噴火以前の年間収入とくらべてどの程度減ったかでは、「50 万円未満」という人が 21.3 % で最も多かった。その次に、「100 万円以上 200 万円未満」という人が 19.0 % ，「50 万円以上 100 万円未満の人が 10.6 % であった。

このような帰島後の収入減は、噴火の影響だと考えている人がほとんどである。収入減には、「噴火の影響がおおいにあると思う」と考えている人が 63.4 % もいるし、「噴火の影響がかなりあると思う」という人の 19.9 % ，「噴火の影響も多少あると思う」という人の 14.4 % を加えると、収入減を被った人のほぼ全員が噴火が原因と考えている。

収入減が「噴火の影響がおおいにある」と考えている人は、どの年齢層にも 6 割前後とほぼ均等にしているが、職業別では図 2-7 に見られるように、経済的に大きな打撃を受けている人は商業、サービス業、旅館・民宿経営者の 7 割以上を占めている。

しかし、地区別では、経済的打撃を受けた人が多かった岡田、北の山地区よりも、泉津、差木地、下地などの方が、収入減の原因として噴火を考えているものが多い(図 2-8)。

図 2-7 収入減への噴火の影響—職業別

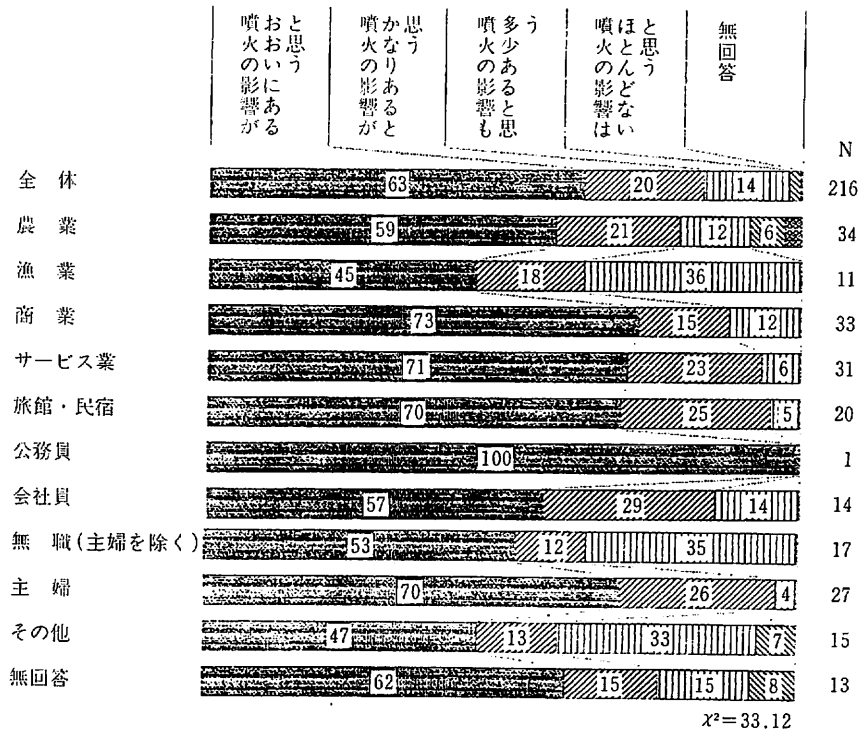
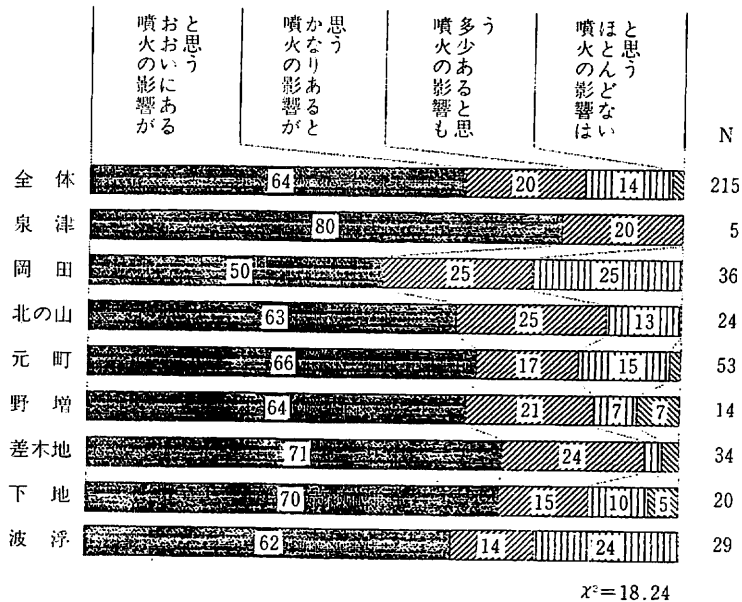


図 2-8 収入減への噴火の影響—地区別



5. 帰島後の生活の変化

帰島後の生活状態が噴火前とくらべて苦しくなったという人は、それほど多くはない。過半数の 57.2 % の人は、生活状態は「噴火前とほとんど変わらない」と答えており、噴火前とくらべて生活が「非常に苦しくなった」(8.3 %), 「かなり苦しくなった」(11.1 %), 「少し苦しくなった」(20.6 %) などの生活苦を訴えている人が少ない。しかし、表 2-5 に見られるように、50代では、噴火前とくらべて生活が苦しくなったという人が過半数を占めていることが目につく。また、職業別では、図 2-9 でみられるように、公務員、会社員、無職、主婦の 6 割以上は、帰島後の生活が「噴火前とほとんど変わらない」と答えているが、漁業従事者の 9 割以上を筆頭に、農業、商業、サービス業、旅館・民宿などでは、過半数が噴火前より生活が苦しくなったと回答している。

表 2-5 帰島後の生活変化×年齢

	計 (人数)	非常に苦 しくなっ た	かなり苦 しくなっ た	少し苦し くなっ た	変わら ない	楽にな った	無回答
全 体	100.0 (577)	8.3	11.1	20.6	57.2	0.5	2.3
20代	100.0 (21)	0.0	4.8	19.0	71.4	0.0	4.8
30代	100.0 (93)	2.2	7.5	15.1	72.0	1.1	2.2
40代	100.0 (133)	10.5	8.3	21.8	57.9	0.8	0.8
50代	100.0 (128)	12.5	16.4	24.2	45.3	0.8	0.8
60代	100.0 (113)	8.0	14.2	20.4	54.0	0.0	3.5
70歳以上	100.0 (89)	7.9	9.0	20.2	58.4	0.0	4.5

$$(\chi^2 = 28.74 \quad P < 0.01)$$

また、地区別では、岡田、北の山地区で帰島後の生活変化を指摘しているものが多く、他の地区では、噴火前と現在の生活は「変わらない」と回答しているのが過半数を占めているという地域差がみられる(図 2-10)。

図 2-9 帰島後の生活の変化-職業別

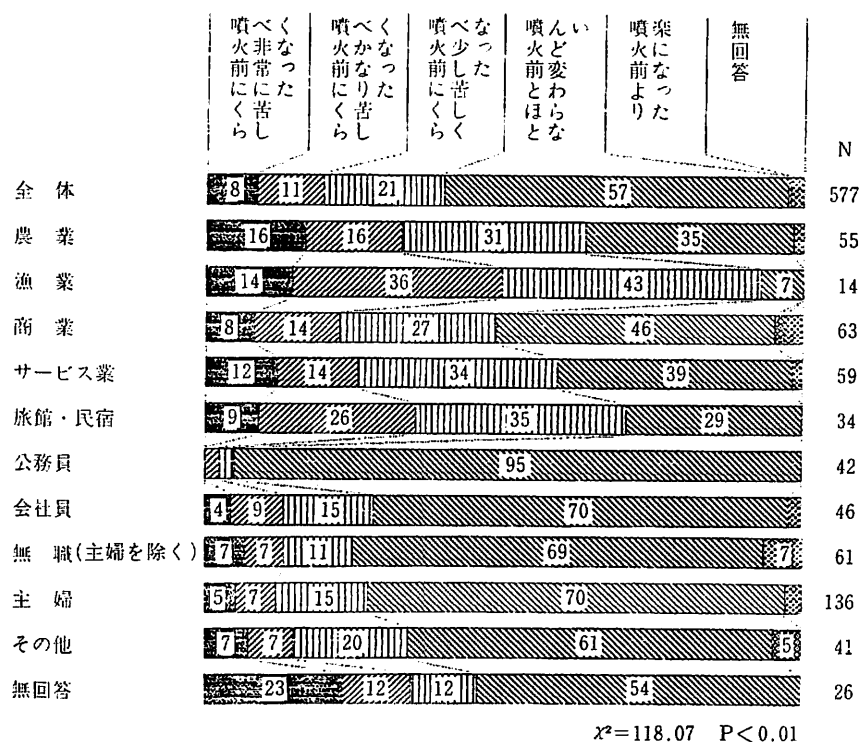
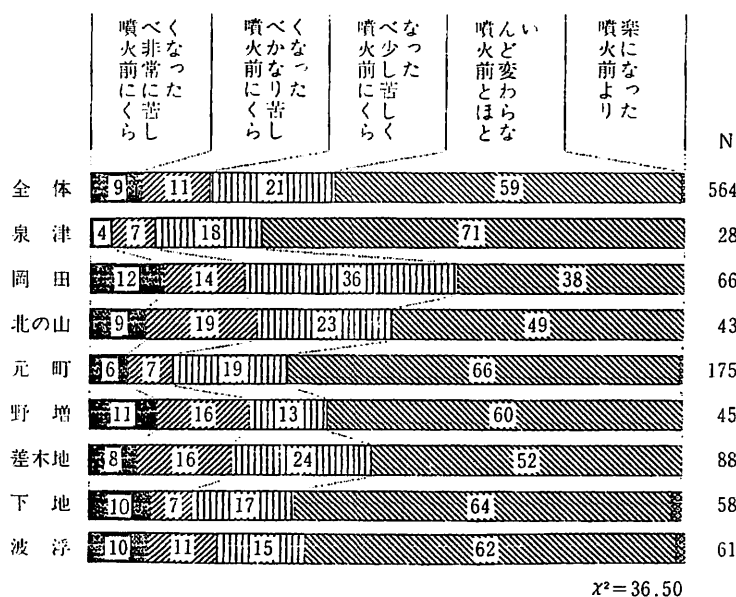


図 2-10 帰島後の生活の変化-地区別



6. 大島全体の地域経済の変化

個人の生活とは別に、伊豆大島の地域経済が噴火後変わったかどうかでは、「噴火前にくらべ非常に苦しくなった」という人が10.4%、「噴火前にくらべかなり苦しくなった」が23.4%、「噴火前にくらべ少し苦しくなった」が32.8%で、7割近くが地域経済の悪化を認めている。

地域経済が噴火前より「非常に苦しくなった」とか「かなり苦しくなった」というように深刻に考えている人は、50代、60代の年齢層に多くみられる（表2-6）。また、職業別では、そのように現状を深刻にみている人は農業、漁業、商業、サービス、旅館・民宿などの従事者に多い（図2-11）。地区別では、泉津、下地、北の山、波浮の4地区ではやや少ないが、他の地区では、地域経済がかなり悪化したことを認めているものが4割前後を占めている。

表2-6 大島全体の地域経済の変化×年齢

	計 (人数)	非常に苦 しくなっ た	かなり苦 しくなっ た	少し苦し くなっ た	変わら ない	楽に なった	無回答
全 体	100.0 (577)	10.4	23.4	33.8	23.2	4.2	6.1
20代	100.0 (21)	4.8	19.0	52.4	19.0	4.8	0.0
30代	100.0 (93)	5.4	15.1	36.6	30.1	8.6	4.3
40代	100.0 (133)	7.5	27.1	33.8	21.1	5.3	5.3
50代	100.0 (128)	16.4	28.1	29.7	18.8	3.1	3.9
60代	100.0 (113)	15.9	24.8	25.7	23.0	2.7	8.0
70歳以上	100.0 (89)	5.6	19.1	36.0	27.0	1.1	11.2

$$(\chi^2 = 35.74 \quad P < 0.05)$$

図 2-11 大島全体の地域経済の変化—職業別

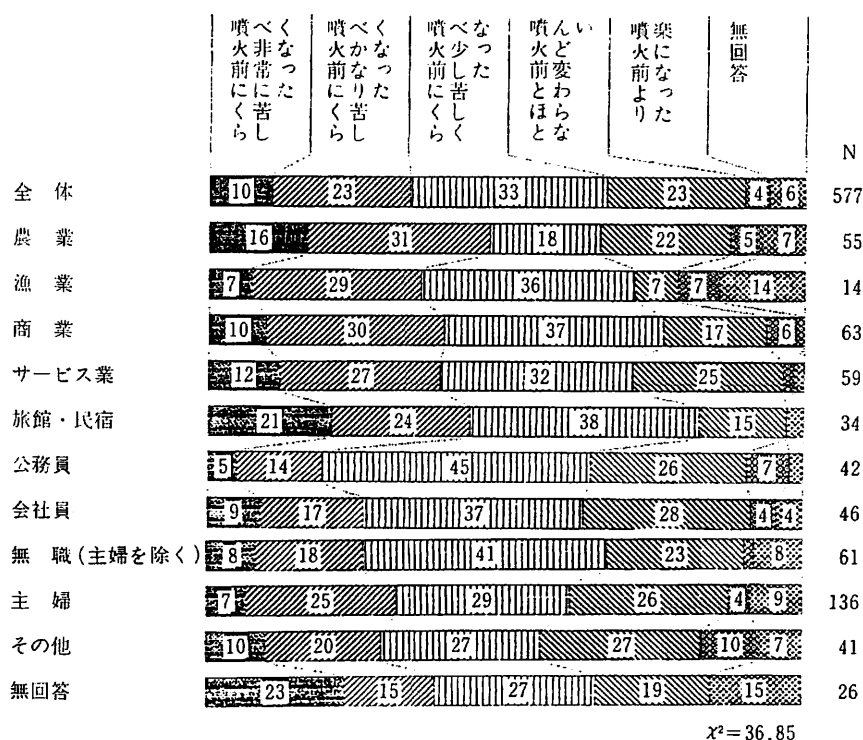
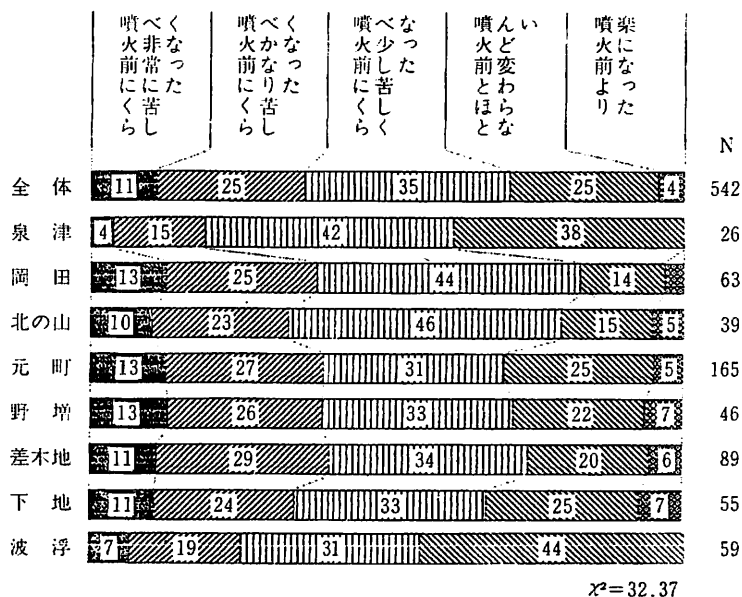


図 2-12 大島全体の地域経済の変化—地域別



第3章 再噴火への不安

1. 再噴火への不安

次に、再噴火への住民意識について触れていく。

アンケート調査では、まず調査対象者に対して、昭和61年11月21日のような大噴火がふたたび発生する不安をもっているかどうかたずねた。その結果、大島がふたたび大噴火するかもしれないという不安を感じている人は、37.6%となっていた（「不安でたまらない」＋「かなり不安だ」）。これは、住民のほぼ4割が不安を感じているということであり、絶対数としては決して低い数字とはいえない。しかし前回行なった調査とくらべると、62年2月時点では、不安を感じていた人の比率は53.2%と過半数を占めていたので、相対的にみると、この1年のあいだに住民の噴火不安はやや減少しているといえよう（図3－1）。

なお、この変数と統計的に有意に関連している属性は性別だけであり、男性にくらべて女性のほうが再噴火への不安が強かった（表3－1）。

図3－1 三原山の再噴火への不安（昭和62年2月調査との比較）

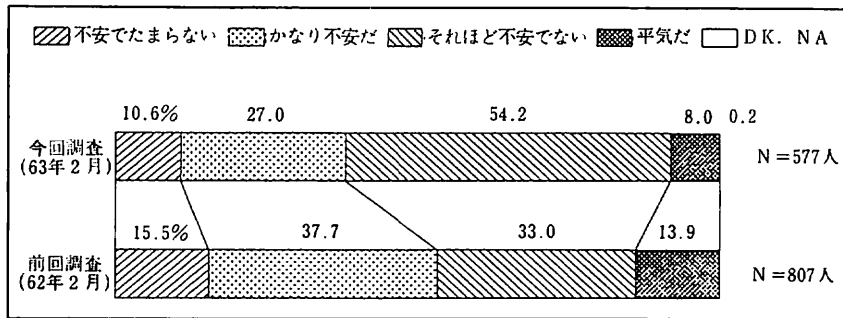


表3－1 性×再噴火への不安
性×大噴火への不安

	標本数	不安で たまらない	かなり 不安だ	それほど不安 ではない	平気だ
全 体	576	10.6	27.1	54.3	8.0
男 性	237	7.2	25.3	57.0	10.5
女 性	339	13.0	28.3	52.5	6.2

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

2. 再噴火の可能性

次に、住民が今後も61年11月21日のような噴火が起こる可能性があると思っているかどうかをみると、61年の噴火より大きいかわるいは同規模の噴火が起こると思っている人は16.3%にすぎず（「11月21日より大きな噴火が起こる」＋「11月21日と同じくらいの噴火が起こる」）、他方、73%もの圧倒的多数が噴火があっても61年の噴火より大きくならないだろうと答えた。噴火予想については、楽観的な人が多いということである。前回の調査では、大噴火を予想していた住民が37.3%、小噴火を予想していた人が49.6%と比較的数字が接近していたので、継時的にみても住民意識は楽観的な方向に変化しているといえよう（図3-2）。

なお、この再噴火の予想を属性別にみると、年齢だけに有意差がみられた。20歳代の若年層に大噴火を予想している人が飛び抜けて多くなっているが、しかしその理由は定かではない（表3-2）。

図3-2 三原山の再噴火の可能性（昭和62年2月調査との比較）

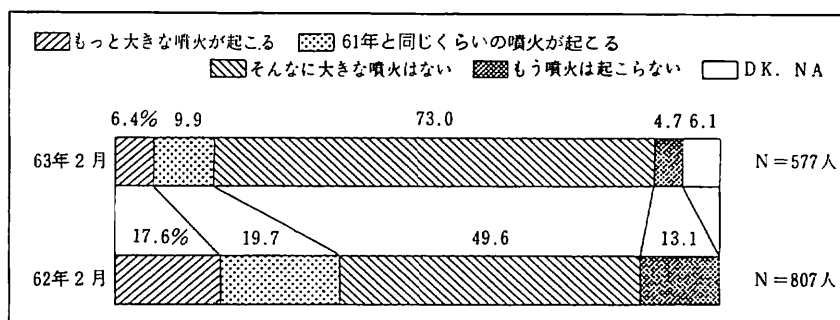


表3-2 年齢×再噴火の可能性

年齢×大噴火の可能性

	標本数	もっと大きな噴火が起こると思う	61年と同じくらいの噴火が起こる	61年の時ほど大きくはない	もう噴火は起こらないと思う
全 体	542	6.8	10.5	77.7	5.0
20 代	20	20.0	10.0	70.0	—
30 代	131	8.8	16.5	72.5	2.2
40 代	121	6.1	5.3	84.7	3.8
50 代	108	8.3	12.4	74.4	5.0
60 代	71	5.6	13.0	75.0	6.5
70歳以上	91	1.4	5.6	83.1	9.9

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

以上述べたように、大島の噴火不安についても大噴火の可能性についても、時の経過とともに悲観的な人の割合は減っており、これは住民の危険感がしだいに薄くなってきたことを示すものといえる。

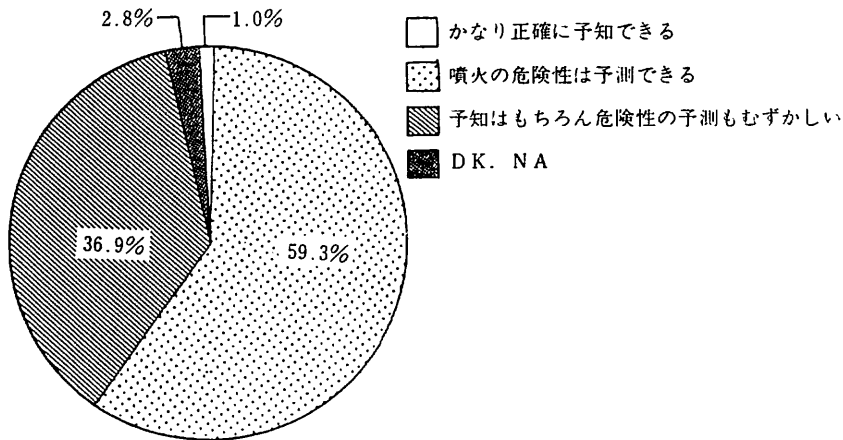
第4章 噴火予知への信頼

1. 噴火予知一般への信頼

次に、「噴火予知」に関する住民意識について、いくつかの調査結果を紹介する。

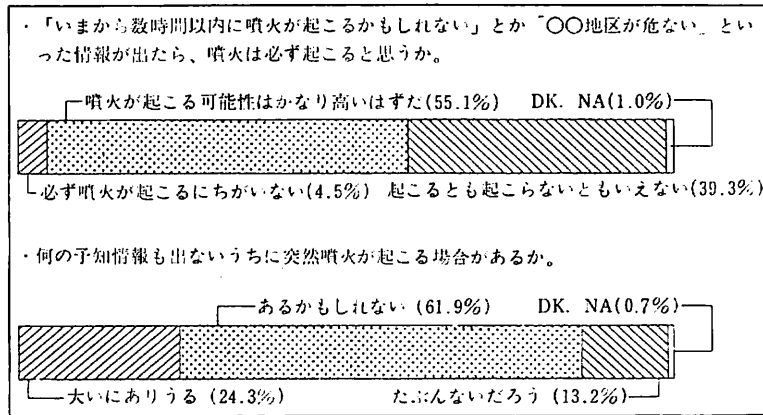
アンケート調査ではまず、現在の科学技術の水準で大噴火の発生をあらかじめ予知できると思うか、という噴火予知一般についての信頼度をたずねた。その結果、「かなり正確に予知できる」という人は1%ときわめて少なく、他方、「噴火の危険性は予測できると思う」人が59.3%、「予知はもちろん危険性の予測も難しい」と非常に悲観的な人が36.9%となっていた（図4-1）。このことは、現在の噴火予知に関する住民の信頼と期待がさほど高くないことを示すものであろう。

図4-1 噴火予知一般への信頼（N=577人）



このように噴火予知に対する信頼はあまり高いとはいえないが、このことは別の質問からもうかがうことができる。すなわち第一に、もし「噴火予知連絡会」から数時間以内に噴火が起こるかもしれないとか、〇〇地区が危ないとかいう情報が出されたらどうするかについてたずねたところ、「噴火が起こる可能性はかなり高いはずだ」という回答が55.1%と過半数に達しているものの、「必ず噴火が起こるにちがいない」という人は4.5%にすぎず、他方「（噴火が）起こるとも起こらないともいえない」という人が39.3%もいた。また第二に、「噴火予知連絡会」から何の情報も出ないうちに突然噴火が起こる場合もあると思うかとたずねたところ、「大いにありうる」という回答が24.3%にものぼり、「あるかもしれない」（61.9%）を加えると、実に8割以上の住民が突発災害の可能性を認めていた（図4-2）。このように、噴火予知については、「空振り」や「見逃し」の危険を懸念する人は決して少なくなく、とくに「見逃し」については大多数がその可能性をあげていたのである。

図 4-2 噴火予知の「空振り」と「見逃し」に対する評価 (N=577人)



なお、この2つの変数のうち突発災害の可能性に関しては、性、年齢、職業の3つの属性と統計的に有意な関係があって、性別では男性、年齢では20歳代・30歳代の若年層、職業別では公務員・会社員・漁業・商業従事者などにおいて、何の予知もないのに突然噴火が起こる可能性もあると考えている人が多くなっていた(表4-1)。

表 4-1 性・年齢・職業×予知がないのに噴火する可能性
性×予知がない場合の噴火の可能性

	標本数	大いにありうる	あるかもしれない	多分ないだろう
全 体	573	24.4	62.3	13.3
男 性	238	30.3	55.9	12.9
女 性	335	20.3	66.9	12.8

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

年 齢 × 予知がない場合の噴火の可能性

	標本数	大いにありうる	あるかもしれない	多分ないだろう
全 体	573	24.4	62.3	13.3
20 代	21	38.1	57.1	4.8
30 代	93	35.5	53.1	6.5
40 代	132	18.2	71.2	10.6
50 代	128	21.1	59.4	19.5
60 代	111	23.4	62.2	14.4
70 歳以上	88	25.0	59.1	15.9

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

職 業 × 予知がない場合の噴火の可能性

	標 本 数	大 い に あ り う る	あ る か も し れ な い	多 分 な い だ ろ う
全 体	547	24. 3	62. 9	12. 8
農 業	55	20. 0	61. 8	18. 2
漁 業	14	28. 6	64. 3	7. 1
商 業	62	27. 4	50. 0	22. 6
サービス業	59	25. 4	62. 7	11. 9
旅館・民宿	34	14. 7	70. 6	14. 7
父 務 員	42	38. 1	57. 1	4. 8
会 社 員	46	32. 6	47. 8	19. 6
無 職（主婦を除く）	59	22. 0	71. 2	6. 8
主 婦	35	23. 0	65. 2	11. 9
そ の 他	41	14. 6	80. 5	4. 9

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

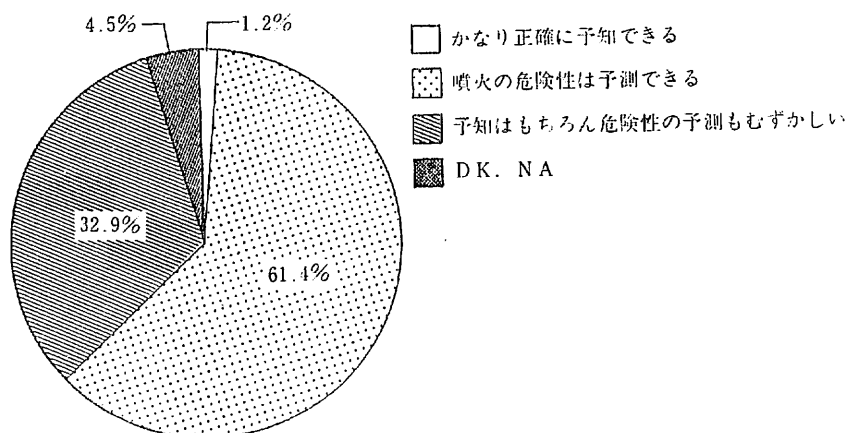
2. 三原山噴火予知への信頼

伊豆大島では、61年11月21日の大噴火後、11億円以上の巨費を投じて、地震計や傾斜計を大幅に増設するとともに、地磁気・電気抵抗・ガス・地下水・地温などを観測する機器が設置され、全国の火山のなかでは飛び抜けて充実した観測体制がつくられることになった。そこで次に、こうした観測体制の充実を前提として、とくに今後の三原山の噴火予知についてたずねてみた。

しかし、その結果も噴火予知信頼度とはほぼ同じ傾向であり、「噴火の危険性は予測できると思う」人は多少増えて61.4%、「予知はもちろん危険性の予測も難しい」という人がやや減って32.9%となっていたが、絶対数でみると、やはり予知は難しいという意識が一般的であるといえよう（図4-3）。

なお、この変数と統計的に有意に関係する属性は一つもなかった。

図4-3 三原山の噴火予知への信頼（N=577人）



3. 予知情報に対する評価

また今回の調査では、噴火予知情報の出し方について、これを積極的に出すべきか、あるいは情報を出すのは慎重にすべきかをたずねた。

具体的には、「予知情報は噴火による被害を防ぐ上で非常に有効なものであるから、噴火が発生する可能性が多少でもあるなら、空振りを恐れず積極的に出すべきだ」という意見と、「予知情報は、住民の混乱や農業・漁業・商業などの経済的損失を招くので、確実に噴火が起こる見通しがよほど確かになるまで出すべきではない」という意見のどちらに賛成をたずねたが、その結果、前者の「予知積極論」が45.8％、後者の「予知消極論」が32.4％となっており、予知積極論が多数を占めていた（図4-4）。

図4-4 噴火予知に関する意見（N=577人）

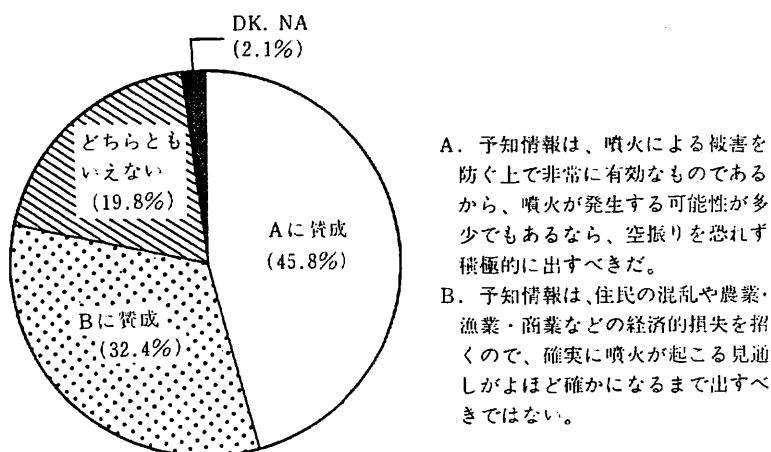


表4-2 性・職業×噴火予知に関する意見
性×予知の「空振り」について

	標本数	Aに賛成	Bに賛成	どちらともいえない
全 体	565	46.7	33.1	20.2
男 性	232	53.4	34.9	11.6
女 性	333	42.0	31.8	26.1

（ χ^2 検定： $P < 0.01$ ）

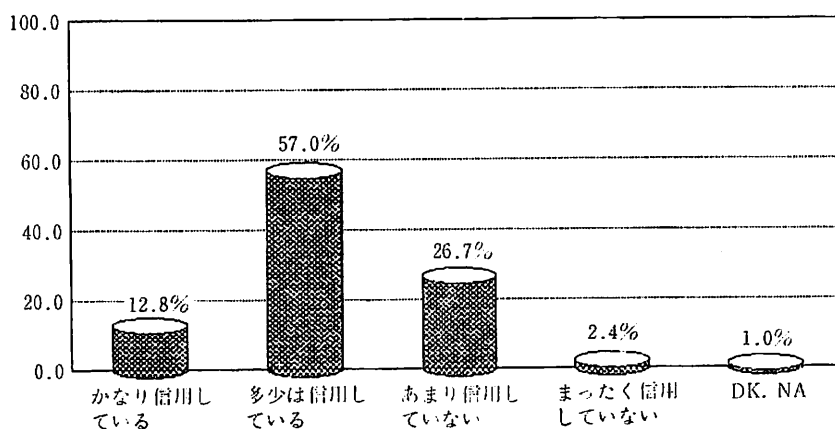
職 業×予知の「空振り」について

	標 本 数	Aに賛成	Bに賛成	どちらとも いえない
全 体	541	47.1	32.3	20.5
農 業	55	52.7	30.9	16.4
漁 業	14	35.7	35.7	28.6
商 業	62	43.5	40.3	16.1
サービス業	57	40.4	43.9	15.8
旅館・民宿	33	30.3	42.4	27.3
公 務 員	42	73.8	14.3	11.9
会 社 員	46	52.2	30.4	17.4
無 職（主婦を除く）	59	50.8	30.5	18.6
主 婦	133	42.1	29.3	28.6
そ の 他	40	50.0	30.0	20.0

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

次に、噴火予知連絡会のような公的機関とは別に、いろいろな学者が個人的に述べる推測ないし意見をどのくらい信用するかをたずねたところ、「あまり信用していない」という人が26.7%、「まったく信用していない」という人が2.4%と、ほぼ3人に1人は「不信派」だった。しかし、「かなり信用している」という回答が12.8%、「多少は信用している」という回答が57.0%にもものぼっており、場合によっては、噴火予知連絡会の統一見解やコメントのほかに、個々の学者の個人的推測が入り乱れ、住民が混乱や動揺におちいる危険性もないとはいえない（図4－5）。

図4－5 学者の個人的意見への信頼（N＝577人）



第5章 行政の防災対策への評価

1. 行政の防災対策への評価

ところで、昭和61年11月の大噴火以後、伊豆大島では、ふたたび起こるかもしれない再噴火という事態に備え、先に触れた「観測体制」の整備のほか、国・東京都・大島町などが一体となって、さまざまな防災対策を実施してきた。

その概要をざっと述べると、

(1) 住民・観光客への通報体制の整備

- ① 同報無線や移動系無線の増設（後述）
- ② 町内全世帯への戸別受信機の配備（後述）
- ③ 東海汽船バスへの無線機の搭載（大島支店とバス38台に無線機を配置し、災害時に支店から各車両に情報を流せるようにした）
- ④ 旅館・消防団・公共施設への緊急放送受信機の配備（旅館・公共施設・消防団に対し、テレビ用受信機100台、ラジオ用受信機100台を配備した）

(2) 防災関係機関等の情報連絡体制の強化

- ① ホットラインの整備（大島測候所、東京大学地震研究所、大島警察署、大島支庁、大島町役場のあいだにホットラインを設置した）
- ② 特設公衆電話の設置（島内の避難所すべてに特設公衆電話を設置した）
- ③ 通信衛星・特殊交換機の活用（通信衛星等の活用により、NTT大島局が被災しても他の島の局は影響を受けない方式に改善された）

(3) 住民・観光客の避難誘導體制の整備

- ① 「避難の心得」や「防災手帳」の作成（避難時の注意事項や、住民および観光客の避難誘導要領を示したもので、大島全世帯および観光客に配布した）
- ② 避難所・避難道路・避難港への夜間照明の整備（災害時の避難所14カ所のうち夜間照明のなかった11カ所に発電機つきの照明装置を、南部地区4カ所にヘリコプター用の投光機を、避難道路になっている都道に25基・町道に50基の夜間照明を、元町港・岡田港に投光機17台をそれぞれ配備した）
- ③ 消防団の通信機器の整備（出力0.5Wのトランシーバー85台を消防団に配布し、また63年度には分団ごとに1Wの消防団無線機を3台ずつ配布した）
- ④ 防災市民組織の結成（後述）

(4) 避難施設緊急整備計画事業

- ① 都道・町道の整備（都道3路線、町道3路線を整備した）
- ② 港湾の整備（元町港・岡田港の岸壁を延長して避難広場を設置し、波浮港に4,000トンのバースを新設した）
- ③ 退避壕の整備（温泉ホテル・筆島・差木地など7カ所に退避壕を整備した）

- ④ ヘリコプター発着場の設置（差木地と泉津の2カ所にヘリコプターの発着場を設置した）
- ⑤ 避難休憩舎等の整備（海のふるさと村に2棟、御神火茶屋に1棟の避難休憩舎を設置した）
- ⑥ 学校・公民館の不燃堅牢化（波浮小学校など4つの小学校体育館、都立大島南高等学校体育館、および差木地公民館の不燃堅牢化を行なった）

(5) 災害備蓄倉庫・消防施設等の整備

- ① 災害備蓄倉庫の整備（岡田小学校、泉津公民館、差木地小学校の3カ所に災害備蓄倉庫を整備し、毛布・食料等を保管した）
- ② 飲料水兼用貯水槽の設置（下地地区に100立方メートルの飲料水兼用貯水槽を設置した）
- ③ 消防ポンプ車の配備（消防団の野増分団に対し、CD-1型の消防ポンプ車1台を配備した）
- ④ 大島火山センター（仮称）の建設決定（住民の防災意識の高揚を図るため、防災教育を行なう火山センターの設置を決めた。またこのセンターは備蓄倉庫も兼ね、周囲には避難のための広場も確保している）

などの対策を実施している。^(註2)なお、これらの対策の詳細については、巻末付属資料2の「聞き取り調査」を参照されたい。

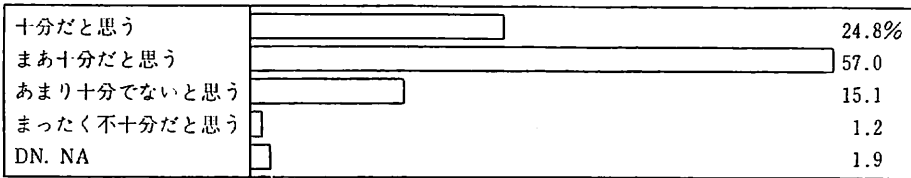
では、こうしたさまざまな防災対策を大島住民は、いったいどう評価しているだろうか。

調査結果をみると、行政機関が実施してきた各種の防災対策のうちでもっとも高い評価を受けているのは、同報無線や戸別受信機の設置・東海汽船バスへの無線機設置など「情報伝達体制の整備」であり、「十分だと思う」人と「まあ十分だと思う」人を合わせて、81.8%の多数にのぼっていた。次いで評価が高かったのは「防災市民組織の結成」であり（63.6%）、以下、高い順から、都道・町道など「避難道路の整備」（52.7%）、避難所・避難道路・港などへの「夜間照明の設置」（44.5%）、「災害備蓄倉庫の建設」（43.3%）、元町港・岡田港・波浮港など「港湾の整備」（35.4%）、温泉ホテル・筆島・差木地・リス村などへの「退避壕の設置」（27.4%）と続いていた（図5-1）。

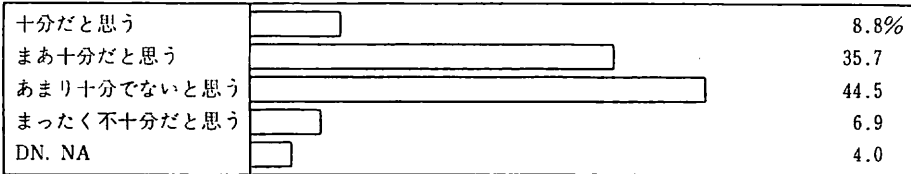
なお、これらの変数と統計的に有意な関係のある属性は、「情報伝達体制の整備」と性別、「港湾の整備」と居住地区、「退避壕の設置」と性別だけだった。すなわち、「情報伝達の整備」は男性より女性の評価が高く、「港湾の整備」は他地区にくらべて岡田や北の山の住民の評価が高く、「退避壕の設置」は男性より女性の評価が高かったのである（表5-1）。

図5-1 行政の防災対策に対する評価（N=577人）

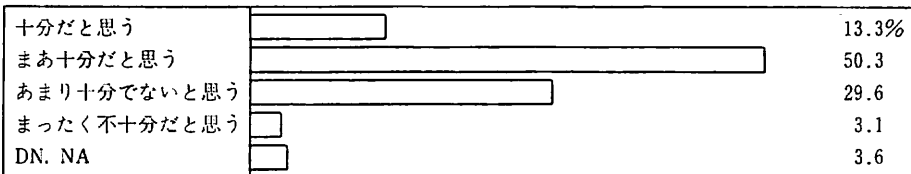
① 情報伝達体制（同報無線や戸別受信機の設置・東海汽船バスへの無線機設置など）



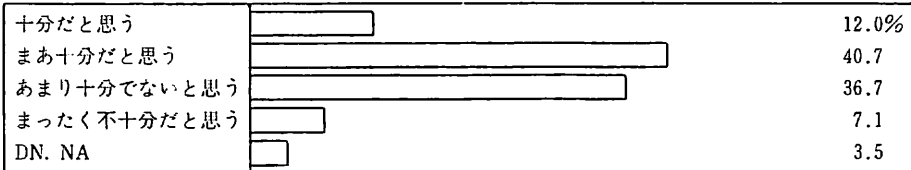
② 夜間照明（避難所・避難道路・港などへの夜間照明の設置）



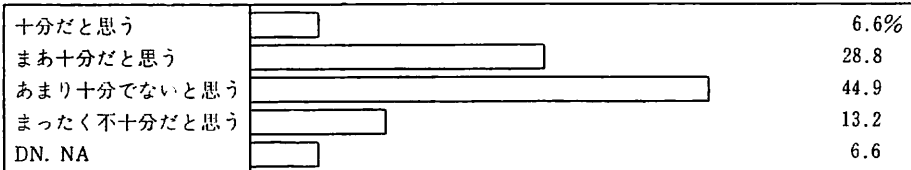
③ 防災市民組織の結成



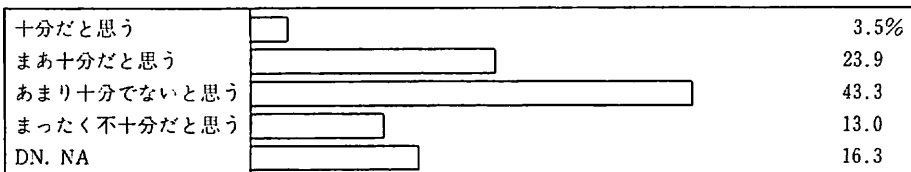
④ 避難道路（都道・町道の整備）



⑤ 港湾（元町港・岡田港・波浮港の整備）



⑥ 退避壕（温泉ホテル・筆島・差木地・リス村などへの退避壕の設置）



⑦ 災害備蓄倉庫（備蓄倉庫3棟の建設）

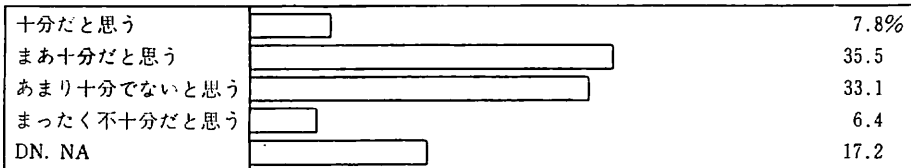


表 5－1 行政の防災対策の評価と関連する要因

性×情報伝達体制

	標本数	十分だ と思 う	まあ十分 だと思 う	あま り 十分で ない と思 う	ま った く 不 十分 だ と思 う
全 体	566	25.3	58.1	15.4	1.2
男 性	235	19.6	61.3	17.0	2.1
女 性	331	29.3	55.9	14.2	0.6

(χ^2 検定：P<0.05)

地 区×港 湾

	標本数	十分だ と思 う	まあ十分 だと思 う	あま り 十分で ない と思 う	ま った く 不 十分 だ と思 う
全 体	539	7.1	30.8	48.1	14.1
泉 津	25	8.0	28.0	52.0	12.0
岡 田	63	9.5	42.9	42.9	4.8
北 の 山	40	10.0	35.0	50.0	5.0
元 町	163	6.1	34.4	51.5	8.0
野 増	44	9.1	34.1	47.7	9.1
差 木 地	86	5.8	29.1	44.2	20.9
下 地	58	8.6	17.2	37.9	36.2
波 浮	60	3.3	20.0	56.7	20.0

(χ^2 検定：P<0.01)

性×退 避 壕

	標本数	十分だ と思 う	まあ十分 だと思 う	あま り 十分で ない と思 う	ま った く 不 十分 だ と思 う
全 体	483	4.1	28.6	51.8	15.5
男 性	217	5.5	24.0	50.2	20.3
女 性	266	3.0	32.3	53.0	11.7

(χ^2 検定：P<0.05)

2. 防災無線に対する評価

次に、行政機関のこれらの防災対策のうち、とくに「情報伝達体制の整備」、「防災市民組織の結成」、および「防災訓練の実施」の三つをとりあげ、これを住民がどのように評価しているかについて述べておく。

まず、「情報伝達体制の整備」からはじめよう。

大島町では、61年11月21日の大噴火の経騒を踏まえて、住民や観光客への情報伝達体制を整備した。

これをもっと具体的にいうと、まず①「屋外拡声方式の同報無線」については、中継局

2ヶ所、同報無線子局（屋外拡声方式）13ヶ所を増設し、また②「戸別受信方式の同報無線」については、島内の全世帯（4,330世帯）および消防団・公共施設・事業所などに戸別受信機を配備し、③「移動系無線」については、5Wの子局27台、10Wの子局13台を増設したほか、さらに前述のように、④東海汽船バス38台に無線機を搭載し、⑤緊急警報放送受信機（テレビ100台・ラジオ100台）を旅館・消防団・公共施設などに配布したのである。^{（注3）}

そこで、本調査では、こうした情報伝達体制の整備の結果、大噴火の前にくらべ町からの情報がどのくらいよく聞こえるようになったかをたずねた。

その結果をみると、「ほとんどすべて聞こえるようになった」という回答が64.6%と大多数を占めていた。61年11月の噴火のときの防災無線の聴取度をみると、「音もよく聞こえたとし放送内容もだいたい全部理解できた」という人が38.1%だったので、これは防災無線の充実を示すデータといえる。しかし依然として、「まだ聞こえない場合がある」とか「まだ聞こえない場合のほうが多い」という回答が合わせて31.7%もあり、地域によってはよりいっそうの整備が必要だともいえる（図5-2）。

また、この防災無線の聴取度と関連している属性は職業だけだった。すなわち、旅館・民宿業や公務員、主婦などで防災無線がよく聞こえるという人が多くなっていた（表5-2）。

なお、まだ防災無線が「聞こえない」という人があげた理由としては、「強風や風向きなどのため」という気象条件がもっとも多く、次いで、「山・海・畑などにいるとき」、「屋外にいるとき」、「町から離れているとき」などの場所的要因、「車のなかにいるとき」、「買い物中」、「仕事をしているとき」などの状況的要因が比較的多かった（巻末付属資料1を参照）。

図5-2 大島町の防災無線の聴取度（N=577人）

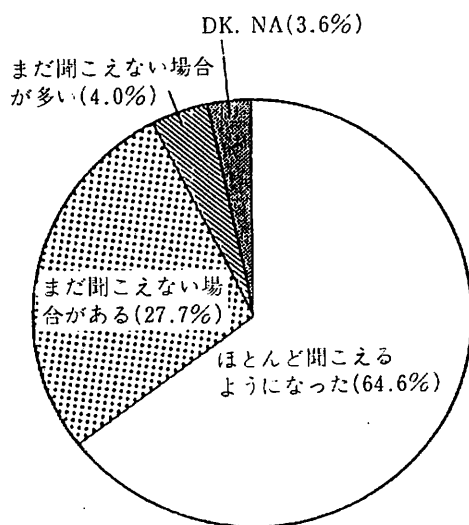


表 5 - 2 職業 防災無線の聴取度

職 業 × 防災無線の聞こえ方

	標 本 数	ほとんどすべ て聞こえるよ うになった	まだ聞こえな い場合がある	まだ聞こえな い場合の方が 多い
全 体	532	66. 2	29. 7	4. 1
農 業	54	63. 0	29. 6	7. 4
漁 業	13	57. 1	42. 9	—
商 業	61	63. 9	34. 4	1. 6
サービス業	55	52. 7	36. 4	10. 9
旅館・民宿	33	81. 8	15. 2	3. 0
公 務 員	40	72. 5	20. 0	7. 5
会 社 員	45	55. 6	35. 6	8. 9
無 職（主婦を除く）	59	67. 8	28. 8	3. 4
主 婦	131	73. 3	26. 7	—
そ の 他	40	62. 5	35. 0	2. 5

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

3. 自主防災組織に対する評価

続いて、自主防災組織（大島では、東京都の呼称にならって「防災市民組織」と呼ぶ）の評価について述べておく。

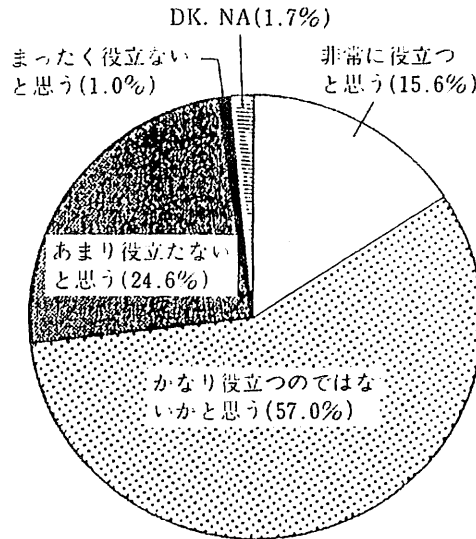
この自主防災組織は、住民が全面帰島した後の62年3月末、町、警察・消防団が中心となって結成に着手し、まず当時危険が予想された波浮地区や下地地区から結成されたものであり、現在、8地区（元町・北の山・岡田・泉津・野増・差木地・下地・波浮港）・49ブロック・270班から構成され、各班に班長と副班長を置いている。班員は原則として1班20名であるが、人数の多い班では40名となっており、こうした班では2名の副班長がいる。なお、大島の自主防災組織は、初期消火や非常用品の備蓄など地域防災全般にもかかわるが、その第一次的な目的は、再噴火時に住民の円滑な避難を促進することであり、

- ① 噴火時に一時避難場所まで班単位で避難すること
 - ② 各班長が構成員の名簿を管理し避難時の人員把握をすること
 - ③ 歩行困難者をあらかじめ把握し噴火時にその避難を援助すること
(注4)
- をめざすものである。

アンケート調査では、この自主防災組織が避難のさいに本当に有効と思うかどうかを質問した。

その結果、この組織の有効性を評価する人（「非常に役立つと思う」＋「かなり役立つのではないと思う」）が72.6％と圧倒的多数にのぼり、評価が低い人（「あまり役立たないと思う」＋「まったく役立たないと思う」）の25.6％を大きく上回っていた（図5－3）。自主防災組織に対する住民の評価は相当高いといえよう。

図 5－3 自主防災組織に対する評価（N＝577人）



なお、この自主防災組織に対する評価は、性、年齢、職業、および居住地区などの属性と統計的に有意に関係していた。つまり性別では男性より女性のほうが、年齢別では50歳代から上の高年層が自主防災組織を高く評価していた。これは、いわゆる「災害弱者」の自主防災組織への評価が高いことを示すものといえる。また、職業別では漁業従事者や農業従事者が、地区別では下地・野増・岡田地区などの住民が、自主防災組織により高い評価をしていた（表5－3）。

表 5－3 性・年齢・職業・居住地区×自主防災組織に対する評価
性×防災市民組織についての評価

	標本数	非常に役立つと思う	かなり役立つのではないかと思います	あまり役立たないと思う	まったく役立たないと思う
全 体	567	15.9	58.0	25.0	1.1
男 性	236	12.7	55.9	29.7	1.7
女 性	331	18.1	59.5	21.8	0.6

（ χ^2 検定： $P < 0.05$ ）

年 齢 × 防災市民組織についての評価

	標 本 数	非常に役立つと思う	かなり役立つのではないかなと思う	あまり役立たないと思う	まったく役立たないと思う
全 体	567	15.9	58.0	25.0	1.1
20 代	20	10.0	45.0	45.0	—
30 代	91	12.1	51.6	34.1	2.2
40 代	132	7.6	59.8	31.1	1.5
50 代	126	19.0	59.5	20.6	0.8
60 代	109	21.1	58.7	19.3	0.9
70 歳 以上	89	22.5	61.8	15.7	—

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

職 業 × 防災市民組織についての評価

	標 本 数	非常に役立つと思う	かなり役立つのではないかなと思う	あまり役立たないと思う	まったく役立たないと思う
全 体	541	16.1	58.0	24.8	1.1
農 業	55	23.6	67.3	9.1	—
漁 業	14	35.7	64.3	—	—
商 業	63	12.7	57.1	28.6	1.6
サービス業	58	13.8	46.6	36.2	3.4
旅館・民宿	33	12.1	51.5	33.3	3.0
公 務 員	42	11.9	61.9	26.2	—
会 社 員	46	13.0	56.5	30.4	—
無 職（主婦を除く）	60	18.3	66.7	13.3	1.7
主 婦	131	17.6	58.8	22.9	0.8
そ の 他	39	10.3	48.7	41.0	—

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

地 区 × 防災市民組織についての評価

	標 本 数	非常に役立つと思う	かなり役立つのではないかなと思う	あまり役立たないと思う	まったく役立たないと思う
全 体	567	15.9	58.0	25.0	1.1
泉 津	26	15.4	65.4	19.2	—
岡 田	64	17.2	56.3	25.0	1.6
北 の 山	42	2.4	64.3	31.0	2.4
元 町	176	12.5	50.0	35.2	2.3
野 増	48	22.9	64.6	12.5	—
差 木 地	92	17.4	62.0	20.7	—
下 地	58	25.9	62.1	12.1	—
波 浮	61	16.4	60.7	23.0	—

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

4. 防災訓練への参加と評価

最後に、防災訓練について触れていく。

大島町では、住民が全面帰島した直後の61年12月24日、もっとも危険が予想された南部の波浮・下地地区において、1,400人の住民が参加して避難訓練を実施したほか、噴火1年目の62年11月21日には、参加人員8,000人以上、総経費1,500万円を超える大規模な「総合防災訓練」を行った。

この総合防災訓練は、東京都・警察庁・東京消防庁・大島町などが主体となって実施したもので、

- ① 住民だけでなく観光客も含めた「島ぐるみ」の訓練であること
- ② 新たに整備された防災対策の検証を兼ねた訓練であること
- ③ 迅速で効果的な実践型訓練であること
- ④ 災害の拡大状況に対応した段階的避難を想定した訓練であること

などの特徴をもつものであった。

このうち、とくに③の実践型訓練は、ヘリコプターによる孤立者の救出、避難バスの運用、航空機による救急車や毛布等の輸送、船舶による小学生の海上避難など、さまざまな分野にわたっていた。またこのとき、自主防災組織では、いったん集合場所に集まった住民を班長と副班長が避難所まで誘導する「避難誘導訓練」、およびあらかじめ作成・配布してある「災害弱者名簿」にもとづき災害弱者の避難を援助する「避難援護訓練」などを行なっている。^(注5)

そこで、アンケート調査では、この「総合防災訓練」についてもいくつか質問した。

その結果、防災訓練に参加した人は74.4%で非常に多く、どの年齢層でも、この防災訓練への参加率は7割を越えていた。職業別にこの参加率をみると、漁業、農業、主婦は8割を越え、商業、公務員がこれに続いている（図5－4）、これらにくらべると、旅館・民宿、会社員などの参加率はやや低い。

また地区別では、波浮、野増、泉津の参加率が8割以上で多いものの、他地区でも7割以上の高い参加率となっている（図5－5）。

図 5-4 防災訓練への参加—職業別

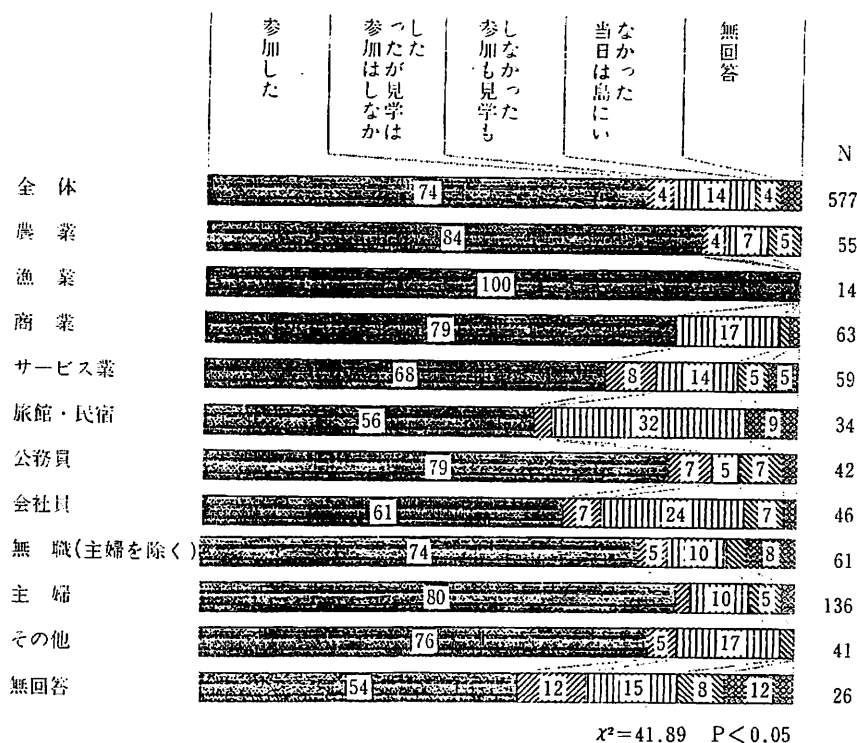
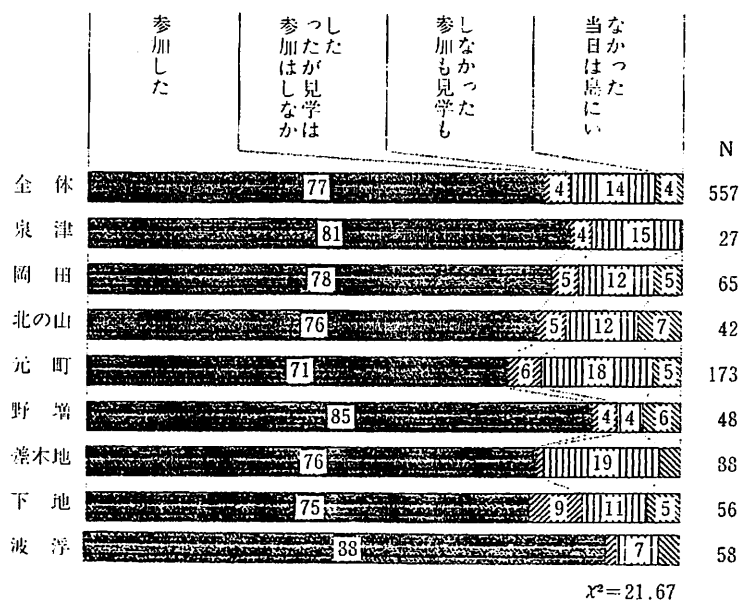


図 5-5 防災訓練への参加—地区別



この防災訓練で実行したこととしては、「避難訓練に参加した」が63.6%と最も多く、これに次いで、「消火器の使い方を学んだ」（42.9%）、「負傷者や病人の応急手当の仕方を学んだ」（39.4%）、「噴火のときの避難場所を学んだ」（38.5%）などが多くなっている。これを年齢別にみたのが表5—4であるが、20代ではどの訓練も実行した人が少ないが、60代では各種の訓練に参加した人が多いことがわかる。

表 5—4 防災訓練で実行したこと—年齢別

	標 本 数	消 火 器 の 使 い 方 を 学 ん だ	負 傷 者 等 の 応 急 手 当 の 仕 方 を 学 ん だ	防 災 袋 の 使 い 方 を 学 ん だ	噴 火 の と き の 避 難 場 所 を 学 ん だ	避 難 訓 練 に 参 加 し た	そ の 他	無 回 答
全 体	100.0 429	42.9 184	39.4 169	11.4 49	38.5 165	63.6 273	11.2 48	5.1 22
20 代	100.0 15	13.3 2	13.3 2	— —	20.0 3	33.3 5	13.3 2	26.7 4
30 代	100.0 67	43.3 29	31.3 21	6.0 4	41.8 28	56.7 38	14.9 10	4.5 3
40 代	100.0 96	37.5 36	35.4 34	11.5 11	37.5 36	61.5 59	12.5 12	4.2 2
50 代	100.0 95	49.5 47	50.5 48	11.6 11	32.6 31	61.1 58	12.6 12	4.2 4
60 代	100.0 88	51.1 45	46.6 41	12.5 11	43.2 38	75.0 66	9.1 8	1.1 1
70 歳以上	100.0 68	36.8 25	33.8 23	17.6 12	42.6 29	69.1 47	5.9 4	8.8 6

このような防災訓練に対して島民はどのように評価しているだろうか。今後噴火があった時に防災訓練が「非常に役立つだろう」と考えている島民は11.7%、「かなり役立つだろう」というものは54.3%で、7割に近い人が一応防災訓練を評価しているといえよう。しかし、「あまり役立たないのではないか」という人も25.6%と約4分の1いることは無視できない。

なお、防災訓練を高く評価しているのは、職業別でみると農業、漁業、旅館・民宿経営者で、地区別では、野増、差木地、下地、波浮など南部地区の住民である（図5—6、図5—7）。

図5-6 防災訓練の評価—職業別

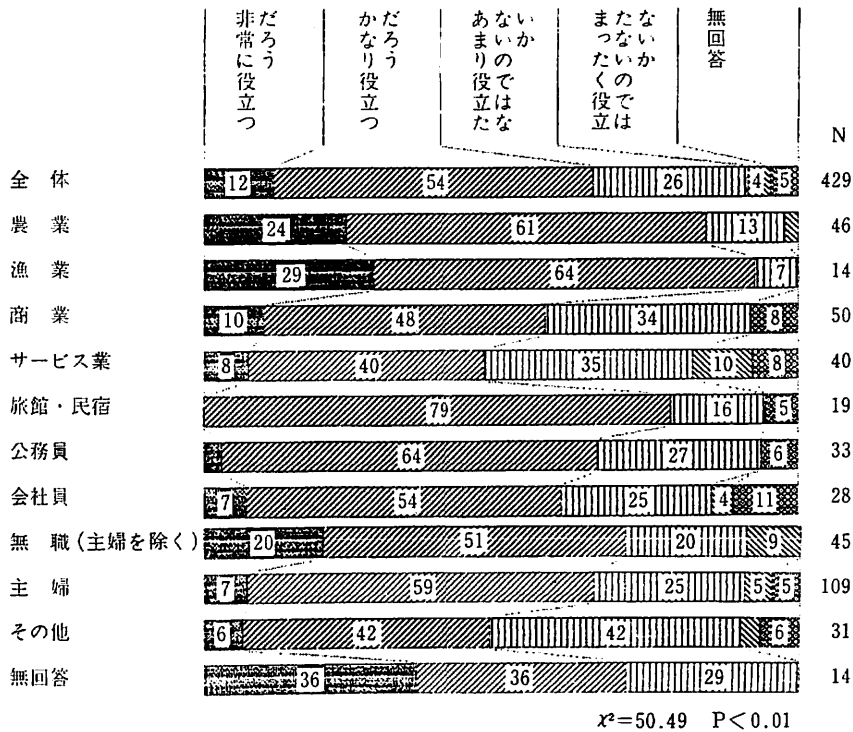
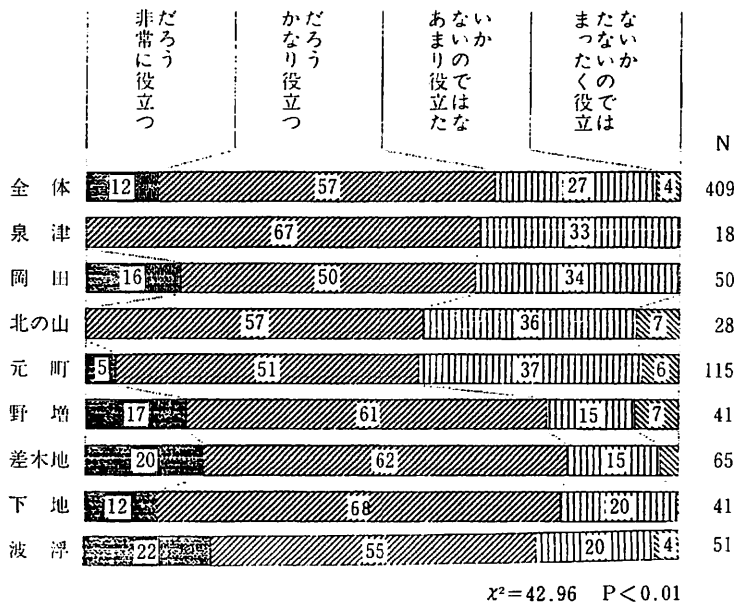


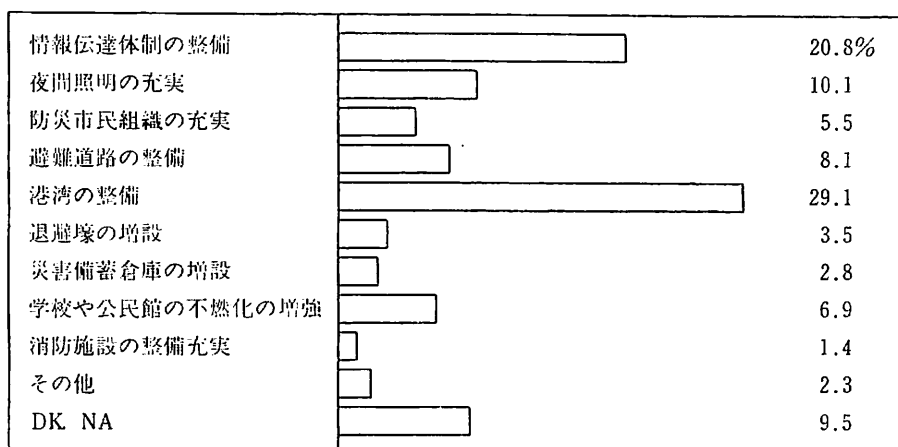
図5-7 防災訓練の評価—地区別



5. もっと充実してほしい防災対策

次に、今後もっと充実してほしい防災対策として住民がどんなものを望んでいるかについてみると、もっとも要望が多かったのは「港湾の整備」であり（29.1％）、次いで、「情報伝達体制の整備」（20.8％）、「夜間照明の充実」（10.1％）、「避難道路の整備」（8.1％）、「学校や公民館の不燃化の増強」（6.9％）、「防災市民組織の充実」（5.5％）となっていた（図5－8）。比較的多くの住民が不十分と感じ、かつその充実を望んでいる対策は「避難港の整備」であり、また「情報伝達体制の整備」については、現状を高く評価する声も多いが、一方では、いっそうの充実を要望している人も少なくないといえる。

図5－8 今後もっと充実してほしい防災対策（N＝577人）



なお、この変数と統計的に有意な関係をもつ属性は、性別および居住地区だった。つまり性別でみると、「夜間照明の充実」は男性より女性のほうが、逆に「港湾の整備」は女性より男性のほうが要望が高かった。また居住地区でみると、「情報伝達体制の整備」と「夜間照明の充実」は北の山地区で、「防災市民組織の充実」は岡田地区で、「避難道路の整備」は差木地地区で、「港湾の整備」は下地地区で、「学校や公民館の不燃化の促進」は野増地区で、それぞれ多くなっていた（表5－5）。

表 5 - 5 性・居住地区×もっと充実してほしい防災対策

性×充実してほしい防災対策

	標 本 数	情報 伝達	体制 の整備	夜間 照明 の 実	防災 組織 の 充実 市民	避難 道路 の 整備	港湾 の 整備	退避 壕 の 増設	災害 備蓄 倉庫 の 増設	学校 や 公民 館の 不燃 化 増強	消防 施設 の 整備 充実	そ の 他
全 体	522	23.0	11.1	6.1	9.0	32.2	3.8	3.1	7.7	1.5	2.5	
男 性	227	23.3	7.0	4.0	9.7	37.0	3.1	3.5	5.3	2.6	4.4	
女 性	295	22.7	14.2	7.8	8.5	28.5	4.4	2.7	9.5	0.7	1.0	

(χ^2 検定: $P < 0.01$)

地 区×充実してほしい防災対策

	標 本 数	情報 伝達	体制 の整備	夜間 照明 の 実	防災 組織 の 充実 市民	避難 道路 の 整備	港湾 の 整備	退避 壕 の 増設	災害 備蓄 倉庫 の 増設	学校 や 公民 館の 不燃 化 増強	消防 施設 の 整備 充実	そ の 他
全 体	522	23.0	11.1	6.1	9.0	32.2	3.8	3.1	7.7	1.5	2.5	
泉 津	25	16.0	4.0	12.0	12.0	40.0	—	—	12.0	—	4.0	
岡 田	62	22.6	16.1	16.1	6.5	9.7	6.5	6.5	9.7	1.6	4.8	
北 の 山	40	40.0	22.5	2.5	2.5	12.5	2.5	7.5	7.5	—	2.5	
元 町	158	26.6	9.5	7.6	7.0	31.6	3.8	2.5	7.0	2.5	1.9	
野 増	43	23.3	9.3	—	11.6	23.3	9.3	4.7	16.3	2.3	—	
差 木 地	83	20.5	10.8	2.4	16.9	37.3	1.2	1.2	7.2	—	2.4	
下 地	53	15.1	9.4	1.9	5.7	60.4	1.9	1.9	—	3.8	—	
波 浮	58	15.5	8.6	5.2	10.3	41.4	5.2	1.7	6.9	—	5.2	

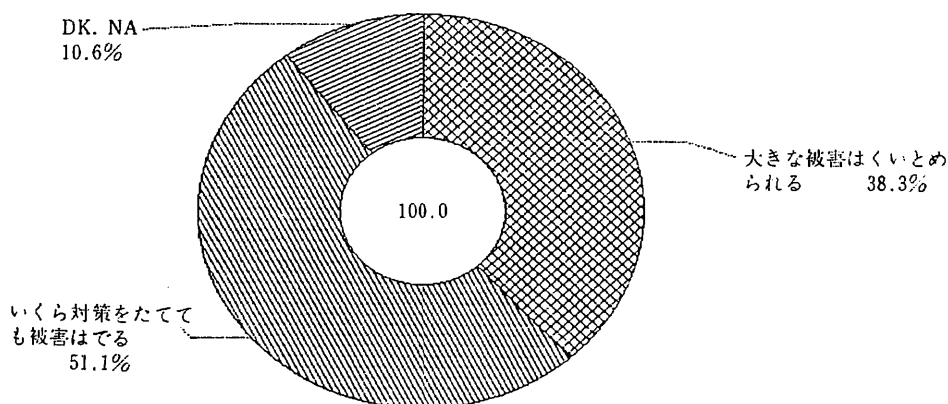
(χ^2 検定: $P < 0.01$)

6. 防災対策一般への評価

次に、上で述べたような一連の防災対策の結果として、今後ふたたび大噴火があったとき果して被害が減少できるかどうか、に関する住民の評価について紹介していく。

まず、一般論として、大きな災害に対して万全の対策を立てさえすれば大きな被害はくいとめることができると思うか、あるいはいくら対策を立ててもやはり大きな被害が出ると思うかについて住民にたずねたところ、「大きな被害はくいとめることができる」という人は38.3%にすぎず、一方、「いくら対策を立てても大きな被害は出る」という人が51.1%と過半数にのぼっていた（図5－9）。

図5－9 防災対策一般への評価（N=577人）



また、もっと具体的に、今後ふたたび大噴火があって住民が避難しなければならなくなったとき、このような防災対策の結果として、住民の避難は61年11月の噴火の時よりうまくいくと思うかどうかたずねても、「前よりうまくいだろう」という人は34.7%にすぎず、他方、「今度はうまくいかないのではないか」という人が60.1%に達していた（図5－10）。これらの事実は、前述のように、行政が行なった個々の防災対策に対する住民の評価は高いとはいえないものの、今後ふたたび大噴火が起こったときのその有効性については多少の懸念があることを示すものといえよう。

なお、再噴火のときの避難に関しては居住地区によって評価に差があり、岡田・野増・下地などでは「前よりうまくいだろう」という回答が多く、逆に、泉津・北の山・元町などでは「今度はうまくいかないのではないか」という人が多くなっていた（表5－6）。

図 5-10 再噴火のときに避難はうまくいくか (N=577人)

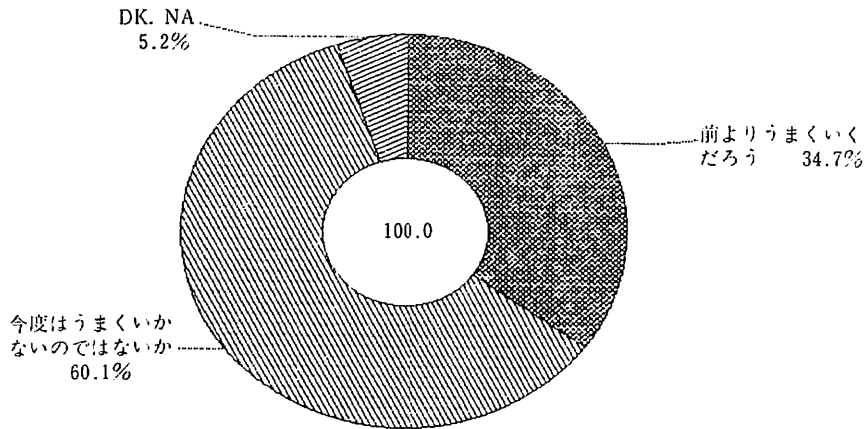


表 5-6 居住地区×再噴火のときの避難
地区×今後噴火した際の住民の避難

	標 本 数	前 より う ま く い く だ ろ	今 度 は う ま く い か な い の で は な い
全 体	547	36.6	63.4
泉 津	26	26.9	73.1
岡 田	57	40.4	59.6
北 の 山	42	21.4	78.6
元 町	170	28.2	71.8
野 増	46	50.0	50.0
差 木 地	88	39.8	60.2
下 地	56	55.4	44.6
波 浮	62	38.7	61.3

(χ^2 検定: $P < 0.01$)

7. 島外避難命令への態度

最後に、島外避難に対する住民の態度に関する調査結果を紹介しておく。

アンケート調査では、三原山がふたたび噴火して町役場から島外避難命令が出たらどうするかをたずねた。その結果をみると、町役場の指示にしたがって「島外避難するだろう」という人がもっとも多く66.2%にのぼっていたが、一方、「自分で判断して決める」人が18.5%、「今度は島に残る」人が10.9%もあった。61年2月に行なった調査では、島外避難するという人が72.2%、自分の判断で決めるという人が17.3%、今度は島に残るという人が8.7%だったので、1年前にくらべて、若干ではあるが島外避難派が減少し、島

内残留派が増加したことになる（図5-11）。なお、このアンケート調査の結果をそのまま適用すれば、10,304人（昭和61年11月1日現在人口）のうち、ふたたび島外避難命令が出たときに島に残留する人は1,123人という計算になる。

なお、これを属性別にみると、職業と居住地区が統計的に有意であり、職業別では農業や商業の人に、また居住地区別では下地と波浮の住民に、今度は島内に残るといふ人が多かった（表5-7）。

図5-11 島外避難に対する態度（昭和62年2月調査との比較）

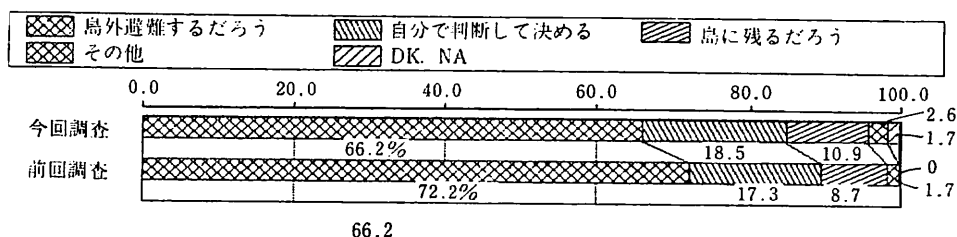


表5-7 職業・居住地区×島外避難命令への態度

職業×再び島外避難命令が出た場合

	標 本 数	避難 命令に 従 って島外 避難 するだ ろう	避難 命令に か かわり なく 自 分で決 める	今 度は 島に 残 るだ ろう	そ の 他
全 体	542	68.6	17.9	10.7	2.8
農 業	54	63.0	9.3	24.1	3.7
漁 業	13	76.9	15.4	7.7	—
商 業	63	61.9	20.6	17.5	—
サービス業	58	69.0	25.9	3.4	1.7
旅館・民宿	34	61.8	29.4	8.8	—
公 務 員	42	76.2	11.9	4.8	7.1
会 社 員	46	76.1	8.7	8.7	6.5
無 職（主婦を除く）	61	62.3	24.6	11.5	1.6
主 婦	131	74.8	13.7	9.2	2.3
そ の 他	40	62.5	25.0	7.5	5.0

（ χ^2 検定：P<0.05）

地 区×再び島外避難命令が出た場合

	標 本 数	避 難 命 令 に 従 っ て 島 外 避 難 を す る だ ら う	避 難 命 令 に か か わ り な く 自 分 で 決 め る	今 度 は 島 に 残 る だ ら う	そ の 他
全 体	567	67.4	18.9	11.1	2.6
泉 津	26	61.5	23.1	3.8	11.5
岡 田	64	76.6	12.5	10.9	—
北 の 山	43	62.8	30.2	7.0	—
元 町	175	66.9	21.1	8.0	4.0
野 増	48	66.7	22.9	10.4	—
差 木 地	92	66.3	18.5	12.0	3.3
下 地	57	66.7	10.5	21.1	1.8
波 浮	62	67.7	14.5	16.1	1.6

(χ^2 検定: $P < 0.05$)

8. 火 山 と 観 光

アンケート調査ではさらに、火山と災害との関係について、「火山の近くには観光地が多いが、そういう観光地はもともと危険な場所にあるのだから、火山爆発によって観光客がなくなってもそれはしかたないことだ」という意見への賛否をたずねてみた。その結果をみると、この意見に対して賛成の人が72.3%（「まったくそう思う」＋「ある程度そう思う」）と圧倒的多数を占め、逆に反対の人は13%（「あまりそう思わない」＋「全然そうは思わない」）ときわめて少なかった。なお、62年2月の調査でもこれと同様の質問をしているが、そのときには賛成が68.3%，反対が13.8%となっており、1年間のあいだ賛成者が多少増加している（図5—12）。

またこの変数は年齢と有意な関係があり、20歳代、30歳代の若年層では反対の意見が多く、他方50歳代、60歳代の高年層では賛成の意見が強かった（表5—8）。

図5—12 火山と観光に対する態度（昭和62年2月調査との比較）

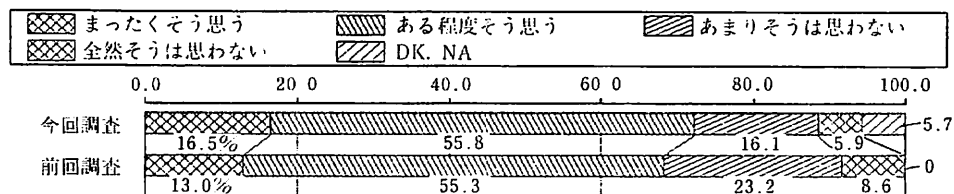


表 5 - 8 年齢×観光への態度

年齢×観光客の減少はしかたがないか

	標 本 数	ま っ た く そ う 思 う	あ る 程 度 そ う 思 う	あ ま り そ う は 思 わ な い	全 然 そ う は 思 わ な い
全 体	544	17. 5	59. 2	17. 1	6. 3
20 代	21	14. 3	66. 7	19. 0	—
30 代	90	13. 3	52. 2	27. 8	6. 7
40 代	126	14. 3	57. 1	18. 3	10. 3
50 代	120	24. 2	60. 0	10. 8	5. 0
60 代	108	13. 9	68. 5	10. 2	7. 4
70 歳以上	79	22. 8	54. 4	21. 5	1. 3

(χ^2 検定: $P < 0.01$)

第6章 自宅の防災対策

1. 自宅の防災対策

最後の第6章では、噴火から1年数カ月を経た時点で、大島の住民がどんな防災対策をしているかをみていく。

アンケート調査の結果をみると 住民の家庭内防災対策としては、「非常持ち出し品の準備をしている」という回答がもっとも多く76.8%を占め、次いで、「防災訓練に参加した」(64.8%)、「噴火のきざしがないかどうか気をつけている」(47.3%)、「避難場所を確認した」(41.2%)、「避難や連絡の方法を話しあっている」(39%)という順になっており、一方、「何もしていない」という人は3.8%にすぎなかった(図6-1)。(表6-1)。

図6-1 住民の防火対策

(前回調査との比較：上-今回調査(N=577人) 下-前回調査(N=807人))

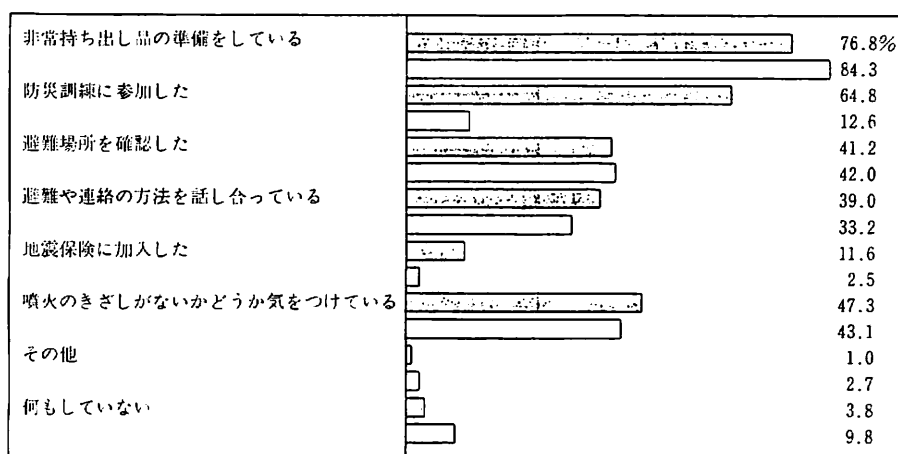


表6-1 性・年齢・職業・居住地区×家庭内防災対策

		標 本 数	問21 家庭での防災対策							
			非常持ち出し品 の準備をし ている	防災訓練に参 加した	非難場所を確 認した	あっている を家族と話し 連絡等の方法	地震保険に加 入した	つけている がないか気を 噴火のきざし	そ の 他	い も し て い な い
全 体		569	77.9	65.7	41.8	39.5	11.8	48.0	1.1	3.9
F 2 性	男 性	236	76.7	62.3	40.3	39.0	13.6	44.9	2.1	5.5
	女 性	333	78.7	68.2	42.9	39.9	10.5	50.2	0.3	2.7
F 3 年 齢 別	20 代	20	60.0	50.0	35.0	30.0	5.0	70.0	—	5.0
	30 代	92	70.7	69.6	39.1	41.3	9.8	44.6	1.1	2.2
	40 代	133	69.9	66.2	39.8	42.1	11.3	48.9	3.0	6.8
	50 代	127	78.7	66.1	40.2	39.4	14.2	44.9	—	5.5
	60 代	110	91.8	70.9	50.0	42.7	15.5	54.5	0.9	0.9
	70歳以上	87	82.8	57.5	41.4	32.2	8.0	41.4	—	2.3
F 4 職 業	農 業	54	75.9	66.7	48.1	46.3	3.7	46.3	3.7	5.6
	漁 業	14	71.4	78.6	64.3	64.3	14.3	50.0	—	7.1
	商 業	62	85.5	71.0	41.9	35.5	24.2	46.8	1.6	1.6
	サービス業	59	69.5	59.3	32.2	37.3	8.5	45.8	—	5.1
	旅館・民宿	33	72.7	54.5	30.3	30.3	12.1	48.5	—	6.1
	公 務 員	42	76.2	73.8	42.9	57.1	4.8	45.2	—	7.1
	会 社 員	46	71.7	56.5	30.4	32.6	17.4	54.3	2.2	4.3
	無 職	61	90.2	65.6	44.3	41.0	11.5	49.2	1.6	—
	主 婦	132	78.0	73.5	48.5	40.2	8.3	53.8	0.8	1.5
	そ の 他	41	78.0	61.0	41.5	43.9	24.4	43.9	—	7.3
ハ 地 区 ▽	泉 津	26	73.1	76.9	34.6	30.8	15.4	38.5	—	7.7
	岡 田	65	78.5	61.5	36.9	43.1	12.3	49.2	—	4.6
	北 の 山	42	61.9	73.8	40.5	35.7	16.7	52.4	4.8	2.4
	元 町	175	76.0	64.0	37.7	41.1	17.7	51.4	1.7	4.6
	野 増	48	83.3	70.8	37.5	43.8	6.3	39.6	—	—
	差 木 地	92	84.8	65.2	50.0	38.0	4.3	51.1	—	4.3
	ク ダ ツ	59	76.3	52.5	39.0	37.3	5.1	42.4	1.7	5.1
	波 浮	62	82.3	74.2	56.5	38.7	11.3	45.2	—	1.6

またこのうち、非常持ち出し品を準備している人にその内容をたずねると、「ローソクや懐中電灯」（86%）、「洗面用具」（71.6%）、「救急医薬品」（65.5%）、「食料品」（58.5%）、「トランジスタラジオ」（55.5%）などが多く、これらはいずれも半数を超えていた（図6-2）。（表6-2）。

住民の防災対策については前回調査でも同じ質問をしているが、そのときと比較すると、今回は、「非常持ち出し品の準備」が多少減っていたが、それ以外の対策はほとんど横ばいか、あるいは多少なりとも向上していた。とくに「防災訓練」への参加率は格段にあがっている。また「地震保険への加入率」も、かなり高くなっている。前述のように、住民意識面では危機感が減少してきたというものの、実際の防災対応面での低下はみられず、むしろ向上している対策が多いということであり、これは非常に望ましいことといえよう（図6-1参照）。

図6-2 用意している非常持ち出し品の中身（N=443人）

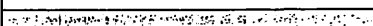
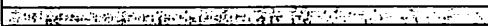
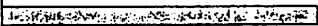
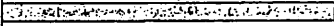
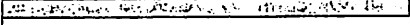
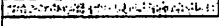
救急医薬品		65.5%
ローソクや懐中電灯		86.0
トランジスタラジオ		55.5
毛布や寝袋		15.1
ナイフ・缶切り・ロープ・ひもなど		44.5
食料品		58.5
飲料水		30.9
固形燃料や携帯用ガスボンベ		2.3
洗面用具		71.6
その他		38.4
DK. NA		1.6

表 6 - 2 性・年齢・職業・居住地区×非常持ち出し品の中身

		標 本 数	付問21－1 非常持ち出し品の中身									
			救 急 医 薬 品	ロ ー ソ ン ク や 懐 中 電 灯	ト ラ ン ジ ス タ オ	毛 布 や 寝 袋	ナ イ フ ・ 缶 き	り ・ ロ ー プ ・ ひ も な ど	食 料 品	飲 料 水	固 形 燃 料 や 携 帯 用 ガ ス ボ ン	洗 面 用 具
全 体		436	66.5	87.4	56.4	15.4	45.2	59.4	31.4	2.3	72.7	39.0
F 2 性	男 性	179	60.3	86.6	62.0	17.9	36.3	57.0	30.7	2.8	64.2	36.3
	女 性	257	70.8	87.9	52.5	13.6	51.4	61.1	31.9	1.9	78.6	40.9
F 3 年 齢 別	20 代	12	83.3	83.3	41.7	33.3	16.7	66.7	33.3	－	75.0	41.7
	30 代	65	61.5	80.0	56.9	15.4	35.4	49.2	23.1	－	66.2	49.2
	40 代	93	66.7	83.9	51.6	16.1	41.9	55.9	25.8	－	69.9	48.4
	50 代	98	75.5	89.8	63.3	6.1	54.1	59.2	32.7	1.0	75.5	31.6
	60 代	98	67.3	94.9	69.4	21.4	53.1	68.4	41.8	7.1	77.6	37.8
	70歳以上	70	54.3	85.7	37.1	15.7	40.0	60.0	30.0	2.9	71.4	28.6
F 4 職 業	農 業	41	75.6	97.6	61.0	14.6	61.0	70.7	41.5	－	73.2	24.4
	漁 業	10	80.0	100.0	60.0	30.0	40.0	50.0	40.0	－	50.0	20.0
	商 業	52	57.7	94.2	69.2	17.3	46.2	55.8	32.7	1.9	71.2	42.3
	サービス業	41	53.7	82.9	58.5	12.2	48.8	58.5	22.0	－	70.7	43.9
	旅館・民宿	22	63.6	81.8	63.6	13.6	50.0	54.5	9.1	－	59.1	40.9
	公 務 員	32	68.8	81.3	68.8	3.1	31.3	40.6	31.3	3.1	71.9	43.8
	会 社 員	33	75.8	81.8	54.5	15.2	30.3	72.7	33.3	3.0	72.7	42.4
	無 職	54	57.4	85.2	50.0	22.2	27.8	57.4	35.2	3.7	74.1	33.3
	主 婦	102	70.6	85.3	49.0	12.7	50.0	61.8	35.3	2.9	80.4	45.1
	そ の 他	32	78.1	93.8	53.1	25.0	59.4	65.6	28.1	3.1	75.0	50.0
ハ 地 区 ▽	泉 津	19	68.4	73.7	57.9	10.5	47.4	78.9	31.6	－	68.4	47.4
	岡 出	50	66.0	86.0	46.0	26.0	36.0	48.0	16.0	4.0	62.0	38.0
	北 の 山	26	65.4	88.5	50.0	23.1	46.2	38.5	11.5	－	84.6	50.0
	元 町	132	63.6	90.9	61.4	12.1	43.9	59.1	30.3	0.8	68.9	44.7
	野 増	40	70.0	87.5	47.5	17.5	52.5	55.0	50.0	5.0	65.0	40.0
	差 木 地	76	72.4	85.5	60.5	9.2	50.0	64.5	31.6	1.3	81.6	35.5
	タ ダ ツ	43	58.1	83.7	51.2	16.3	34.9	58.1	37.2	2.3	74.4	34.9
	波 浮	50	70.0	90.0	62.0	18.0	52.0	72.0	40.0	6.0	80.0	24.0

一方、「何も（防災対策を）していない」と答えた住民に対しては、その理由をたずねてみた。結果をみると、「そのときにはなんとかかなと思う」という、いわゆる「正常化の偏見」によると考えられる回答がもっとも多く45.5%を占めており、次いで、「防災対策をしても役に立たないと思う」（22.7%）、「大噴火が起こると思っていない」（18.2%）などとなっていた（図6-3）。

図6-3 防災対策をしていない理由（N=22人）

大噴火が起こると思っていない		18.2%
そのときには何とかかなと思う		45.5
都や町が何とかしてくれると思う		13.6
防災対策をしても役に立たないと思う		22.7
つい面倒でまだやっていない		13.6
その他		9.1
DK, NA		4.5

2. 62年11月16日の噴火時の対応

では、帰島後の昭和62年11月6日に伊豆大島が小噴火した時、島民はどのように対応したであろうか。この時の島民の対応で実行率の高いものから順に並べると以下になる。

町の防災無線の放送に注意した	74.9%
テレビやラジオのニュースに注意した	73.5
外に出て噴火の様子をみた	67.6
噴火の様子について話し合った	43.2
火の始末をしたり、ガスの元栓を締めた	34.7
避難の準備をした	25.3
家に帰った	13.0
噴火の様子を写真にとった	5.4
外に出ている家族を迎えにいった	4.9
火山灰や噴石による被害を調べた	3.6
電話で町役場・測候所などに問い合わせた	2.9
自治会や消防団などに問い合わせた	0.7

表 6 - 3 1年ぶりの小噴火の時の対応一地区内

	計 (人数)	オのニ テレビ やラジ スに注 意した	町有線 防災無 線放送 に注意 した	外に出 て噴火 の様子 を見た	噴火の 様子 を写真 にとつ た	家族等 と噴火 の様子 につい て話し 合った	電話で 町役場 ・測候 所等に 問合 わせた	自治会 ・消防 団等 の人に 問合 わせた	火の始 末やガ スの元 栓を締 めたり した	火山灰 や噴石 による 被害を 調べた	避難の 準備を した	家に帰 った	外に出 てい る家族 を迎え に	そ の 他
全 体	100.0 (563)	75.3	76.7	69.3	5.5	44.2	3.0	0.7	35.5	3.7	25.9	13.3	5.0	8.3
泉 津	100.0 (27)	66.7	70.4	29.6	3.7	25.9	11.1	—	18.5	3.7	25.9	—	14.8	22.2
岡 田	100.0 (64)	76.6	71.9	42.2	—	46.9	1.6	1.6	31.3	3.1	20.3	12.5	3.1	6.3
北の山	100.0 (43)	76.7	72.1	48.8	2.3	37.2	2.3	—	25.6	—	27.9	11.6	9.3	11.6
元 町	100.0 (173)	78.0	81.5	82.1	6.4	46.2	3.5	—	38.2	2.3	26.0	13.3	2.9	5.8
野 増	100.0 (48)	64.6	77.1	70.8	8.3	35.4	2.1	2.1	47.9	—	29.2	14.6	14.6	10.4
差木地	100.0 (91)	75.8	76.9	81.3	7.7	44.0	1.1	1.1	35.2	8.8	31.9	16.5	1.1	5.5
下 地	100.0 (57)	78.9	71.9	70.2	3.5	45.6	1.8	1.8	36.8	3.5	22.8	19.3	5.3	8.8
波 浮	100.0 (60)	73.3	78.3	73.3	8.3	55.0	5.0	—	36.7	6.7	21.7	10.0	3.3	11.7

この時の対応は、「町の防災無線に注意した」、「テレビやラジオのニュースに注意した」という情報収集行動が中心で、避難の準備をしたものは4分の1にとどまっていた。しかし、表6-3に示されるように、この時の対応は、地域によって少し違いがみられる。すなわち、「町の防災無線に注意した」、「テレビやラジオのニュースに注意した」というような情報収集行動では地域差はほとんどみられないが、「外に出て噴火の様子を見た」人は、元町、野増、差木地、下地、波浮といった島の中南部地区では7割を越えているが、泉津、岡田、北の山などの北部地区ではそれほど多くはない。また、「火の始末やガスの元栓を締めたりした」という人も、どちらかという中南部地区の方に多くみられる。

3. これからの生活での心配事

最後に、これからの生活で心配なことを自由回答の形式で調べた結果をあげておく。具体的な回答は、本章末に示すように様々な分野にまたがっているが、それらを地区別にまとめてみると以下ようになる。

表6-4 これからの生活で心配なこと一地区別

	全 体	泉 津	岡 田	北の山	元 町	野 増	差木地	下 地	波 浮
標 本 数	567	29	66	43	167	45	91	57	61
回 答 者 数	353	13	47	33	113	26	48	43	30
回 答 数	385	16	56	43	122	26	49	45	28
大噴火・地震	89	3	9	7	29	5	14	15	7
防 災 対 策	18	1	3	3	3	1	2	3	2
避難のこと	45	2	5	7	10	3	10	5	3
病気や健康	29	3	4	4	10	2	5	1	
経 済 問 題	38	1	9	5	9	3	2	5	4
観 光 問 題	50	1	12	6	21	5	3	2	
マスコミ報道	13		4	5	3				1
就職・失業	6	1		2	1		1	1	
復興対策	3	1					2		
島の振興	5	1		1	3				
高齢者問題	35		3	1	17	2	4	2	6
子供の問題	6	1	1		1		1	2	
漁業問題	5		1					2	2
そ の 他	21		1		9	2	2	4	3
な し	22	1	4	2	6	3	3	3	

何らかの心配事をあげた人は、全体では62.3%である。これを地域別にみると、北の山地区では76.7%、下地地区で75.4%、岡田地区で71.2%と多いことがわかる。それに対し、泉津地区（44.8%）、波浮地区（49.2%）では少ない。

全体でみると、これからの心配事で1位を占めているのは、回答者の25.2%が回答している大噴火や地震である。これに次いで、観光問題（14.2%：回答者に対する比率。以下同）、避難に関すること（12.7%）、生計などの経済問題（10.8%）、高齢者問題（9.9%）となっている。

これら心配事で上位を占めている事柄を地域別にみると、まず、大噴火や地震を心配するのは、下地、差木地に多いことがわかる。それに対して、岡田地区や北の山、野増地区では、大噴火や地震を心配している人は少ない。岡田地区では、これよりも観光問題を心配している人の方が多い。また、野増地区でも、大噴火を心配する人と観光問題を心配する人が同じ程度にいる。

また避難しなければならない事態がくることを心配する人は、北の山、差木地では2割を越えているが、岡田、元町、野増、下地、波浮地区では1割前後である。経済問題や観光問題を心配している人が多いのは、岡田、北の山の両地区である。また、観光問題は、元町、野増地区でも心配している人が多くみられる。

高齢者の問題は、元町、波浮地区で心配している人が他地区よりも多い。泉津地区では、病気や健康、医療問題を心配事にあげている人の比率が他地区よりかなり多いことがわかる。

注1. 前回の調査結果は、『1986年伊豆大島噴火における災害情報の伝達と住民の対応』昭和63年1月（東京大学新聞研究所「災害と情報」研究班）として刊行されている。

注2. 大島町役場提供資料。また、自治省消防庁『離島における火山噴火災害対策に関する調査研究報告書』（昭和63年3月）も参照した。

注3. 大島町役場提供資料、および自治省消防庁『離島における火山噴火災害対策に関する調査研究報告書』（前掲）

注4. 大島町役場提供資料、および自治省消防庁『離島における火山噴火災害対策に関する調査研究報告書』（前掲）

注5. 東京都提供資料・大島町役場提供資料、および自治省消防庁『離島における火山噴火対策に関する調査研究報告書』（前掲）

付属資料 1

伊豆大島噴火についてのアンケート調査

昭和63年 2 月

東京大学新聞研究所

まず、昭和61年11月21日の噴火についておたずねします。

問 1. 島外避難のあと、あなたがふたたび大島に戻ってくるまで、もっとも長くいたところはどこですか<くひとつだけ>。また、「1.公共の避難施設」あるいは「4.その他」と答えた人は、その場所を記入してください。

	%	N (人)
1. 公共の避難施設	59. 6	344
2. 親戚や知人の家	32. 1	185
3. ホテル・旅館	0. 3	2
4. その他	5. 5	32
5. D K. N A	2. 4	14
計	99. 9	577

(公共の避難施設 335人)

* 港区スポーツセンター	59	* 江東区スポーツセンター	44
* 千代田区立総合体育館	21	* 築地社会教育福祉会館	18
* 大田区民センター	17	* 新宿スポーツセンター	16
* 浜町体育館	16	* 国際救援センター (品川)	14
* 北区防災センター	11	* 文京区文京スポーツセンター	11
* 中央区立総合体育館	10	* 港区立勤労福祉会館	9
* 東品川敬老会館	8	* 港区婦人会館	7
* 平和島ユースセンター	7	* 大崎敬老会館	5
* 江戸川区「いこいの家」	4	* 田町スポーツセンター	4
* 品川ベトナム難民収容所	3	* 浜町スポーツセンター	3
* 東京都新宿立信濃町福祉会館	3	* 大田区民会館	3
* 品川区南大井敬老会館	2	* 江戸川区鹿骨区民館	2
* 田町婦人会館	2	* 銀座中学校	2
* 萩中集会所	2	* 新宿区民福祉会館	2
* 北品川敬老会館	2	* 港区勤労福祉会館	2
* 新宿区戸山福祉会館	1	* 北新宿福祉センター	1
* 港区民センター	1	* 都多摩老人医療センター	1
* 文京区大塚スポーツセンター	1	* 高田馬場第二福祉会館	1
* 新宿体育館	1	* 港体育館	1
* 鹿骨体育館	1	* 東京都立福祉園 (八王子市)	1
* 西大井敬老会館	1	* 明石小学校体育館	1
* 芝浦小学校	1	* 九段中学校	1
* 月島第三中学校	1	* 佃小学校	1
* 中央区立第三中学校	1	* 区立四中	1
* 港区小学校	1	* 晴海第三中学校	1
* 伊東消防署	1	* 元町小学校	1
* 神津島	1	* 防災センター	1
* 新宿区高田馬場老人福祉会館	1	* 都浜町公園内避難施設	1

(その他 26人)

* 世田谷の自宅	* 東京都内の自宅 (単身赴任のための)
* 自宅…普段空家になっている	* 自己所有のマンション
* 東京の部屋	* 神奈川県川崎市生田一借りているアパート
* アパート	* 会社の療
* 病院に入院中—東邦医大	* 病 院

- * 伊東国立病院に入院
- * 会社の寮
- * 会社の厚生福祉施設
- * 船内（みやこ）東京豊海埠頭
- * 老人ホーム
- * 主人の会社で用意してくれたアパート
- * 精薄施設に勤めているので施設避難地、八王子、多摩藤倉学園
- * 消防団なので色々変わったのでよく覚えていない
- * 埼玉県入間郡三芳町藤久保，N. T. T. 鶴瀬寮
- * 埼玉県入間郡三芳町藤久保，N. T. T. 鶴瀬寮
- * 5t の漁船をもっているのので自営消防の分団長に許可をもらい新島に家族でいました
- * 父看病の為病院
- * 職員宿舍
- * 多摩藤倉学園
- * 船，豊見埠頭
- * 東京都業協同組合連合会

問2. 島外避難のあと、あなたが大島に戻ったのはいつですか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 61年12月19日～22日	74.0	427
2. 12月23日～12月31日	14.0	81
3. 62年1月	1.7	10
4. 62年2月以後	0.2	1
5. その他	8.5	49
6. DK, NA	1.6	9
計	100.0	577

(その他 43人)

* 61年11月26日	1	* 61年11月27日	2
* 61年12月1日	4	* 61年12月2日	1
* 61年12月7日	1	* 61年12月8日	1
* 61年12月10日	3	* 61年12月13日	3
* 61年12月14日	2	* 61年12月15日	7
* 61年12月16日	6	* 61年12月17日	2
* 61年12月18日	3	* 61年12月初め	1
* 一時帰島の時	4	* 消防団で早めに帰島	2

問3. 島外避難をしているあいだ、お宅では収入が減りましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 非常に減った	42.5	245
2. 少し減った	26.2	151
3. ほとんど減らなかった	29.6	171
4. DK, NA	1.7	10
計	100.0	577

問4. では、帰島してから現在までのほぼ1年間で、お宅の収入は減りましたか。また、もし収入が減ったしたら、その額は噴火がなかった場合にくらべてどのくらい減ったと思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 収入が減った	37.4	216
2. 変わらない	50.6	292
3. 収入はむしろ増えたと思う	2.1	12
4. DK, NA	9.9	57
計	100.0	577

○減収した金額

	%	N (人)
1. 50万円未満	21. 3	46
2. ～ 100 万円未満	10. 6	23
3. ～ 200 万円未満	19. 0	41
4. ～ 300 万円未満	4. 6	10
5. ～ 400 万円未満	2. 3	5
6. ～ 500 万円未満	0. 5	1
7. 500 万円以上	1. 4	3
8. DK, NA	40. 3	87
計	100. 0	216

付問 1. <問 4 で「1.収入が減った」と答えた人に>では、そうした収入の減少は、噴火の影響がどのくらいあると思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 噴火の影響がおおいにあると思う	63. 4	137
2. 噴火の影響がかなりあると思う	19. 9	43
3. 噴火の影響も多少あると思う	14. 4	31
4. 噴火の影響はほとんどないと思う	1. 9	4
5. DK, NA	0. 5	1
計	100. 1	216

問 5. <ふたたび全員がお答えください>帰島後のお宅の生活は、噴火前にくらべてどのくらい苦しくなりましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 噴火前にくらべ非常に苦しくなった	8. 3	48
2. 噴火前にくらべかなり苦しくなった	11. 1	64
3. 噴火前にくらべ少し苦しくなった	20. 6	119
4. 噴火前とほとんど変わらない	57. 2	330
5. 噴火前より楽になった	0. 5	3
6. DK, NA	2. 3	13
計	100. 0	577

問 6. では、大島全体の地域経済はどうですか。あなたの感じを教えてください<ひとつだけ>。

		N (人)
1. 噴火前にくらべ非常に苦しくなった	10. 4	60
2. 噴火前にくらべかなり苦しくなった	23. 4	135
3. 噴火前にくらべ少し苦しくなった	32. 8	189
4. 噴火前とほとんど変わらない	23. 2	134
5. 噴火前より楽になった	4. 2	24
6. DK, NA	6. 1	35
計	100. 1	577

次に、現在の噴火の不安や防災対策についておたずねします。

問7. 現在、あなたは、昭和61年11月21日のような大噴火がいつまた起こるかもしれないと不安になることがありますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 不安でたまらない	10. 6	61
2. かなり不安だ	27. 0	156
3.それほど不安ではない	54. 2	313
4. 平気だ	8. 0	46
5. DK. NA	0. 2	1
計	100. 0	577

問8. では、あなたは今後もまた11月21日のときのような大噴火がふたたび起こる可能性があると思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 11月21日より大きな噴火が起こる	6. 4	37
2. 11月21日と同じくらいの噴火が起こる	9. 9	57
3. 11月21日のときほど大きくはならない	73. 0	421
4. もう噴火は起こらないと思う	4. 7	27
5. DK. NA	6. 1	35
計	100. 1	577

付問1. <問8で1, 2と答えた人に>では、その大噴火が起こる時期についてはいかがですか。

	%	N (人)
1. 大噴火が明日起きてもおかしくない	33. 0	31
2. 大噴火が起こるのは数カ月先のことと思う	2. 1	2
3. 大噴火が起こるのは1年以上先のことと思う	3. 2	3
4. 噴火がいつ起こるかまったく見当がつかない	60. 6	57
5. DK. NA	1. 1	1
計	100. 1	94

問9. <ふたたび全員がお答えください>次に、噴火の予知についておたずねします。あなたは、現在の科学技術の水準で、大きな噴火の発生をあらかじめ予知できると思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. かなり正確に予知できると思う	1. 0	6
2. 噴火の危険性は予測できると思う	59. 3	342
3. 予知はもちろん危険性の予測も難しい	36. 9	213
4. DK. NA	2. 8	16
計	100. 1	577

問10. では、今後の三原山の噴火予知についてはどうでしょうか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. かなり正確に予知できると思う	1. 2	7
2. 噴火の危険性は予測できると思う	61. 4	354
3. 予知はもちろん危険性の予測も難しい	32. 9	190
4. DK. NA	4. 5	26
計	100. 1	577

問11. もしかりに、噴火予知連絡会から、「いまから数時間以内に噴火が起こるかもしれない」という情報や、「〇〇地区が危ない」という情報が発令された場合、あなたは噴火が必ず起こると思いますか<ひとつだけ>。

	％	N (人)
1. 必ず噴火が起こるにちがいない	4. 5	26
2. 噴火が起こる可能性はかなり高いはずだ	55. 1	318
3. 起こるとも起こらないともいえない	39. 3	227
4. DK. NA	1. 0	6
計	100. 0	577

問12. では逆に、予知連から何の予知情報も出ないうちに、突然噴火が起こる場合もあると思いますか<ひとつだけ>。

	％	N (人)
1. 大いにありうる	24. 3	140
2. あるかもしれない	61. 9	357
3. 多分ないだろう	13. 2	76
4. DK. NA	0. 7	4
計	100. 1	577

問13. かりに噴火についての予知情報が出されても噴火が起こらず、結局、予知情報を解除する場合のことを、予知の「空振り」といいます。この空振りについて、次のような2つの意見があります。あなたは、このうちどちらの意見に賛成ですか<ひとつだけ>。

- A. 予知情報は、噴火による被害を防ぐ上で非常に有効なものであるから、噴火が発生する可能性が多少でもあるなら、空振りを恐れず積極的に出すべきだ
- B. 予知情報は、住民の混乱や農業・漁業・商業などの経済的損失を招くので、確実に噴火が起こる見通しがよほど確かになるまで出すべきではない。

	％	N (人)
1. Aに賛成	45. 8	264
2. Bに賛成	32. 4	187
3. どちらともいえない	19. 8	114
4. DK. NA	2. 1	12
計	100. 1	577

問14. いままで、伊豆大島の噴火については、噴火予知連絡会のほか、何人かの学者たちがさまざまな個人的意見を述べています。あなたはこのような学者の意見をどの程度信用していますか<ひとつだけ>。

	％	N (人)
1. かなり信用している	12. 8	74
2. 多少は信用している	57. 0	329
3. あまり信用していない	26. 7	154
4. まったく信用していない	2. 4	14
5. DK. NA	1. 0	6
計	99. 9	577

問15. ところで、61年11月の噴火後、国や都や町がいろいろな防災対策をしてきました。あなたは、こうした防災対策が、被害を減らしたり避難をスムーズに行う上で、どのくらい十分だと思いますか。次のそれぞれの項目についてお答えください（それぞれの項目についてひとつだけ○）。

A. 情報伝達体制（同報無線や戸別受信機の設置・東海バスへの無線機設置など）

	%	N（人）
1. 十分だと思う	24.8	143
2. まあ十分だと思う	57.0	329
3. あまり十分でないと思う	15.1	87
4. まったく不十分だと思う	1.2	7
5. DK. NA	1.9	11
計	99.9	577

B. 夜間照明（避難所・避難道路・港などへの夜間照明の設置）

		N（人）
1. 十分だと思う	8.8	51
2. まあ十分だと思う	35.7	206
3. あまり十分でないと思う	44.5	257
4. まったく不十分だと思う	6.9	40
5. DK. NA	4.0	23
計	99.9	577

C. 防災市民組織の結成

		N（人）
1. 十分だと思う	13.3	77
2. まあ十分だと思う	50.3	290
3. あまり十分でないと思う	29.6	171
4. まったく不十分だと思う	3.1	18
5. DK. NA	3.6	21
計	99.9	577

D. 避難道路（都道・町道の整備）

		N（人）
1. 十分だと思う	12.0	69
2. まあ十分だと思う	40.7	235
3. あまり十分でないと思う	36.7	212
4. まったく不十分だと思う	7.1	41
5. DK. NA	3.5	20
計	99.9	577

E. 港湾（元町港・岡田港・波浮港の整備）

		N（人）
1. 十分だと思う	6.6	38
2. まあ十分だと思う	28.8	166
3. あまり十分でないと思う	44.9	259
4. まったく不十分だと思う	13.2	76
5. DK. NA	6.6	38
計	100.1	577

F. 退避壕（温泉ホテル・筆島・差木地・リス村などへの退避壕の設置）

	%	N（人）
1. 十分だと思う	3.9	20
2. まあ十分だと思う	23.5	138
3. あまり十分でないと思う	43.3	250
4. まったく不十分だと思う	13.0	75
5. DK, NA	16.3	94
計	100.0	577

G. 災害備蓄倉庫（備蓄倉庫3棟の建設）

	%	N（人）
1. 十分だと思う	7.8	45
2. まあ十分だと思う	35.5	205
3. あまり十分でないと思う	33.1	191
4. まったく不十分だと思う	6.4	37
5. DK, NA	17.2	99
計	100.0	577

問16. では、次にあげるもののうち、今後もっと充実してほしいとあなたが考えている防災対策は何ですか<くひとつだけ>。

	%	N（人）
1. 情報伝達体制の整備	20.8	120
2. 夜間照明の充実	10.1	58
3. 防災市民組織の充実	5.5	32
4. 避難道路の整備	8.1	47
5. 港湾の整備	29.1	168
6. 退避壕の増設	3.5	20
7. 災害備蓄倉庫の増設	2.8	16
8. 学校や公民館の不燃化の増強	6.9	40
9. 消防施設の整備充実	1.4	8
10. その他	2.3	13
11. DK, NA	9.5	55

（その他）

* 避難乗船時の集合場所の拡充

* 海上の悪い時の空からの避難

* どんな荒海の時でも船が走る様に

* 災害時における避難船の充実

* 飛行場、ヘリポートの増設

* 空港の巨大化

* 老人の事

* 災害により発電できなくなればどうにもならない

問17. こうした防災対策のうち、とくに情報伝達体制について、町では屋外の防災無線を増設したり、全戸に戸別受信機をくばって、その整備につとめています。このような整備によって、61年11月の噴火前にくらべ、町からの情報はどのくらいよく聞こえるようになりましたか<くひとつだけ>。

	%	N（人）
1. ほとんどすべて聞こえるようになった	64.6	373
2. まだ聞こえない場合がある	27.7	160
3. まだ聞こえない場合のほうが多い	4.0	23
4. DK, NA	3.6	21
計	99.9	577

(まだ聞こえない場合がある 133 人)

* 強風や風向きなどで	47	* 山・海・畑などにいる時	32
* 屋外にいる時	11	* 無線の調子が悪い	9
* 無線がない	6	* 町から離れている時	6
* 屋外にいる時	4	* 道路にいる時	4
* 車の中にいる時	3	* 受信機から離れている時	3
* 病院の待合室	1	* 買物中の店内	1
* 自宅付近にいる時	1	* 何か行動している時など	1
* 仕事をしている時	1	* 電波の状態の悪い時	1
* ウラ砂漠の道路工事をしている時	1	* 耳が聞こえないので	1

(まだ聞こえない場合のほうが多い 18 人)

* 強風や風向きが悪い時	4	* 海・山・畑などにいる時	3
* 職場に無線がない	2	* 耳が遠いので	2
* 元町町内で	1	* 場所によって聞こえない	1
* 土地の低い場所	1	* 無線機の調子が悪い	1
* 船の入港時がうるさい	1		
* 町村ではないのでむづかしいと思う	1		
* 自宅で受信機から離れた部屋にいる場合	1		

問18. また大島では帰島後、今度ふたたび噴火したとき、避難がスムーズに行うことができるように、防災市民組織がつくられました。あなたは、この防災市民組織が避難のために役立つだろうと思いますか、それともあまり役立たないと思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 非常に役立つと思う	15. 6	90
2. かなり役立つのではないと思う	57. 0	329
3. あまり役立たないと思う	24. 6	142
4. まったく役立たないと思う	1. 0	6
5. DK. NA	1. 7	10
計	99. 9	577

問19. ところで、このような防災対策の結果、今度もし大噴火があって、大島の人々が避難しなければならなくなった場合、住民の避難は61年11月のときとくらべてもっとうまくいくと思いますか、それともうまくいかないと思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 前よりうまくいくだろう	34. 7	200
2. 今度はうまくいかないのではない	60. 1	347
3. DK. NA	5. 2	30
計	100. 0	577

問20. では、もしまた三原山が大噴火して、町役場からふたたび島外避難命令が出たとしたら、あなたはいったいどうしますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 島外避難をするだろう	66. 2	382
2. 自分で判断して決めるだろう	18. 5	107
3. 今度は島に残るだろう	10. 9	63
4. その他	2. 6	15
5. DK. NA	1. 7	10
計	99. 9	577

(その他)

- * 会社の命令
- * 公務員ゆえ、上部の司令にて動くことになる
- * 船の管理があるので職場の長の命令による
- * 消防団に入っていますから消防本部の命令に従います
- * 業務の関係で一般島民と一緒に避難出来ないと思う。前回もそうだった。
- * 子供だけ避難させる
- * その時にならないとわからない
- * 何とも云えない
- * 条件つきで避難する

問21. 次に、お宅の防災対策についておたずねします。お宅では、現在、大噴火に備えてどんなことをしていますか<いくつでも>。

	%	N (人)
1. 非常持ち出し品の準備をしている	76.8	443
2. 防災訓練に参加した	64.8	374
3. 避難場所を確認した	41.2	238
4. 避難や連絡の方法を話しあっている	39.0	225
5. 地震保険に加入した	11.6	67
6. 噴火のきざしがないかどうか気をつけている	47.3	273
7. その他	1.0	6
8. 何もしていない	3.8	22
9. DK, NA	1.4	8

(その他)

- * 子供に気を付けるように話している

付問 1. <問21で、「1.非常持ち出し品の準備をしている」と答えた人だけお答えください>
お宅で準備している非常持ち出し品の中身を教えてください<いくつでも>。

	%	N (人)
1. 救急医薬品	65.5	290
2. ローソクや懐中電灯	86.0	381
3. トランジスタラジオ	55.5	246
4. 毛布や寝袋	15.1	67
5. ナイフ・缶切り・ロープ・ひもなど	44.5	197
6. 食料品	58.5	259
7. 飲料水	30.9	137
8. 固形燃料や携帯用ガスボンベ	2.3	10
9. 洗面用具	71.6	317
10. その他	38.4	170
11. DK, NA	1.6	7

(その他)

- | | | | |
|-------------------|-----|--------------|----|
| * 下着類・衣類 | 121 | * 貴重品(貴金属) | 41 |
| * 通帳(キャッシュカード) | 37 | * 重要書類 | 18 |
| * 健康保健証 | 12 | * 現金 | 11 |
| * 印鑑 | 10 | * 住所録 | 9 |
| * 登記書類 | 8 | * タオル | 8 |
| * カイロ(使い捨て等) | 3 | * 雨具 | 3 |
| * 位牌(仏具関係) | 3 | * 写真(ネガも含む) | 3 |
| * 店の帳簿 | 2 | * 紙オムツ(子供用) | 2 |
| * ティッシュ・トイレットペーパー | 2 | * 乳幼児用品等 | 2 |
| * 母子手帳 | 2 | * 老人用紙おむつ一式 | 2 |
| * 過去帳 | 1 | * 小型テープレコーダー | 1 |
| * カメラ | 1 | * 無線機 | 1 |
| * 筆記具 | 1 | * パスポート | 1 |
| * おんぶひも | 1 | | |

付問2 <問21で、「8.何もしていない」と答えた人だけお答えください>お宅で、なにも防災対策をしていない理由を教えてください(いくつでも)。

	%	N (人)
1. 大噴火が起こるとは思っていない	18.2	4
2. そのときには何とかかなると思う	45.5	10
3. 都や町が何とかしてくれると思う	13.6	3
4. 防災対策をしても役に立たないと思う	22.7	5
5. つい面倒でまだやっていない	13.6	3
6. その他	9.1	2
7. DK. NA	4.5	1
計	100.2	22

(その他)

余計な知識は判断と行動を誤るから自然現象には本能的対処の方が当てる場合が多いから未知の事に大して対策する気になれない

問22. <ふたたび全員がお答えください>ところで、昨年の11月16日、三原山に小噴火が起こりました。このとき、あなたはどんなことをしましたか(いくつでも)。

	%	N (人)
1. テレビやラジオのニュースに注意した	73.5	424
2. 町の防災無線の放送に注意した	74.9	432
3. 外に出て噴火の様子をみた	67.6	390
4. 噴火の様子を写真にとった	5.4	31
5. 噴火の様子について話合った	43.2	249
6. 電話で町役場・測候所などに問合わせた	2.9	17
7. 自治会や消防団などに問合わせた	0.7	4
8. 火の始末をしたり、ガスの元栓を締めた	34.7	200
9. 火山灰や噴石による被害を調べた	3.6	21
10. 避難の準備をした	25.3	146
11. 家に帰った	13.0	75
12. 外に出ている家族を迎えにいった	4.9	28
13. その他	8.1	47
14. DK. NA	2.4	14

(その他 31人)

- | | | |
|--|---------------------|---|
| * 島外にいた | * 何もなかった(仕事を続けた等) | 9 |
| * 家の中の掃除, せんたく物を取り込む | * 知らなかった | 1 |
| * 準備していたリュックの中を点検した | * 食料品・飲物・子供の物を買ひ占めた | 1 |
| * 職場から家にいる家族に連絡をとった | * 消防団に船までつれていってもらった | 1 |
| * まどからよく見えるので様子を見ていた | | |
| * 公務員であるためいざという時には自分のことよりも他が気になる | | 1 |
| * 仕事場が三原山頂(乗馬業)の為に噴火の様子を正確にとらえる為、できるだけ三原山頂に頑張った。(割れ目・噴火の30分前まで)。第1回の割れ目大噴火は確認。 | | 1 |

問23. 噴火からちょうど1年目にあたる昨年の11月21日には、おおがかりな防災訓練が行われました。あなたは、このときの防災訓練に参加しましたか(ひとつだけ)。

	%	N (人)
1. 参加した	74.4	429
2. 参加はしなかったが見学はした	4.3	25
3. 参加も見学もしなかった	13.5	78
4. 当日は島にいなかった	4.3	25
5. DK. NA	3.5	20
計	100.0	577

付問1. <問23で、「1.参加した」と答えた人だけお答えください>では、あなたはその訓練でどんなことをしましたか<いくつかつでも>。

	%	N (人)
1. 消火器の使い方を学んだ	42.9	184
2. 負傷者や病人の応急手当の仕方を学んだ	39.4	169
3. 防災袋をもらったり使い方を学んだ	11.4	49
4. 噴火のときの避難場所を学んだ	38.5	165
5. 避難訓練に参加した	63.6	273
6. その他	11.2	48
7. DK, NA	5.1	22

(その他 42人)

* 消防団として参加	10	* 防災ヘルメットの支給を受けた	8
* たき出し(食事)の手伝い	8	* 役所の職員として参加	5
* 避難誘導をした	4	* 避難用食料をもらった	1
* 視察	1	* * あまり参考にならなかった	5

付問2. <問23で、「1.参加した」と答えた人だけお答えください>その訓練は、今後また噴火があったときにどのくらい役に立つと思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 非常に役立つだろう	11.7	50
2. かなり役立つだろう	54.3	233
3. あまり役立つたないのではないか	25.6	110
4. まったく役立つたないのではないか	3.7	16
5. DK, NA	4.7	20
計	100.0	429

問24. 次に、あなたご自身の意見を、いくつかお答えください。まず、あなたは、大きな災害に対して万全の対策を立てさえすれば大きな被害はくいといえることができますか、それともいくら対策を立ててもやはり大きな被害は出ると思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 大きな被害はくいといえることができる	38.3	221
2. いくら対策を立てても大きな被害は出る	51.1	295
3. DK, NA	10.6	61
計	100.0	577

問25. 「火山の近くには観光地が多いが、そういう観光地はもともと危険な場所にあるのだから、火山爆発によって観光客がなくなってもそれはしかたないことだ」という意見があります。あなたは、こうした意見にどのくらい賛成しますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. まったくそう思う	16.5	95
2. ある程度そう思う	55.8	322
3. あまりそうは思わない	16.1	93
4. 全然そうは思わない	5.9	34
5. DK, NA	5.7	33
計	100.0	577

問26. では、あなたご自身のこれからの生活で、あなたにとっていちばん心配なのは、どんなことですか。噴火のことでもそれ以外のこともけっこうですから、できるだけ具体的に教えてください。

○泉津地区

- * 三原山と共に暮らして数十年、あまり心配していません。突如、頭上に溶岩が飛んでくるわけもなく、身を守る時間的余裕があるでしょう。
- * 火山島で何百年に一度という大噴火は絶対防ぐことは出来ないと思う。而し小噴火はつきもので仕方ないことで、唯いつも不安な気持はありますので多少暮しにくいものと思うのです。
- * どこにいても有線放送が聞こえるようにしてほしい。
- * アンケートを書く様に言われても私達の村からはあまり三原山が見えないので。元町や南部の方がこわさを知っていると思います。あの時も、地鳴りと煙が見えるだけでした。噴火はテレビで見ました。地震がすごいのにこわい位でした。
- * 私の個人的な意見ですけど、色々道等直していますけど、あんな所なおさなくても…等とつまらない所にお金を使っている様に思えます。こんな人さわがせな三原山も大島に住む私には大切な三原山です。大島もこの三原山がなければ何の魅力もない島だと思います。三原山があるから、大島は素晴らしいと思います。三原山に感謝しています。国からいただいたお金も、もっともっとお客様が来てくれる様、楽しい大島の為につかってほしいとおもいます。
- * 三原山噴火で主人もこの二年とても疲れたように思います。身体が健康でいてほしいとおもいます。
- * 噴火の発生する時間によっては、かなり避難に違いが出てくると思うこと。子供と離れている昼間のことが心配。
- * 噴火により島自体が沈むという事が心配です。(なきにしもあらず) 島に就職する所が少ないので来年卒業する子が島を離れて生活する事。
- * 島外避難が一番の心配。
- * 観光業ですので噴火が発生すれば当然の事、客がへります。三原山の火山性を充分に皆さんに知っていただく情報が大切であると思う。
- * 人口の過疎化は地域の衰退によるものもある。
- * 私はもうすぐ70才になる老人で健康に恵まれていないし、妻も年齢的には若いけど、二度も大病をして身障者になって居るので何より病気になることが心配です。健康なら噴火があっても何とか避難出来ますから。
- * 経済的な事と身体と子供の成長の事が心配です。

○岡田地区

- * あまり心配していません。TVやラジオ・新聞などで、少しでも山に異常があるとさわぎたてますが、島に住んでいる人はそんなにさわぎません。もともと火山性の島と知って住んでいるので、大島よりも桜島の人達の方がもっと大変だと思う。身体だって悪くすると思うし、大島の人はいろいろ反省する点があると思います。
- * 噴火後の生活(避難した場合)。観光業なので観光大島の生活。
- * ①収入がなくなる事。②動物の世話をしているので、避難と言う言葉がわずらわしい。
- * 夜中の噴火の時。
- * 噴火が一番心配ですが、来島客数の減少で今後の生活の不安がつまっている。
- * 島外避難となれば、その日からの生活が困ります。子供に仕送りもあります。島を愛してます。離れたくありません。
- * 噴火の為、観光客が来ても日帰りが多く商売をしている人達は非常に生活に響いていると思う。噴火後、融資を受けた時は切りぬけられても現在それを返済する時期に来て困っている人達が多いと思う。
- * 生活。
- * 噴火の予知も良いけれど客が来なくなるので困ります。
- * 大噴火がないかぎり心配ありません。
- * 大島は観光が主なので、三原山の報道が大きくなると観光客が来なくなることです。
- * 大島は観光の島なので来島客が減ることは生活に大きく影響することです。安全対策とともに、観光宣伝も必要だと思います。
- * 人間である以上、生と死はいつの時代にも変らずあります。一生生活して行くのに一番心配なのは医療のことではないでしょうか？これといったあてもなく、少しのことでも東京へ行くようになります。とても不安な生活をしている人達が多いと思います。三原山の噴火も気にならないこともないのですが…医療の問題は島に住んでいる者は重要だと思うので、もう少し真剣にとりくんで欲しいとおもいます。色々難しい事もあると思いますが、安心して生活が出来るような島にしてほしいと思います。

- * 私は病人、主人は足が悪く非常用品の持出しも多くは出来ない。子供達はそれぞれ職場。老人2人で心配です。
- * 避難所を作ってほしい。失業保険の特例を作ってほしい（避難の時に失業保険が出るように）。
- * 自営業（製パン業）なので仕事（商売）が止まるとか減るとか、収入の問題と、高校生と身体障害者がいるので、進学問題と療養所入居問題。
- * 経済的関係。
- * 噴火や災害の際、主人も私も公務員として勤務している為、義父母に子供を（保育園児2名、小学校児1名）をまかせて、避難してもらわなければならない事。また地域も元町と岡田にわかれている為に無事避難できても、逢えるまでに時間がかかるのではという心配もあります。
- * 漁業で生計を立てているのですが、気象状況が変わったせいか、魚がつかなくなった事もあり、心配しています。それと、もし噴火が起きた場合、消防に出なければならないので、収入がなくなる心配もあります。
- * 老人夫婦が少し離れて生活しているので、すぐに自分達の所へつれてこれるか心配。そのために車がスムーズに走れるように道路の整備をして載きたい。島では私共の家のような親子（老人）と別に暮らしている人達が多いので。
- * これから食べるだけの収入があるかどうか、生活して行くのが心配。
- * サービス業ですので噴火でお客様が来なくなる事です。亦予知連の方々には悪いですけど、テレビ・ラジオのニュースが流れる度にお客様のキャンセルがあるのではないかと心配です。
- * 地震のこと。
- * いつ噴火するか、噴火した場合家族が無事避難出来るか。
- * 観光客も噴火前にもどろつつあっても日帰りが多く、漁業の方も三原山噴火の為とは思いたくないんですが不漁の為、低利子で借りたお金の返済も今年から始まり、その面が一番の心配です。
- * 大島全体がまる見えのようである。
- * 現在独り身でありますので、生活の面では、心配のことはありません。
- * 健康でありたい。
- * われ目噴火による避難時の町の対策。61年11月の噴火の時、バスに乗せられ南部方面まで運ばれたりして、それだけでかなり疲れてしまった人達がいたそうです。町の情報ははっきりさせ、落ち着いて誘導してほしいと思う。
- * あの時は突然だから何も分からず云われた通りにしました。あの恐ろしさに気持ちが動揺すると思う。
- * 体が心配です。そして小さい子供が居る事が心配です。
- * 大噴火。
- * 生活が第一である。
- * 経済状況その他家庭内の問題が数多くあります。
- * あまり深く今後の事を考えても仕方のない事とおもいますので気にしないで生活をしたいと思います。
- * 大噴火となれば島民全体の考え方で町の指示に従えば良いと思います。
- * 大噴火さえなければと思っている。
- * 島を出るので何も考えない。
- * 病気の時の事が一番心配になります。病院の確保。
- * 噴火・地震。
- * 観光客の減少。
- * お客様が来ないと不景気になると心配の事、噴火もおこさない様に祈るだけの事。
- * 岡田港地区では家が密集しているので家事が一番恐いので火の元を一番気をつけている。
- * 地震。
- * 収入が減った事。宿泊客が少ない事。
- * 自然にはかないませんので、なるようにしかならないので、大した心配はしていません。
- * 大島は観光地であり観光客が来なければ生活困難である。
- * 噴火、地震、風水害。当大島は大変厳しい立地条件下にある故。
- * 島民にくわしく教えてもらいたい（報道より先に）。

○北の山地区

- * 噴火の対策工事で自然が失われる。
- * もし大きい噴火が起こった場合、家族に病人がいる場合。

- * 大島には、仕事の場所が少ないと思います。子供が大きくなった時それが困ると思っています。
- * 噴火の事に関してはさほど心配していません。専門的な事は沢山ありますが、余り参考にはならないと思いますので控えます。
- * 大噴火の際の天気の悪い時の避難方法。
- * 現在補修しなくてはならない場所でも噴火が心配で積極的な設備も出来ない。そうかといって設備をしなければ観光客の誘致もむずかしい。現在の気持ちは三原山に聞きたいです。
- * 噴火の可能性はあると思っていますが、新聞テレビ等で危険を報じるたび観光客が減るので安全宣言が出ない限り島の人々の生活が厳くなること。
- * 客商売の為、観光客減が気になる。
- * 今後にもし大噴火なり、大地震なりが起き、最悪の被害を受けてしまったら、我家は保険等に加入していないので何の保障も持っていない。不安です。
- * 三原山で噴いてる時は大丈夫だと思いますが外輪で噴くところわいと思います。
- * 少々の噴火でもテレビ・ラジオで大袈裟に放送するので観光客にずいぶんと関係してきますので、その処をもう少し考えてほしいと思います。
- * 民宿＋土木作業員＝収入で生活しているが61年11月21日の様な事があれば自分達の収入は0であり災害後の生活は大変である事は言うまでもない。
- * この大島から出るつもりはないので、このまま大きな噴火がないのを願いたいと思っています。
- * 病気になった時が心配です。
- * 商売を軌道に乗せる事と家族の健康です。
- * 1.体に感じない火山性微動については、報道しない方がいいと思います。観光客に動揺をあたえるだけ。2.有線放送の充実（東海汽船専用の有線放送で、感じられる地震があった場合震源地はどこであっても必ず放送してほしい。）
- * 噴火の情報報道がテレビ、ラジオ等でオーバーすぎる。大島は観光主体の島である。少しは考えて報道してもらいたい。又、地震等があった場合、早急に防災無線の利用を望む。どのような細かなことでも、三原山なのか他の震源地なのか等。
- * 再噴火の程度が一番心配です。その規模によっては、再避難等々で島の経済と生活の基盤が不安になること。
- * 噴火が起きた時、遊びに夢中になっている子供たちが、いち早く噴火に気づき大人といっしょに避難できるか。（どこに遊びに行っているか判らず、とり残される事がないか）
- * 火山で出来た島に住んでいる以上、噴火や溶岩流出等は充分承知の上で、一昨年の大噴火時の直前の火山性の（直下型）地震等の体験から、また同様に等しいような状態にならない限り余り心配はしていない。
- * たとえ噴火が又起きたとしても出来る限りこの土地で生活していきたい。
- * 母子家庭で、中学生2人、小学生2人の子供と、78歳、86歳の父母がおります。61年の島外避難のときに、私1人で何でもやらなければならなかったし、岡田港へ行くにも車がつかえなかったのとはんとうに、大変でした。そういう時に、消防の人とか、もっと母子家庭、又老人のいる家庭に、気をくばってほしい。
- * 島の経済が円滑に回らなくなる事。
- * 島に住めなくなった場合は子供の所へ行くよりは仕方ないと思う。年金だけをたよりにとっておりまます。
- * 島に住めなくなった場合、職が見つかるか？年も40過ぎると働く場がむずかしいのでは？
- * 又三原山が急に大噴火した時、今すぐ避難という時に子供達が学校で親の所に帰る時間がなかったらどうしよう。
- * だんだん年を取るので心配です。
- * 考えたくはないが、再び島外避難があるような噴火があった場合に天候不良で船が使用できない時は、どうなるのか？町や国ではどんな考えでいるのか知りたい。
- * 前回の島外避難のおり、1ヶ月に及ぶ集団生活で多少なりとも人間関係のもつれ等が生じたのではないかと思う。これから、この人間関係のもつれは、どこまで回復できるか……。見た目は、そうでもないかも知れないが……。
- * 今後、不特定の場所から噴火しないという保証はないと思うのですが、なるべくなら旧火口からだけにしたいと思っています。
- * 医療機関が充実していないため大病の際は東京へ行かなければ治療出来ない。

- * 8年間住んで見て、観光地としての進歩は大して見られない。もっと島民の幸になる対策は、あるはず。何の行事にしても、宣伝倒れで、結果は、全般に発展性はない。
- * 噴火に対して冷静な判断ができず、いたずらにマスコミに振り回されること。(興味本意の報道は考えてほしい。)

○元 町

- * 子供の進学問題 (63年度、高校、大学の受験生を抱えている)。
- * 避難後各自の生活基準が変わりました。自営業をしておりますので売上面も大変減少しておりますので大変苦労しております。サラリーマンの人々は生活基準は変わらないので給料も受け取れますが、自営業の方々は苦労していると思います。
- * お金がないこと。
- * 大島に住めなくなること。
- * 大噴火がおこるかどうか。
- * 大噴火があり島外避難などになった場合の生活の不安。
- * 老人がいること。
- * 商業ですので避難中の損失の為、多大な借金を負い、地震で家屋がいたみ、建て直しをしなければならなくなり、これから又大きな負債のために頑張らなければならず、大変です。
- * 噴火によって観光客が減るのが心配です。なぜならば観光関係に依存している方が多いからです。
- * 特に心配はしていない。突然の災害をさけることは困難であると思いますが、日々の生活の中に備えあれば憂いなしの精神を心がけたいと思う。
- * 再噴火による生命の危険性。
- * 主人も70歳、小さな子供、私も丈夫でない。働き手の息子は消防で家族のめんどうを見る事が出来ないで嫁さんが大変心配しています。
- * 家族の健康。
- * 特にありません。常に日常的だとも思います。
- * 噴火の流れがわが町に流れないか。
- * 噴火すると来客数がとたんに減りますので、噴火しない事を願っています。
- * 前回以上の大噴火で、元町等の村が三宅の様に全滅する事。なお、1,300年代元町に流れた溶岩でも幅が1km位しかなかったので、大きな水蒸気爆発がなければ大島から外に出る事はないのではと思っている。一番心配な事は東京にいる間に関東大震災位の地震に遭わなければならないと思う。
- * 農業関係の仕事をしているため、また噴火等で避難生活があれば生活はできなくなる事。その日から無一文になるため、出来る事ならば二度とくりかえしのない事を祈っています。もっともっと大島にも働ける産業等があればいいと思うのだが。
- * 1. 水蒸気爆発及び斜面の割れ目噴火、2. 町の避難命令時に暴風雨の場合、3. 観光客減の場合、若い男女の島外による人口減。
- * 我が家は、海の近くにあるのに、もし避難命令が出た場合、山に向かって、小学校まで行く事にとっても不安です。
- * 家族の健康。
- * 再噴火により、再び収入がストップすること。(再噴火による商売の今後の行方)
- * 大島の安全性。
- * 観光客の減る事。
- * 夜中に噴火や地震がおきた場合どうしたらよいか、一人暮らしなのでその事が一番心配です。
- * 自分自身、特にないが、町全体を考慮すると、観光の活性化、充実が必要であると思う。
- * 病気。
- * 観光客が少なくなり、過疎地になるのが心配です。
- * 噴火のことはいつでも心の中にあって毎日山を見るのが習慣になっています。三原山の島で暮している限り消す事の出来ないことだと思います。
- * 1. おそれるものは、山腹噴火、2. 願うものは医療の充実。
- * 家族に病人がいて、現在は自分の身の回りは、やっているが、噴火等で生活環境が変わり寝込む恐れがあるのが心配だ。前回避難生活で中央保健所に登録されたが、今年2月に保健所より係員が病状調査に来た程なのが気掛かりです。
- * 大きな噴火が起こった時、気象状況が悪かったら大変だと思います。

- * 人事をつくして天命を待つ。クヨクヨしてられない。
- * 今は、ただでさえ観光客が少ないのに又噴火してしまったら、減ってしまうのではないか。
- * 観光客の少なくなるのがこまる。
- * 大噴火。
- * 食料品、電気、ガス、飲料水等の整備確保。
- * 報道にて、火山性微動などを知る。テレビ等放送必要ないと思う。活火山の島に住む者は、噴煙が出る事を望む。
- * 家族が健康で暮らせるかどうか。
- * 噴火の経験をしました。地震と噴火が一番心配に思っています。又、今後年を取るにしたがって、息子が東京に出て働いているため老人になってからの生活で健康でいられればよいが病気にでもなるとの事が心配です。
- * 噴火が二度とない事を願っております。
- * 外輪山割れ目噴火を見て、いつ、どこで噴火が起こるかわからないので心配です。20年前、今度噴火した山で、(家内中で)泊まりこみで仕事をして居りましたものですから、今考えただけでもぞっとします。
- * 雨や強風の場合でも住民が避難出来る大きな建物がほしいと思います。
- * 島は不景気になる。
- * 大噴火はもうまっぴらです。
- * 現在三原山がどうなっているか。
- * 生計をたてている商売が将来、現在のようにやられるだろうかという不安。子供が自立できるかどうかという心配。歳をとっていく両親の事。
- * 島の三年間の生活は、大変楽しかったです。物価は多少高いが、自然と生活できる島は大変くらしやすい所です。
- * 老人の為、歩く事が困難で人に面倒を見てもらわないとなりませんので、いざという時は一寸心配です。
- * 噴火した時の天候。(島外へ出ないとあぶなくなった時、海が荒れてて、船が出せない場合等)島内避難の場合でも、避難所まで歩いていくのに、台風のような日だったら不安。
- * 4月に新居を建設する予定でいますので、とにかく大噴火や大地震が心配です。おこらないようにと祈るばかりです。
- * 病気になったとき(緊急を要するとき)都市のような設備がない。救急施設の万全を願えたら、たとえば病院の増設か、もしくは急病人の都市病院への移送など(現実にはときどき行なわれているが)本人の希望によって自由に早く内地へ渡れたらと思う。
- * 現在生活は一応安定している。84歳の高齢でも現在足腰も健康、月例会に、ゴルフにも参加。家内81歳で足腰が最近弱く1昨年11月以降の噴火で避難の場合困難、子供(嫁行った人)孫等に迷惑があると考え心配である。
- * 観光地としての大島の見通しが暗いこと。
- * 割れ目噴火が一番怖いですね。大島にはマグマ留りが3カ所あるとっています。ですから、いつでもこれから今度は噴き出すんだろうという心配です。
- * これから観光客がなくなったらどうなるのか心配でなりません。
- * 老人(84歳)の父がいるので、島外避難の際の行動中の健康状態が心配です。
- * 噴火により島外避難をしなければならない事。
- * 噴火が何年何月何日に起こるのか予測出来るようにならないものか、それを期待しています。場所と日と規模。
- * きっと前ぶれがある噴火とはかぎらないと思うこと。(自分では前ぶれがあると信じている)
- * 観光客(宿泊客)の減少により島の経済が停滞し、増々働く場所、人の減少が起こると思います。
(町の広報によると人口の対前年度比が出ていますが、噴火後の人口減少<過疎化>が今まで以上に早く進んでいるようで、大変心配です。)
- * 観光客の減少。
- * 一人の生活ですので病気になるように注意しております。
- * 観光で成り立っている島なので経済的な事が一番心配(子供が高校大学で、仕送りをしているので)。
- * 家族の健康。健康であれば災害が起こっても耐えられる。
- * 万が一にも再度大噴火して島外へ、という事態になると、今折角生活も商売も持ち直してきたところ

- で、繰り返したくないと思う。子供達には島外に家庭を持たせるつもりです。
- * 自然の災害より人工的災害の方が最もおそろしいと思う。たとえば化学的物体、他国との戦争。
 - * 必要以上にマスコミの影響が大島の場合悪い方に出やすいこと。(特に観光面)これは、融資が返済期に入りもっと現れてくると思う。
 - * 観光立島をめざしていた大島ですが、噴火により危険感がまだぬけきれず宿泊客のげきげんにより、現金収入を観光客にたよるわけにはいかなかったので外に生計の道をかえなければ生活していけない。
 - * 大噴火によって精神的な面は心労が大きいと思います。経済的にも大きく時間がかかると思います。
 - * 老人の避難と健康状態。
 - * 家族の噴火に対する不安感の増大。老人、子供の避難時の安全度。
 - * 島で農業をやって行きたいと思っていますが噴火のことが一番心配です。
 - * 特に心配と云うわけではありませんが過去の噴火(現在48個)の噴火口跡がありますが大島全体いっどこで噴火があるかはわかりません。水蒸気爆発がおきるとおそらく大島の形が変わってしまうと云うことが考えられます。だがそれを気にしていたら生きてはいけません。その時はその時と半分開き直っています。
 - * 噴火避難以後、商売ができなくなった。
 - * 施設に勤めているので、大噴火が起きた場合、入所者を安全に避難させられるかどうか。また、いざという時、職場を優先することになるので、残した家族が心配である。
 - * 避難時の一人暮らしの人や老人の人たちと安全。
 - * 自然災害は何時来るかわかりませんから、その時にどう対処するかを考えておけば良いと思います。
 - * 自分なりに知識を持ち、他人のウワサ等にまどわされぬことが安全と被害を最少限に防ぐ方法だと思います。
 - * 火山の島に住むものとして、噴火はまぬがれない。だから、この噴火はギャクに、大きく利用して生きていきたい。さけていてもだめであると思う。安全であれば大いに利用できると思う。
 - * 噴火があった場合、家族と行動を共に出来ず、安否が心配である。
 - * 土産店に働いているので観光のお客さんが一人でも多く来ていただくよう願っております。三原山もまだ不安定のように心配です。
 - * 老人をみてる人は、噴火の時は大変です。これから先、老人の行く末がただ心配です。
 - * いざというとき、みなさまについてゆけないからだになったらどうしようかとしんばいです。一番けんこうで、あるけるからだがいじと、どりよくしています。
 - * 観光の島より、マグマ利用の島づくり。
 - * 噴火よりも、東京大地震、東海大地震の可能性が多いことが気になる。家族と離れていることもあり、いざというときに会えないことが心配である。
 - * (医療設備の充実を)島は自然環境、生活環境とも非常に好条件に恵まれ、快適な生活がおくれると思います。反面、島で生活する上で一番気掛かりな事は医療機関の不足、未整備が心配です。現在大島には公的医療機関2、民間1の診療所、医院がありますが、医療設備が未整備のため、島内では手術ができず、万一の場合、行政ヘリコプターを要請し、病人を都内へ運搬し、手術を受けることになります。行政ヘリを要請するのは、交通事故、脳卒中等急を要し、一刻をあらそうことが多いため、手遅れになることもあります。また、検査設備も少ないため、病気の発見も遅れるのではないかと思います。ぜひ医療設備の充実を、もしくは、それがむりな場合は、もっと迅速な行政ヘリ等による運搬体制の整備充実をお願いします。
 - * 今度大噴火があったら、家には年寄りが二人もいるので前の様にうまく避難できるか心配です。
 - * 噴火が起きた場合、両親がかなりの年齢なので、又、同じ家に住んでいないので、にげる場合を考えると、不安が多いです。
 - * 大噴火のこと。
 - * 観光の島なのでこれ以上新たな噴火は観光にとりマイナスになる心配がある。
 - * 家の事。
 - * 自然の摂理のなさる出来事と受けとめており、神(自然)のまにまに身を任せたいと云ふ心境です。諦めではなく、人として、此の世の中、ケンキョに生きる姿勢が必要ではないかと。
 - * 噴火で避難になった時、歩けない老人がいるので心配です。
 - * 見舞金をこれからどのように分配するか、今わたしが思っていることを言います。次の災害にそなえているのは、おかしいと思います。日本全国の皆様がこのことをきいたら、大島のみんなは日本全国

の人たちにわらわれるでしょう。

- * 噴火によって職を失い、又今年になって観光客の足も少ないので、現在、無職です。困っています。
- * 噴火する事。
- * 人為による自然の破壊。
- * 大島全体が観光客で生活がなりたっているのだから、テレビのニュースで客の足が近くなったり遠くなったりし、それにふり廻されている島の人間（自分もふくめて）が、どうしたら、もっと大きな心で生活していったら良いのかを相談していくべきである。まだまだ他人はどうなれ、自分さえよければよいという島国根性が、どっかに生きているうちは駄目だと思う。
- * 大島は観光で食べて行く上でお客様がお金をおとしてくれないと島全体が困ると思います。
- * 再噴火の危険—小清水水路の水温上昇。千波地区は外輪山がないため雨天の時はイオウのにおいがひどい。観光客の減少。
- * 職業が理容で人口毎年何十人とへって行くのが心配です。
- * 観光客がかなりへっていると思います。お客さんがあるかないとは直接、旅館関係はもちろん、いろいろな方面で、マイナスになっていくと思います。このままでは島全体が苦しくなっていくのではないかと思います。自然が相手ですから決してこのまま三原山が噴火しないと言う断言は出来ませんが何とか復興する事を考えねばならないと思います。
- * 私は観光業に従事していますが、（ホテル勤務）先日宿泊されたお客様の話ですが、大島へ来たいと思う気持ちはあるが、テレビ新聞等で火山性微動がある等と見たり聞いたりするとやはり心配で取りやめたり宿泊しないで日帰りで帰ったりする事にしてしまうと云う事です。
- * 私は公務員の為何か災害があった時すぐに家に帰れない為足の悪い82歳の老人がとても心配です。これから先何があるかわかりません。老人、子供だけでも家族がいなくとも出来るだけ早く避難出来るような対策が必要だと思っています。
- * 今はこれからの噴火がとても気になります。椿まつりのせいなのか、マスコミからの情報も少く、もう少し情報が欲しい。
- * 大島全体がふき飛んでしまうような、かつてない大噴火すら起きる可能性があると思う。
- * いつ噴火するかわからない物を先へのばさず、見舞金を早く出して貰いたい。
- * 大島は観光客がなくなると住民は生活が苦しくなる。
- * 収入がなくなり生活していくのも大変な事です。毎日の生活の中で大島に住んでいる以上いつどこから噴火するのだろうかと思うとやはり心配です。
- * 噴火で自分の家や土地が溶岩でうまってしまうのが心配です。
- * 観光地なので、噴火によって地域の人々の生活が不安定になること。
- * 病気や老化の為、自分の体が自分で動かせなくなることを心配します。
- * いつ又噴火がおきるかも知れない不安ともしおきたとしたらこれからの生活のことも考えておきたい。
- * 健康の事です。

○野増地区

- * さらに大きな噴火があるかないかを知りたい。
- * あの噴火から大島へ帰ってきました。有難うと幾重にも申し上げなければならない事。大島に残って二名ずつ畑の方までも見て下さったのに頭がさがりました。
- * 寝たきり老人にならないこと。痴呆にならないこと。
- * 大噴火が怖い。
- * 商店をしている為、噴火などがくると生活が出来ない。
- * 子供達がエリートとして成人しているので島にいても東京に行っても別に生活には心配はない。
- * これは噴火にも関係があるのですが、大島だけの問題ではないでしょうか殊に噴火等によって、過疎化の傾向に一段と拍車がかかることです。そして島自体が次第に活気がなくなっていく事です。
- * 私の生活より、町として観光客の減少を心配している。活性化の為、全島民が真剣にならなければと思っているが、どうものんびりしている。
- * 体がよわいのでどんなことでもおきてほしくない。
- * 2歳にまだならない子供と毎日、家にいます。もし、今、大噴火がおきたらどうしよう、大地しんが起きたらと思うととても不安です。早く三原山がしずかになってほしいです！
- * 観光業にたずさわっておりますので噴火が起きると観光客がずい分へってくるおそれもあるため経済的に困難になるのが心配。

- *噴火による被害。
- *噴火によって灰が風によって降ってくるので畑の「やさい」及「キヌサヤ」「花」などに被害が出る事。
- *火山性地震や微動が続いているが大きな噴火につながらないといいと思う。
- *避難の際、ねたきり老人をかかえているので心配です。
- *噴火すると生活が不安定になるので心配です。
- *自分への直接影響はないにしても観光地としての大島としてみれば、微動及び弱震等の情報も見直してほしい。
- *もし噴火が昼あったら、仕事場と子供が学校なのではなればなれにならないか、家の中にいる犬をむかえにこれるか。
- *体の悪い事。耳がきこえない事。
- *全島民の島外避難命令は慎重に出してほしい。出した場合はこの間の生活保障、その後の経済的保障を充分に考えて欲しい。
- *私の家では主人が漁業、私は民宿を営んで居りますが噴火後お客様が少なくなりました。でも私共では釣人や知人のお世話で多少はありますが噴火や地震のテレビの報道でキャンセルになり困ります。
- *①噴火により観光客のこなくなるのが心配、②火山灰により農漁業に影響。
- *噴火以来、釣客がへったので生活に大変えいきょうしている。今のシーズンは、西風が強いので一本釣だけでは大変であるが、あい間をぬって出漁して、金の返済や生活費にあてている。本当にきびしい状態です。
- *再び三原山が噴火しても現在の情報伝達状況では正確に住民に伝わるかどうか。島内各地に同報無線のスピーカーが取り付けられたがその多くは観光客対策ともいえる場所にある。住民の生活上日中畑仕事をしている人も多いのにそれらの場所にはまだ同報無線のスピーカーは設置されていない。
- *私は77歳の老人ですが、若い時は、東京で商売をして居り、老人になって島へ帰り、農業をやっているが、こんなに良い島は他にないと思って居ります。たとえ、大噴火があっても此の大島で一生暮らすつもりです。
- *避難命令が出た時に、子供をつれて、スムーズに避難が出来るかどうか？（主人が消防の職員の為、何かあった場合に一緒にいる事ができない）。

○差木地地区

- *子供のここと。
- *家族の健康、安定生活。もし噴火の場合、子供達の安全な避難。島外避難の時、人間的な避難生活（プライバシー、健康、等）。
- *これからまた、噴火がおこるかどうか。又どの程度か。
- *これという心配はありませんが、これから静かな大島にしたい。
- *避難の時、何の混乱もなく出来たのは幸いでした。今後又こんな事があったとしても家族バラバラに成らず、皆が一緒に何事もなく出来る事を願う。
- *噴火によって、島外に避難しなければならなくなった場合に、収入が減ってしまう事が心配。
- *大噴火がなければ、特に心配はありません。
- *昭和60年に交通事故にあって、足が不自由なため歩く事が困難。
- *主人が病気で手足が不自由だから。
- *心配することは今のところない。
- *降灰による畑に被る被害。農業不在の行政。
- *前回のような割目噴火が起り（自宅の近くに旧火口がありヒクボ火口）生活に直結する農地等が被害を受けることが心配です。
- *①大噴火の2年前程、三原山火口を一巡した時に内輪山北東部頂上（今度の噴火口）の岩間から非常に高熱な水蒸気が出ていたので家中で今度はここから噴火するのではないかと話した事があった。②生活は自然にまかせ、それまでは努力して現農作に全力をそそぐ。
- *毎日仕事のため通勤で、千波の所に来ると、三原山を眺め今日は山は静かに煙をはいているだろうかと思っております。いつまでこういう気持ちが続くのでしょうか。
- *前の避難の時には避難所にいた人がかなり体の具合の悪くなった人がたくさんいましたので、今度避難するようなことになった時に家族の者の健康が心配です。
- *私の主人は大島三原山に乗馬組合員として20～30年間馬方として仕事をしていましたが、三原山噴火

以来昭和61年11月～62年12月まで一切仕事なしと主人はっています。毎日見ている三原山が学会の偉い先生が機械をもって見るよりもいつ噴火するかは、俺のほうがわかると思っています。昭和38年頃の乗馬組合員は毎日火山灰が降り石が飛ぶ中を営業していました。大島は観光による島なので噴火のさわぎがあまり大きくなると観光客の来島が少なくなりまして馬方は観光の末端業者なので生活に一番困ると思います。

- * 三原山噴火にしても余り心配しておりません。
- * 日常、家族が学校や職場なのでもし、日中避難するようになった時のことが心配です。
- * 正確な情報を得る手段がない。
- * いつ噴火するか心配でしかたない。
- * 私は農業を営んでいます。噴火による降灰その他により畑ができなくなるのが心配である。
- * 自分の将来や家族のこと。
- * 噴火が何時あるかそれが不安です。
- * 家を建てたいが三原山が心配と言う声を聞くので仕事のなくなる事が心配です。
- * 老人ゆえに心配である。
- * もし、噴火をした時に主人が公務員のために一緒に行動できないのが一番心配です。
- * 早く三原山の安全だと言う発表が出る事。島の生活は観光にたずさわっていると思います。お客が安心して島にくる様になれば生活も安定していくと思う。総合病院がほしい。(盲腸になっても島では手術が出来ないのはこまったものだと思う。)
- * 高齢者夫妻、二人ぐらしですから噴火の時は勿論、その他の災害時にしても、平常時にあっても一抹の不安はあるもの子供二人も都内に居住すること故あまり心配はありません。
- * 水蒸気爆発の予知がどれだけ正確にできるか？又出来たとしても爆発までに子供(幼児三人)をつれてすみやかに避難できるのだろうか、ということ。
- * 避難命令がでたら年寄り、乳幼児、子供を優先的に。
- * 1. 今後三原山噴火の事はあまり心配しておりません。2. 経済的にも心配ありませんが、老年の為死亡後の土地の処置を子供たち(島外)にまかせておりますので心配としては以上の事ぐらいです。
- * 農業なので、一日も早く復興出来る様に毎日努力しています。
- * 住まいが溶岩でうまったら、代地とか、住宅は、すぐ間に合うだろうか。
- * 1. 61年11月21日の大噴火による避難の際は大変お世話になりましたことを感謝しています。厚く御礼申し上げます。2. 噴火によって職業がいとなまれなくなった場合の対策法を早急に考慮してほしいです。
- * 年よりなので健康でいたいです。
- * 噴火について一亀裂噴火があった様に三原山以外の所で、噴火するという事が心配です。場合によっては町の中？
- * 波浮港の中に大きな船が入れるようになると良い。元町、岡田港、桟橋をもっと長くして、大きな船がつけられるようになると良いと思います。
- * 観光資源に依存度の強い大島では、知名度、観光度からも一級のもので今まで真の観光地として名実ともに発展を望む者で観光に励んで行きたいと思っている。
- * 一次産業の活性化も期待できない現状、又二次産業の育成も出来ず、島の産業経済に将来性がない。
- * 三原山の噴火。
- * 突然の噴火。
- * 都道をひろげる為に家をこわしたので自分の商売が現時点でまったくできない。
- * 噴火の事が一番心配です。
- * 大噴火の際、新生児を抱えての避難は大変なもので、今後又、起こるとした時、もっと子供が増え、守らねばならぬ者が増えるにつけ避難を思うと、不安になる。
- * 心配なことは、これといってありませんが又噴火して避難した場合、帰島してからの生活の安定、畑の仕込(園芸)等で色々大変なものと、避難中一ヶ月の間遊んで暮らす(何もする事もなく、或は手につかず)様な事は二度と嫌だと思えます。何か仕事でも出来れば良いと思います。
- * 密教神霊学の研究を40年に渡り加持祈禱道場を開設してきましたが、信者の要望があり大島に神経症及び精神的奇病の加持祈禱専門収容道場の増設を計画していたが、噴火の為に患者に与える影響が悪くなったため計画を中止している。噴火後、川崎に加持祈禱分室を置き精神加持祈禱をしているが、設備が大島のようにはいかない。
- * 噴火のこと。

*避難した場合あとで収入の無くなった場合の心配。

○クダッチ地区

*自分達は、自営業なので仕事の切れない事を望んでいます。

*近海の漁獲が減少しつつあることが心配である。

*この前のような大噴火があっても、前回のように全員が避難する事のないようにしてもらいたい。

*大島は火山島ですので古来より島人は火山と共に来たと思います。火山島であればそのようにして島づくりをするしかありません。

*噴火が又あるのではないかと心配です。波浮港が早くよくなり、大きな船が入れるようになって欲しい。

*避難による減収、降灰による農作物被害、借入金の返済。

*船に乗っての長い航海なので留守の間に噴火があった場合の家族の事が心配です。それ以外の事は何も心に掛ける事はありません。

*子供達（4月から中1，小3の息子2人）の将来と私の仕事（化粧品販売）の売れゆき。

*島外避難が間に合わない程の大噴火。

*噴火で島外避難する様な事が起こらない限り現在の生活に不安はない。

*私は足が不自由で歩行困難です。噴火の時、波浮の港から小さな舟に乗り、沖で船に乗りかえました。

*船に乗っても横になれないし、椅子に座っても下げたままで氷のようで、どうしようもなく苦しかった。船の中が一番辛かったのは忘れられません。まだまだ不自由な人は、いると思います。そのためにも、小さな舟から乗りかえて乗らなくても良いように、大きい船が入れる港を早く作って欲しい。

*噴火の報道は出来るだけ確実性が高くなってから、効率良くしらせて欲しい。普段から何時でも逃げ出せる様に避難用品を整えてあるので、あまり不安を感じさせない生活をさせて載きたいと思う。

*町役場からの避難命令に従う時、ペットを残して行けないし又連れて行っても避難先で困るだろうし……。ちょっと気がかりです。

*噴火。

*借金、商売、返済。

*降灰による作物害。

*人間が楽しく明るく生活できる毎日であって欲しいので常に周囲の人々の幸福を祈っている。それが逆になることが一番の心配。

*三原山の山頂噴火なら心配はしていない。（S. 25. 26 の噴火の時など母は私を背負って三原まで見に行ったそうです。それくらい心配の少ない山だと話を聞いているので）

*特になし。

*近くで噴火（割目）がある事。

*割目噴火が部落の近くで起こる事。

*山腹噴火、水蒸気爆発、地震。

*小噴火はこれからもたびたびあると思いますが、降灰による農作物の被害等を心配しています。大島の産業がこれから良くなるか悪くなるかは、水の確保が一番大切だと思います。

*山頂付近の噴火には心配していませんが、過去のデータから大島全体のどこから噴火してもおかしくない地形であるので、山頂以外の噴火を考えると不安な事もある。

*病気があるため、いつもびくびくしています。今なにか起きたらどうなるかと思うと、ぞっとします。

*噴火のことは心配ですが、日常生活において一番心配しているのは、噴火のために島を離れる人が出てきている事と、常に心配事が報じられるために商売にならないという事が現在の心配である。

*再噴火して避難するようなことになると、子供3人まだ小さいので心配です。（主人は当然、消防団として残ることになるため）

*大島だけではなくて、日本中どこにいても、いろいろな災害による危険が我が身に降り掛かってくるのではと、ふと思うことがある。あの大噴火の避難直後、東京で地震があったが、どこに行っても（逃げて）陸の上にいる限り、怖い！と心の底からそう思った。できるものなら空中にういていた！

*身体障害者なので噴火した時に一番心配しています。

*今後の噴火の事が心配です。

*噴火しないこと。

- *いつまた起こるか分からない大噴火。
- *子育て。
- *自分達は現在、妻と二人だけで生活している。子供達は島外で生活している。自分達は経済？よりも高齢であるから（自分87、妻83）健康に一番心配である。
- *また島外避難命令が出た時。
- *噴火のために大島に来る人々が大変少なくなっていると思う。大島は観光の方々と生活をしているので、やはりもっと観光客の人々に来てもらい島の生活にうるおいがほしい。
- *現時点においては、噴火の恐怖も薄らぎましたが、何時かは判らないが数年後には大噴火があるのでは、と思うと、子供達（東京在住）には島での生活はさせられないと思う。やはり心配になるのが老後の生活、当然子供達と離れ離れの生活が余儀なくされ、長年島で暮した者にとって簡単に島外での生活は出来かねとても不安。
- *島外避難は出来るだけしたくない。
- *噴火についてはあまり心配していない。でも自然現象を馬鹿にするつもりはない。いつ天災がやってくるかわからないので、できるだけ備えはして、あとは天にまかせるしかないと思う。
- *漁業資源はこれから少なくなってくるのではないか。
- *観光開発、道路開発で自然が破壊されないことを望む。
- *一人暮らしなので生活費が一番心配です。

○波浮地区

- *噴火による収入減と乳幼児がいるのでそれぞれその時の対応。
- *火山の島に住んでいる者にとっては、噴火の事は常に頭の中のあるのが、当然です。ことさらにマスコミ等で報道され人心をみださないようにしてほしい。
- *現在南部地区に住んでいるので、もし大噴火になった場合南部地区は南部の港からスムーズに避難出来る様に早急に岩壁が出来る事を願っております。
- *私の家では、二人家族ですが、娘夫婦が町役場に勤務しています。そのため現在一才と三才の子供をあずかっています。主人は海の仕事ですから昼の災害の時は二人連れていると多分荷物も持てない状態だと思います。子供のミルク、おむつなどは常時用意して最小限の仕度だけしてあります。
- *噴火によって家屋を失う事。生活の基盤を失う事。
- *私自身年ですので、二度と前の様な噴火で避難等する事のない様祈るのみです。
- *噴火以来道路はよくなり、夜も明るくなって暮すのは大変良いですが、これといった産業もなく若者には住みづらい老人だけの島になるような気がしてなりません。
- *漁も安全宣言がでるまでは心配です。
- *私の場合は夏季だけ民宿を営んでおりますが、それでなくとも年々観光客が落ち込んでいる所へ今度の噴火ですので昨年の夏は波浮の方は特にお客様が少なかったようです。一日もはやく安全宣言が出され安心してお客様が来島出来ますよう願ってやみません。
- *足腰が弱くなっているので噴火及び災害の時、皆さんとただちに統一行動をとって避難出来るか心配している。
- *老後の生活。
- *島外に出ないで仕事ができればよい。
- *一昨年の噴火で自宅の前の道路が地割れしたので噴火による頻繁な地震が心配です。
- *食料である。
- *何時どこで噴火するのか全く不明なので、噴火の島に住んでいるのだから、と云う気持ちでおりますが、やはり噴火の場所が心配です。
- *やはり大きな爆発があるのではないかと云う事が一番気がかりです。住んでいる所が港のまわりなので、水上爆発が一番心配になります。
- *国の指導者でも、地方の指導者でも目先のことしかわからない人が多いのが心配だ。大災害は人力金力では防げないことを知る。
- *噴火は自然現象として起りうるものとして考えているが、私の心配は噴火する場所や噴火時の気象状況（避難にさいして）が心配である。
- *噴火がおきても健康であれば避難できますが、年をとって動けなくなるのが困ります。
- *観光客の減少。
- *心配の事は雨噴火です。

- * 現在、三原山は活動中。今後まだまだ噴火の起こる可能性ありということですのでそのことがやはり一番心配です。もしも、そうなった時小さな子供を連れての避難になるわけですのでスムーズにいくかどうか。そういったことも心配です。
- * 収入が減少すること。
- * 水産関係の仕事ですので、一昨年の噴火後魚類の水揚げが減少し、早くこの傾向の回復を願っています。
- * 噴火のことはあまり心配しておりません。唯私の住んで営業している波浮港東岸下町は過疎化が進み人口も少なく、老夫婦二人住まいの家庭が多いため年々売上高が下がり、収入減のことです。
- * 今日では情報化時代です。専門の予知連の専門的な責任報道を期待します。
- * 老人なので余り他人に迷惑をかけない様地区の皆様にとのむ様したいと思います。
- * 島民のふるさと、三原山の噴火による島民の心がいつ安定するか。
- * 噴火がまた起きることが心配です。
- * 再噴火。

問27. 最後に、今後の大島の防災対策を進めていく上で、あなたは国や都や町に対して要望したいことがありますか。どんな細かいことでも結構ですから教えてください。

○泉津地区

- * この度の膨大な国の予算で十分です。たいしてメリットもない大島に対して、むしろもったいないくらいで有難いと思います。
- * 61年の大噴火で避難に際した避難所生活中都や町で非常によく扱って頂き感激していますが、現在はあらゆる面で防災対策がよくなりつつありますので私共は心強いです。
- * はやく泉津の港もつくって下さい。
- * 避難して1ヶ月も何もしないで食べさせてもらって家まで送ってもらって何も言う事はありません。これから先何があってもうまくは行かないと思います。
- * こんな小さな島の為に、国や都、町はせいっぱいいろいろとして頂いている様に思います。十分だと思います。人間の予想できない程の大噴火があった場合は誰のせいでもないし、しかたのない事だと思います。又その場合どんな対策をしてもむだかもしれません。そんな大噴火はないと信じておりますけど…。
- * 観光業でありますので生活していくうえで収入源が固定しておりませんので非常に私等では精神が疲れます。
- * まだ噴火の予知は今の所出来ないと思います。その方面に力を入れて下さい。せめて数時間前に出来たらと思います。お願いします。
- * 老人とか、病人の救急が一番心配されます。その対策が少し遅れているように思います。
- * 防災市民組織が問題になっていますが、班長、副班長制は連絡上実際に動ける方々であるゆえに昼間の場合地区以外に出稼ぎにいていいる場合も多く、問題も多く含んでいるとの考えに立って今までの設問に私は答えました。
- * 前回は幸運にも元町港、岡田港、泉津漁港と3ヶ所の港が使用出来ましたが、これは全くキセキ的な事で通常西風なら岡田港、北風なら元町港と一港しか使用出来ませんので、各港に通じるヒナン道と港湾施設を一日も早く整備してほしいと思います。
- * 町民を優先的にしたきめ細かい防災対策を立てて欲しいです。
- * 調査した結果を公表してほしい。

○岡田地区

- * 防災に関してはあまりありません。日本中が危ないんですから。ただ島の人に一言、もっとお客さんを大切にしてほしいと思います。もうけることしか考えない島なのでばちが当たったんだと思います。
- * 防災アンケートなのに違うことを書いてすみませんでした。
- * 十分な防災対策だと思います。ありがとうございます。
- * ①島なので港湾、特に切込港（堀込み）にしない。棧橋を長くする事だけではだめ。②消防団の費用弁償（訓練時）のアップ。今回の島外避難に限らず災害時のために訓練の大切さを町で理解して欲しい。住民の生命財産は訓練なしに守れない。一家の大黒柱が1,900円では哀れ！消防団員が訓練に

- 参加せず！自営業、日当取りが多い。日当 8,000 ～ 12,000 円の人に 1,900 円では！
- * 浜の集合の時津波の心配。
 - * 総合病院が必要と考えている（外科）。
 - * 都や町の方々には、一生懸命がんばって頂いて感謝しています。
 - * 大島は老人の一人暮らしが多いためその対策も考えてほしい。
 - * 道路の拡張不十分。学校・地域と一体となった避難訓練が必要（年一回でよい）（例、学校から保護者に渡す訓練など）。
 - * 島でも不燃物等を利用して都会にあるような健康な風呂などは出来ないものでしょうか？三原山の噴火も心配なくなりました時はこのようなことも考えていただければ幸いです。
 - * 61. 11. 21 日の噴火の時は幸いにして岡田港からでしたので年寄、足の不自由な人を好く皆さんが面倒をみて下さって助かりました。今後何があっても前の経験を活かして対策にあたれば十分だと思います。
 - * 避難所の問題を考えてほしい。一度避難所を出た人が又もどってもだめでした。税金や年金を避難後 3 ヶ月位すえおきにしてほしい。
 - * 身障者・病人・老人等弱者の保護（61年の避難時はそれがされていなかった。消防も町もつかんでいなかったし、今後の防災市民組織がそれが出来るかどうか又、その時誰がどうするか等未だ不安だ。義援金（残額分）を給付してもらいたい）。
 - * 臨時火山情報についてですが、これを聞くのはかならずマスコミからで、「情報をだして注意をよびかけています」といっても、町等からは一斉放送もなく、町ではなにか知っていてもかくしているのではと、変なかんぐりをもってしまいます。もっと細い情報もながしていただき、積極的に自分達の身を守る心がまえをもたせるべきだと思います。
 - * 噴火予知情報を正しく伝えてもらいたい。住民が知らない情報など、あまりにこまかくテレビ、ラジオ等で発表しすぎると思います。
 - * 一日も早く道路の整備と港湾の整備をして載きたい。戸別無線もつければ良い…と言う物ではなくやはり調子がどうなのか一度大島中の家庭の意見を聞き直しておかないと、いざと言う時、役に立たなかった…なんて事になりかねないと思う。
 - * 町では住民の意見も聞いて防災対策を進めてほしい。道もおくのほそい道や夜間照明も大切だと思います。
 - * 国、都、町の方が色々心配して下さるので何にも云ふ事はありません。
 - * 大島は周囲は海です。いづどこから噴火しても避難出来る、全天候型の良港を、2 ヶ所位必要かと思われまので、その予算を希望いたします。又道路等の整備も重要かと思われま。
 - * 避難港、道路がせまい。
 - * 岡田港は泉津、北の山又は元町方面からも集まるが、現在所々広げてはいるが、せまい場所もかなりある。もし車で避難した場合、徒歩の人達もあぶないので考えてほしい。
 - * 国や都や町が私達が気の付かない事でも色々やってくれるのでそれで十分です。
 - * 大島のいたる所で今、道路その他をなおしていますが今後の為には必要なことだとは思いますが、もし今何かおきた場合、一度にあちこち工事中では交通状態がパニックになりそうで心配です。（要望とは少し違いますが）
 - * 前問の答えでも出した様に港湾と空港等の整備をして空と海でスムーズな避難が出来る様にしてほしいと思います。
 - * 道路、港の整備を早くしていただきたい。
 - * 民家のある所の道には少しでも電灯をつけていただきたい。
 - * 第一に水の確保。海陸交通機関。
 - * 道路の拡張、港湾の整備。
 - * 国、東京都には大変なお世話になりました。商売上、低利で長期の融資をして頂きたいと思います。
 - * 噴火で島をはなれる事になれば生活援助をお願いしたい。
 - * 現在着々と進められている防災設備を一日も早く完成して頂きたいと思います。

○北の山地区

- * 必要以上の防災対策をしないほしい。
- * 建設業以外の職業の人は生活は苦しいと思うから、しかるべき配慮をして貰いたい。
- * 今の所具体的に思い浮びませんが、マスコミを通じての過剰な報道は控えて頂きたいと思って居りま

す。

- * 国と都が予算を出して工事があっちこちで行われているが、いま大島にとって何が一番早く必要かもう一度考えてほしい。例、港の充実（西風がふけば岡田港のみでは避難出来ない）。
- * 町道の細い道を整備して頂きたい。しんどい道があります。
- * 大島のみ災害（噴火等）を考えた時、東京都に属してる事が心強く思えるが、仮に今後心配されている東海沖地震が起き、東京全域大被害となったら、大島は？大島町独自の災害対策の充実を、備蓄倉庫等十分すぎる位お願いしたい。
- * 島は観光客によって五割程度生活していますのでなくなると島全体が苦しくなると思う。
- * 61年の大噴火の時もそうでしたけれど情報はテレビ、ラジオからというのではなく、情報伝達の敏速な対応。島にいながら島の中で何が起きたのかわかるまでの時間が長すぎる。
- * 飛行場の整備・全地域への外燈整備・道路整備。
- * 細い町道などにも気を入れて歩きやすくしてほしい。だめと云わずに足もとをたいらにして下さい。
- * 北部地域の方も、もう少し防災対策をしてほしい。北小の近くにも防災設備を望む。
- * 防災対策は非常に良くやっていると思う。前回の場合の避難については、地域、人（老人、子供等）との対応を細かく配慮して考えるべきだ。
- * ①道路が整備され、車がスピードアップして走れるようになった事で逆に交通事故が増える事が心配。安全対策も同時に進めて欲しい。②整備が進むにつれて自然がこわれすぎ、島の良さが消えてしまわないように。
- * 現在色々な対策の進行中ですから特に要望する事はありません。
- * 母子家庭、老人のいる家庭に、細かい点で気をくばってほしい。
- * 町や都で一生懸命ですので、これ以上の要望はありません。感謝しております。
- * 火山情報を出す場合、TVニュースだけでなく、防災無線でも放送してほしい。必ずしもニュースをみているわけでもない。特に仕事を持つ者にとっては見られない事の方が多い。私共は島外の親戚等よりTELで教えてもらうほうが多い。たとえあまり心配のない情報等でも、家族の居場所（あそび場所）等にも平日より気を配り、何かの時は、すぐに関心されるように配慮することが出来るので。
- * 災害時は避難誘導の指示等で混乱がない様に誘導の責任はどこにあるのか等を明確にし、必要以外の情報が入りこまない様な方法で進めて欲しいと思います。
- * ①避難道路（私道）早急に整備。照明灯設置（14、5軒共用道路であり介護の必要な老人も住んでいる）②火災の際は大型消防車が入れない。
- * いろいろ調査したことが島民にもっとつたわるようにしたいものです。
- * 建築開設する防災センターは本当に必要なのか。その分の予算を観測網の整備に廻した方が有効と思う。

○元町地区

- * （特に）大島は老人が多く（総人口の17％）、そのうち一人暮らしの老人数は500弱である。今後の災害発生に備え行政の老人避難対策の確立を強く望みます。
- * 皆その立場で良くやってくれているから別に言う事なし。
- * 危険度の多少で島外避難も考えられますが、もっといせいに行動してもらいたい。島内になるべくこのように対策してもらいたい。島内の行政サイドを一本化して命令を一本化しよう努力してもらいたい。
- * テレビなどの情報の方が、役場より早く正確なのは、おかしい。
- * 噴火はいつおこるかわからないので、いつでも島外避難がスムーズにできる様に。船の手配がすぐできる様に（悪天候でも大丈夫のように）。
- * 防災設備等は、国、都が優先的に整備してくれましたので、住民の生活保障をもう少し考えてもらえたらと思います。被害届を出す様にと云われても、出したら保障してもらえる訳でもなく、調査のみで何の意味もありません。泣き寝入りするしかありません。
- * 情報はほとんどテレビ、ラジオで入ってくるので、出来ればその前に島の人がわかればなお良いと思います。
- * 島外避難という事になった時、天候に左右されず船が入港出来る港を造ってほしい。前回の噴火では天候などあまりもの幸運によるものであったが、万一悪天候であったらと今更ながら背筋のこおる思いがする。

- * 町の人口の数によって退避場を十分にしていきたい。
- * 防災の名の許に著しい自然の破壊を感じられます。木は一年や二年では育たないし、遠慮なく大木も次々と切り倒されて行くのも淋しい光景です。大島中セメントで固めてしまう様な気がして先人はこの様子をどのように思うでしょうか。
- * 特にありません。一住民の考えより対策は進んでいると思う。このような災害に対してどの程度の効果的なものかは不明。
- * 船にすぐのれる事。
- * 観光に従事しているので何から何まで不利な事ばかりです。
- * 正確な情報を出す事、防災無線がたよりなので、大事な情報の時と一般の情報との区別を最初のチャイムの音等で区別をしてもらいたい。
- * 大噴火で島外脱出時に台風の場合を想定したバス等の避難訓練。
- * 港の近くに避難所を作ってもらいたい。
- * 無駄なところにお金を使わないでほしい。
- * 観光対策に充実してほしい。
- * 国、都、町というより住民自身の防災意識の高揚が必要であると思う。
- * 内科、整形外科の先生がきてほしい。
- * 天候にかかわらず船に乗れる様な港が三つ必要と思います。
- * 住民を信頼して正しい情報を確実に伝達してほしい。テレビ等で得るより早く地元の住民に臨時火山情報等も放送して欲しいとおもいます。
- * 万一島外避難の状態が生じた場合、今度は当分島に戻れないと思うので、働く意欲のある者の就職と住宅の確保を第一として貰いたい。又、島に残留希望者が多くなると思うが種々の様子から半強制的でも島外避難を指導して貰いたい。
- * 港の整備。災害にそなえて高速船の配備が必要だと思います。
- * 観光客をもっと呼び、その観光客が安心できる、防災対策を早急に。
- * 町の道を直すのではなく、食料品等を買っておいた方が良いのではないかな。
- * 観光対策に充実してほしい。
- * 医療機関の整備。
- * 一朝有事の時に召集され、家族の事や家の事は何も世話出来ないで町や住民の為に出勤する消防団、及び団員の事を行政側は考えてくれているのかと思う。設備や施設を充実してほしい。
- * 港湾整備は大小種々の事が要望されたと思いますが現在大なり小なりに進められているように思います。
- * 避難中、デマが飛ぶので速やかに正しい情報を知らして下さい。家の被害もあったのに、何もしてくれなかった（調べることも）。町の中心以外にも気を配ってもらいたいものです。
- * 確実な情報を早く知らせてもらいたい。
- * 防災施設をもっと。
- * 確実な情報。
- * 全天候型の港や、飛行場の拡大。
- * 61年の大噴火のように、突然起こるものが多いのですから、大島の場合観光客に対する対策をもっと細かく考えておく必要があるように思います。「危なくない」といって観光客を呼ぶより、「これだけの危険性があるが、これだけの対策をとっていますので、だいじょうぶ」というようなアピールのしかたの方がいいように思います。また防災対策を考える上で、まず住民の不安をとりあげたうえで対策をたててほしいと思います。前回より時間を短縮するということだけを考えているような気がします。雨だったら、風が強かったらどうやって小さい子供を連れて避難場所へ行くのでしょうか？この様な細かな不安を皆さん沢山もっているのではないのでしょうか？
- * 私の考えより先んじて防災対策は進んでいるように思うので、良いことかムダなことか見当がつかないが良いことかと思っている所以要望したいことは今のところありません。
- * 島の防災対策は現在、将来も経済状況は困難と思考、文書による、多数の方々の話等を総合推察すれば、国、都に援助の依頼は止む得ないと私考、84才まで島の生活、現況の噴火は一応安定して、噴煙の状況を観察し、小噴火、噴煙は当然のこと、山も呼吸しているので安心して、噴煙、小噴火が止まると不安、昔も今から78年頃を思い出す。噴火と同時に地震にて時計も止まる元村沖に軍艦も来ていた。地震博士の大森、中村両氏が来島、記録があると思います。
- * 島外避難の場合の収容所は体育館の生活は人間の生活ではないと思います。

- * 最悪の場合、雨が降り、西風がふき、海が荒れている場合船はほんとうに着くのでしょうか。
- * 観光客の防災対策をもっと充実してほしい。
- * 火山島である大島は、大古の時代より現代に又さらに地球があるかぎり、この様な自然現象が起こることは、当然考えられる事であるから、防災対策を離島振興対策の内で長期的に、一時的でなく、たえず政策的に実施していただきたい。
- * 噴火の予測ができるようになったら確実なものを至急周知していただきたい。
- * よく検討してから島外に出してほしい。
- * 観光施設の充実、港湾の整備。
- * 大型空港の設置。
- * 元町港の整備を早急に進めてほしい。
- * 行政には行政としての考え方もあるとおもいますが、住民には住民としての考え方もあります。火山情報などは秘密にしないで、もっと住民に知らせてほしい。せっかくの情報機器を家庭に配置しても役に立たない。その都度、正確な情報を知らせてほしい。災害が発生した場合、マスコミ等にかきまわされないで、状況を的確に把握して対処してもらいたい。
- * 国に対して・万一の場合すみやかに島民を安全な場所に移して頂く事。町に対して・スムーズに島民を助けて欲しい。
- * 私達が安心して毎日を暮せるよう、国も都も町も税金の無駄使いをしないで、有事に備えてほしい。金をかけてやるべきことと、そうでないことの見極め。大自然に大して余りタテつかないこと。溶岩流に対する処置は大不満。
- * いくら要望しても限度があり、自然現象には人間の力ではどうにもならないと思うが被害を最小限度に止める対策は必要と思う。観光収入が非常に少なくなった現在、借金の返済不能者に対する対策をなんとかしてほしい。きめ細かな施策を要望いたします。
- * まず行政は精神的そして経済面にも細かい面迄にも一部でなく島民全体面考えてほしい要望。
- * 災害時の備蓄の充実。避難壕の整備。道路の拡張。正確な情報の町民への伝達。
- * 波浮に大型船の接岸出来る様になると云っていますが出来上がるのに時間がかかりそうです。また、5,000トンぐらいの船が接岸出来る様になると云うが、たまたま沖を航海中の船が接岸できると云うような時にパイロット（水先案内人）タクボートの用意が必要はないか？
- * 何億円もかけて観測機器を入れて、本当に使いこなしているのか、役に立っているのか。データーを細かく住民に知らせよ、私達はTVや新聞からしかわからない。
- * 生活面、防災対策も含めて現在、三原山火山情報があまりにも誇大報道される傾向は否めないと思います。機器があるから知らせる…のでは、たえず生活面での不安材料です。防災対策も、これで完全と云えるまでには、大変だと思います。避難中もそうでしたが、報道関係者に真実を伝えるよう、指導して下さい。
- * 島外避難となる出費がかさむものです。金銭的援助を講じてほしい。
- * 警察署は常時訓練が行われている様ですが、町の職員等は若い人も多いと思いますが、不十分に思います。先ず人間教育を徹底的に行い、いざと云う時に住民に細かい心くばりが出来る様にしてほしい。
- * やはり安全に住民がまた観光客が守れる大島にしなければ、発展はないのだから、複数の安全地域を造っておくこと、この前以上の大噴火でも大島は広いので安全地帯があれば大丈夫だと思う。
- * 小規模噴火ならさほどでもないが大噴火になりやむをえず島外避難する場合、港に何隻もの救助船が接岸出来ず、一刻をあらそう場合はパニック状態になるおそれがある。早急桟橋延長等の対策を望みたい。
- * 住民からの声を聞いて取り上げる専門の係を作ったらいいと思う。
- * 町の方で車イスをもっと多く増やしてほしいです。
- * 第一産業を進める事。
- * 防災訓練にしても現実にはそぐわない訓練で、実践的でない気がする。もっとリアリティを考慮する必要がある。
- * 避難道路の整備。
- * 全天候型の港湾設備の充実が急務だと思います。
- * 今、防災対策に巨額な予算が投じられています。結構だと思うけど、何か肝心な点を取り忘れられていないか。それは？
- * 現在、町の中は、コンクリートでかためた様なものばかり作る事で一生懸命の様ですが、観光の足を

島にはこばせる様な仕事が生活上一番大切です。

- * 形式だけはやめてほしい。
- * 通路の早急の整備。
- * 計器に異常が出るとヘリコプター等がよく飛んでいます。そういう調査の報告や火山情報を知らせてほしいです。元町近くの溶岩流は帰島後の原形をとどめていません。再噴火にそなえての工事とはいえもう少し自然のまま残しておいてほしいです。
- * 見舞金は全部配分していただいたし、借金は返済が始まりました。
- * 避難道路の整備、都道の裏道（特に元町から波浮）野増～元町の新道、現在の都道の幅拡張の希望。
- * 避難港の全天候型化。照明対策（避難道路、特に町道。停電してもしばらく屋内でも点灯している器具がほしい）。
- * 噴火のおかげで防災対策はどこを見ても大島は最高ではないかと思えます。
- * 何にしろ噴火が大きい時には島内で動くのではなく、希望者は自費でもいいから島外に逃してほしい。
- * 島民でありながら、臨時火山情報をTVのみでしか知ることができないので、電光掲示板等、情報伝達メディアの開発及び設置を是非ともお願いしたい。（車走行中に防災無線を聞き落した際にも便利）マグマの途中でもよいからテレビ、ラジオ外で発表してほしい。
- * 要望は個人的にたくさんあると思いますが、離れた島ですから何するにも不便ですし、防災対策を考えても交通、船、乗り物、安全な場所、町にまかせるしかありません。
- * 通学路のブロック壁が、ひびが入ったままになっていて心配です。すぐにでも応急処置をお願いします。
- * 情報伝達が不十分である。（小さな変動でも島民に事実を早く伝えて貰いたい）避難場所の選定に不適当な所がある。（割れ目の上にある。火口に近い方に集合場所がある）船によりいったん海上に出て、島の状況を冷静に見て、次の対策を。船をホテルとして使用して貰い、危険が去った時、すぐ帰島できるように。人家に向かう沢には、溶岩止めを。（水はながれるようにする）
- * 町に対して……義援金の利用法をもう一度検討してほしい。大噴火後、生活に苦しむ町民に対して、義援金がうまく利用されているのか疑問である。防災対策という意味では、質問の答えになっていないのかもしれないが、島民の精神的ゆとりが何よりも必要ではないか。
- * 都の人達には十分な事をしていただきました。別に要望したい事は特にありません。
- * 昨年の11月21日に行われた避難訓練について、かなりの住民の参加によって大規模な訓練だった割には、通りいっぺん的でその後、その結果についての検討（住民を含めて）や発表がされていないが、あのような訓練は度々行えるものではないので、もっと有効に役立ててほしい。単なる順路の確認だけで終わらせて欲しくない。

○野 増

- * どの集落からも避難できるようにしてほしい。（空路、海路を含めて）
- * 私が住んでいる所は、道路が狭いので困って居ります。一日も早く道路を広げて下さる様願って居ります。
- * 周囲が海なので強風の時、又、災害の時に、家族と連絡する時、電話回線が使えなくなるのでなんとかしてほしい。島外に避難するような事があった場合は、体育館ではなく、家族だけで生活できるような施設があれば結構なのですが。
- * 退避壕の設置。
- * 港と連絡をよくしてほしい。
- * すばやい情報。
- * 大島には寝たきり老人が多いので、これ等の人達の具体的な避難対策。現在大島には外科医がいなくて、盲腸の手術も出来ない仕末で、災害の時は外科医が居ないと困るので、外科医を常駐して頂きたい。
- * 色々と対策をこうじてはおられると思いますが、特に予知情報の伝達体制の充実を。
- * 1.町へーヘルメット・鉄かぶとを、町長がはじめ云ったように全島民に配布してもらいたい。
- * 2.都と国へー港を早く整備してもらいたい。
- * 火山情報をこまかく町民に知らせたい。
- * 同報無線・戸別受信機等、いかに充実しても、情報量をいかに出すか。出さなければ設置は無駄である。
- * 観光地なので道路が狭いという事はわかりますが、波浮へ向かう道路は噴火前に花壇をつくりきれい

になっていたのに、又とりこわし工事していますが、まったく無駄だと思う。もっとお金の使い道を考えてほしい。避難時に、島民は借金をかかえているのだから。道路が広がれば観光客が増えるわけだし、島民が増えるわけだし、現に土木工事関係仕事だけ忙しくて、島全体は不景気なのです。

* きめ細かな防災対策の確立。(特に、身障者、病人、老人等に対して)

* ①各漁港も利用して避難出来るようにしてもらいたい。②部落の所々に避難壕がほしい。

* 今の所、色々防災対策で工事をしているので、出来上がってみないとなんとも言えない。

* 道路の多ルート化とがけくずれの防止。

* 一昨年の噴火の時、確か避難命令が出たと聞いたが、後日あれは命令ではなく避難勧告だったということになったが、こんなことでは信用できなくなる。また、沖に巡視船が泊まっているだけで老人は心配する。本当に危険な状態が考えられるまで待ってもらった方が、かえって安心できるのではないだろうか。

* 今後、またあのような大噴火の時の防災対策を宜しくお願いします。(国、都、町へ)

○差木地

* 定期的な火山情報の発表(具体的な)。避難港の整備(波浮現在進行中)。

* 今まで色々して頂いた事で十分感謝しています。これ以上ぜいたくは言えません。

* 道路整備を現在以上にしてもらいたい。特に、町の中の道路幅をいっきに広げてもらいたい事です。

* 島外避難の場合を考え、港湾設備の充実とバス輸送の完備をはかってほしい。また、島外避難の際の施設をあらかじめはっきりしてほしい。

* どんな小さな出来事、変化でも隠すことなくすみやかに住民に知らせるべきだと思う。

* 世界的にも例のないほどの噴火活動に数多くの計器を取付けたのに、局地的な地震活動(南部地区で震度4位を感じても)を北部にある観測所等で感じないという事があるだろうか。小さな島なのに何かわりきれないものを感じる。

* 分散している各地区間の道路が寸断された時、孤立した地区民を如何に救出できるかを研究してほしい。特に、風波高き時の状態を考えて。

* 波浮港から避難できるように。

* 大噴火の時、大変お世話になりました。今思えば食事などにも気を使っていたが、私達は、無駄なお金を都、国、町の人達に使わせたこともたくさんあると思っております。また、噴火して皆さまにお世話になることがあると思いますが、なにも要望したいと思っておりません。国、都、町の人達におまかせします。

* 再噴火の場合、島外に避難するような事が起こっても、今後は絶対に島民自体は島を離れるような事はなく、島内避難と落ち着く事と思います。私共は島外避難するつもりはありません。

* 外輪、又は山腹に循環道路を整備しておくこと。風向きにより、港湾が使用できないことがあるから、山腹であれば土地買収もスムーズにいくと思われる。また、一時避難の場所への道路整備が遅れている地域があるので、早急の対策等が必要と思われる。

* 島外避難時における輸送体制の確立。

* 足腰がきかない老人がいるところへ車イスなどがあればいいと思います。

* 道路の整備(全ての道路の幅を広くしてほしい)。

* 波浮港の整備

* 別にありません。今でもよくやっているといます。

* 万一島外に出るようになった時に、波浮港が未だ不備な点。

* 今、準備中なのでどの位できるのかまだわかりません。

* 制度や対策は勿論ですが、予測のつかないような事態の発生も起こりうることを想定して、万事を配慮してほしいものとおもいます。

* 港の整備(波浮港)をしっかりしてほしい。一周道路が港湾などで通行できなくなった時の迂回路を充実させてほしい。

* 噴火・地震等の為、南部地区と北部地区の道路が交通不能になった場合を考えまして、南部地区に港を。(例えば、波浮港で3千トン以上の船の発着をできるようにしてもらいたい)

* 全体的に都道を広げてもらいたい。

* 防波関係の要員だけでなく、施設関係の(電気、ガス、水道等の)重点要員(適切な言葉があるはず)も配置する必要があると思います。

* 道路・港湾施設の拡張。①差木地小学校が私共の第一避難所に指定されていますが、大型バスの通

- 行できる道路を早急に着工してほしいです。②避難するとき、島の北部にある元町港、岡田港が使用不可能となった場合、南部にある波浮港を大型船の入港できるようにお願いします。
- * 今後、大噴火がないことです。国民の皆さんが安心してくださることをお願いします。
 - * 国、都、町、それぞれ噴火災害対策をたて、いろいろして頂いていますので別にナシ。
 - * 大昔は自然に接して生活していた為か、火山噴火等に対処の仕方など身につけていたものですが、文明科学に頼る現代人程あわて誤認し、行動を誤ることが多いようにおもう。古代人に笑われないよう、自然をもう一度見直そう。
 - * 防災対策を推進していく事も必要ですが、経済的に安定できるような政策をとる事が一番重要な事だと考えます。
 - * 波浮～元町間にもう1本別の道路を作って欲しい。
 - * あそこまで道路整備をする必要はないと思います。大切な税金をもっと広く有効に使ってほしい。
 - * 現在の臨時火山情報はNHKを見なければわからず、それ以前に直接防災無線で住民に知らせるのが本当であると思う。たとえ、実際の噴火は起こらずともその知らせを聞くことによって、心の準備と、あらためて周到な避難準備もしておくことができるので…。
 - * 色々防災対策を進めて下さっていますが、テレビ等で放映したり、ニュースを流していても、町では何の連絡もないのが不満です。一日中座ってテレビ・ラジオを見聞しているわけにはいきませんので、有線をお願いしたいものです。
 - * 防災対策は、国や都や町の行政的机上論だけで防災訓練がマスコミを通じて成功したからと報道しても、住民の声を十分に聞いて、避難対策を進めなければだめだとも思います。この度の防災訓練は、行政のおしつけであると言っても過言ではないと思う。再度避難訓練計画を住民の班ごとに集計して地区の計画をつくってほしいものである。
 - * 南部地区の港の波止場を早くつくってもらいたい。

○下地

- * 島全体の道を、今より1m～2mくらい少なくともひろげてほしい。
- * 今回の災害に対し、国や都や町に大変感謝しています。今後、波浮の設備等を十分に実行してください。
- * 防災対策はいままで1度もなかったことです。私共が思うには、国や都や町としても住民の防災対象なのか、施設なのかです。皆様がお見舞をくださっても、行政を対象にしては住民はどうすることもできません。行政見舞なのか住民見舞なのかではないでしょうか。これからはここを特に考えるべきではないでしょうか。住民・一般被害があっても、役人は給料等にあつてその間住民と同じということはありませんから。述べたいことは多々ありますが、参考にしてください。
- * 三原山に異常があった場合、早く言ってほしい。この間も1時間後にわかりました。
- * 国、都、町でも防災に関しての事は充分考えている事と思いますので、申し上げることはありません。留守中を只々お願いするだけです。
- * 飛行場の整備。港の拡張、整備。老人、病人の安全、スムーズな移動。道路の拡張。島外へ避難した場合の確保された場所。でも、国や都にお任せではなく町独自でやるべき事だと思います。
- * 港湾の整備。
- * 島からの脱出を考えると先づ港の整備を願ってる。
- * 噴火はないと信じていますけどもわかりません。わざわざ元町までいかなくても波浮の近くの人には波浮港があるので港を利用して船が出入り出来たら私達も波浮の港からのりおり出来たら便利でいいと思います。
- * 消防隊の人達が大変だった事と聞いています。自衛隊の人達に支配される様な事は、おかしいと思います。少なくとも島の治安員として同等に相談し合って行動出来る様希います、と思うことは無理な事で災害に際しては仕方のない事なのではいせんか。
- * 道路の整備にあちこちが工事中。でもかなり時間がたっています。もうすこし大勢の人達で短時間で早く出来ないものか。「いざ」という時に走りにくいと思います。
- * 波浮港を、大きく、どの風でも船が付けられるように早くしてほしい。
- * 義援金を有効に使ってほしい。
- * なるべく早く安全宣言を出してほしい。
- * まずは統制できる人を頭に自分勝手せずまとまれる様に一致団結をしたい。
- * 今のところ無線や防災市民組織でも住民に心配させない為、細かな所にも気をくばっていると思いま

- す。
- * 避難する時の港の整備。
 - * 波浮港の完成を急いでほしい。
 - * 港湾の設備、病弱者、病人、老人、乳児を持つ親への配慮。
 - * どんな風でも避難できる様、特に波浮港の整備を早くやってほしいと思います。道路の幅を広くしてほしいと思います。
 - * 港湾整備、避難道整備、医療施設の充実。
 - * 港の整備。
 - * 南部地区の港湾の整備を急ピッチでやってほしい。
 - * 住民が安全に避難する栈橋を波浮港に早期、実現するよう希望。これが観光客の安全避難にもつながることあります。
 - * 現在の大島には道路が一周しているだけで、もし災害が起きた場合を考え、港へ通じる道路をもう一本国や都で整備してほしい。
 - * 医療の事です。外科の先生がいない。盲腸でも今の島では東京に行って手術をする状態なので子供を持つ親は皆そう思っているとおもいます。
 - * 確かに「情報伝達体制の整備」は行われていると思います。しかし、最も大事な情報そのものが流されていないではありませんか。噴火した時だけ、それを伝達すれば良いのですか？そういった性格のものでしたか？私個人としてみれば、大島に住んでいながら、三原山の臨時火山情報を知る手段は、テレビ、新聞でしかないのです。テレビをつけないければ、新聞を開かなければ分からないんですよ！そんなのありますか？実に不思議です。よく「臨時火山情報を出して住民に注意を呼びかけました」なんて、マスコミで言っていますが、だったらテレビ、新聞を見るより前に住民全体に別の手段で注意があつて当然だと思うのですが。一部の町役場関係者にだけ、情報が流されればそれで良いのでしょうか？そこから先、住民に対しては、どうなのでしょう？常に疑問に思っております。
 - * 早く皆さんが安心して、生活できる様に噴火が、正確に予知できる様にしてほしいです。
 - * 道路や港、空港の充実。
 - * 町に於ては各種の防災対策に町の歳入以上に予算化しているが、それは結構であるが歳入出の面も考へての施策を切に希望する。防災面も重要だが町の経済面も考慮を望む。
 - * もう少し大島の観光客がもっと楽しめるような設備をもっとしてほしい。交通面、見学するところなど、楽しくおもしろく子供も来れる所、遊べる所。
 - * 波浮港から避難できるようにしてほしい。
 - * 波浮港からも避難できるように南部に住んでいる人たちの分の船（漁船でも）を用意してもらいたい。

○波浮地区

- * 現在色々やっているようなので、これと云う要望はない。
- * 防災対策の名のもとに道路、避難所、港湾工事など最優先で予算がついているが、民生面がそのために後まわしにされているのではないだろうか？
- * 要望はありませんが、去年の小噴火の時に雨のようにすごく灰が降りましたが、九州の桜島の人達はそれが毎日のように降って洗濯物も出せなかったり雨戸も閉めっぱなしとか、ほんとうにお気の毒に思う。それに比べ大島は少しの事でも報道が盛んで、いたれり、つくせりで九州の人達に申し訳ない様な気もする。ほんとうに国や都に対し感謝の気持ちでいっぱいです。
- * 噴火後いろいろ、資金の借入れもありました。でもそれ以前に私共も住宅資金など、大量に借りていましたので、その様な資金の借入れがありましても、到底返済出来ません。災害後2、3年たって、さて返済はこれからが大変なのです。防災方面は東京都、大島町とも非常に積極的にやっていますので、私共も安心して暮しています。
- * 今後共すみやかな情報を提供して欲しい。退避壕の増設。
- * 明るい大島に行きたい、それは人間としての心が一番大切だと思います。
- * 何と言っても港の整備です。何の風が吹いても船が接岸出来て乗り降りがどこからでも出来る様にして貰いたい。特に波浮港を一日も早く整備してもらいたいと思います。
- * 復興計画（現在施行中も含めて）の早期完成を要望します。
- * 何時噴火するか判らない島に住む人間です。都や町を信頼して住むしかありません。
- * 南部地区に一日も早く避難提防がほしい。
- * 海水浴場は大分前から見ると良くなっては来ましたが、波浮の砂浜は半島しかないのですが、波が荒

くその年々によって皆砂が流されて、岩ぼこになる年が多く、又夏でも波のうねりが大きく、出来る事ならば波よけ対策を考えて頂きたいと思います。

- * 現在ある道路だけでは不十分、別ルートも必要と思う。
- * 都道、港湾の整備。
- * 噴火の場所、状況等によりますが、若し噴火した場合なるべく早く避難出来るよう飛行場ヘリポートの整備、又海の方では波浮の岸壁、島内では道路でしょう、非難壕もっと安心して入れるものを作った方が良いでしょう。
- * 町役場が情報をもっと詳しく早く、住民に伝えてほしい。住民がさわぎ TELを入れてもなかなか報道がない。
- * 災害の度合いも分からずに、あっちの（ガケ）を削ったり、そっちの海岸を変形させたりしないで、その金はしかるべき方法で蓄積しておき、災害があったとき被災者又は被災者の近親者の救急に使ってもらいたい。
- * 防災対策よりも噴火の予知を確実に出来る体制を整えてもらいたいと思う。
- * 波浮の港からも船に乗れる様早くやって下さい。
- * 空港整備（拡張）。
- * 島ですので、大噴火になれば、やはり島外へと……なると思うのです。その時はやはり船を利用することになります。港湾事業（整備）をなるべく早く完了するようにしていただきたいものです。
- * 港湾の整備。
- * 防災訓練はもっと細かく防災組織の末端にまかせて自由に訓練してみる必要があるのではないか。プログラムに乗って隊列を組んでの避難は現実性がない。自動車（自家用）等を使わせることも必要なことかと思えます。
- * 防災対策は行政の方で力を入れている様子ですので、年々よくなっていると思います。①唯、もし大噴火になって、島内避難（一次避難）から島外避難（二次避難）になる場合、島外避難は強制することとはさけ、各自の責任と判断にまかせるべきだと思います。②避難時の指揮系統を一本にして欲しい。（町・消防・警察・非常にわかりにくい）58年の三宅島の噴火の中で、200年程前の警告に対して大島の対応が悪かった様に感じる。
- * 波浮の港の中で避難する時に乗船できる方法を考えて欲しい。
- * 避難壕をもっとふやしてほしい。
- * 道路の整備。

問1. あなたのお名前（ ）

問2. あなたの性別<ひとつだけ>

	%	N (人)
1. 男	41.2	238
2. 女	58.8	339
計	100.0	577

問3. あなたの年齢

	%	N (人)
1. 20歳代	3.6	21
2. 30歳代	16.1	93
3. 40歳代	23.1	133
4. 50歳代	22.2	128
5. 60歳代	19.6	113
6. 70歳以上	15.4	89
計	100.0	577

問4. あなたの職業<主なものをひとつだけ>

	%	N (人)
1. 農 業	9. 5	55
2. 漁 業	2. 4	14
3. 商 業	10. 9	63
4. サービス業	10. 2	59
5. 旅館・民宿	5. 9	34
6. 公 務 員	7. 3	42
7. 会 社 員	8. 0	46
8. 無職(主婦を除く)	10. 6	61
9. 主 婦	23. 6	136
10. そ の 他	7. 1	41
11. DK, NA	4. 5	26
計	100. 0	577

問5. あなたは今後もずっと大島に住んでいたいと思っていますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. ずっと住んでいたい	80. 8	466
2. 移転してもいいと思っている	11. 1	64
3. ぜひ大島から移転したい	1. 2	7
4. その他	2. 3	13
5. DK, NA	4. 7	27
計	100. 0	577

問6. あなたはこの島に対して、どんな気持をお持ちですか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 強い愛着を感じる	66. 7	385
2. 少し愛着を感じる	15. 8	91
3. どちらかといえば嫌い	2. 8	16
4. 嫌 い	0. 7	4
5. どちらともいえない	7. 8	45
6. 何も感じない	0. 7	4
7. DK, NA	5. 5	32
計	100. 0	577

付属資料 2

伊豆大島町役場1988年1月11日聞き取り調査の概要

Q：さっそくですが、まず最初に、昭和61年11月の大噴火後に実施した対策の概要と、その対策を実施したことによってどういう効果が期待されるか、あるいは残された課題は何かというあたりから、お話しいただきたいと思います。

A：はい。61年11月15日から始まった噴火のときには、わたしどもには噴火に対する防災体制が、いちおう「地域防災計画」上にはありましたが、それに対する訓練もあまりしていなかったのも、職員をどう対応させたらいいか、というようなことがいろいろありました。ただ、結果をみますと、ほとんど自分たちが思ったように職員が動いてくれました。それで、今われわれは、これをもとにして職員の「防災マニュアル」を作る段取りをしているわけです。

それと、この災害では、われわれは職員の対応だけで手いっぱいでした、職員が住民を避難誘導するのも初めてのケースで大変だったということは、目に見えてわかっていたわけです。で、帰島後、当時自主防災組織がありませんでしたので、まずそういう組織を作らなきゃいけないということで、それに組み込んだわけです。これは、全地域を8地区270班に分けて、3月中旬に全部完了しました。それができてから何をしたらいいか考えまして、本来なら全島いっぺんに防災訓練をやればよかったんですが、そこまでは準備もできないということで、波浮地区と泉津地区で防災訓練を実際にやってみました。これも机の上でやった仕事で、計画通りに行くかどうか心配だったんですけども、住民はあの災害を経験しておりますので、参加者も多くて大変スムーズにいった、みんな真剣に取り組んでいただいた、ということでございます。

もうひとつ一番心配だったのが、大学さん方でもアンケート調査していただきました、同報無線の伝達ということです。そのなかで避難指示等の伝達がどの程度できていたのかと心配していたんですが、その調査を見せていただいて、われわれが思っていたより少なかった、これはもうどうしようもない、今度は100%情報の連絡をつけられる手段を考えなきゃいけないということで、帰島後（これは帰島条件の中にも入ってたんですけど）、約4,300台の同報無線を、全家庭の4,000世帯プラス各事業所に、夏までには設置を完了しております。これによって、屋内にいても屋外にいても情報の伝達ができるというわけです。ただ、やはりこういう大きな地形ですので、100%にはまだいておりませんので、年次計画をもって屋外の同報無線の施設を増設していかなきゃならないだろう、というふうに考えております。

それと、去年の11月21日に全島で防災訓練をしたわけですが、今後は防災訓練も毎年くりかえしやっていかなければいけないだろうと。たまたま今年度初めてだということで、約70%の島民がこれに参加していただいたので、第1回目としては大成功をおさめました。これは、東京都さんの協力でこれだけの訓練が出来ましたので、感謝しているわけでございます。

それから、前にお渡ししたと思うんですが、住民の災害に対する徹底ということで、「防災手帳」を作ってこれも配給してあります。そのなかで、やはりこの島は観光が主ですから、観光客に対する安全対策も考えなきゃいけない。ということで、その防災手帳のなかには、住民は観光客と一緒に避難しなさい、また商店・旅館・民宿等の責任者はそこにいる人たちを責任もって避難場所まで誘導しなさい、というようなことまで入れております。

それと、安全対策の施設としまして、もちろん住民プラス観光対策ということで、同報無線も観光客の多く集まるような場所にはほとんど設置していると。それから退避壕につきましても、見学するような場所には極力設置するということ、ほぼこの事業については完了しております。結局、5ヶ年計画ということで207億円の事業をつけていただいておりますが、この5ヶ年計画の中でも今年度が一番多く事業がございますので、われわれは一生懸命努力しております。これが完全にできると、ほぼ安全対策は確立できると思うんですけども。

ただ、われわれが今考えておりますのは、住民が島外避難の時にあれだけ安全にしかも迅速に避難できた、ということがだけで樂觀しては行けないと。今後とも、訓練等を繰り返して、噴火だけでなくいろいろな災害が大島にはきますので、そういうものにも対応していきたいと考えております。また、「地域防災計画」や職員の「防災マニュアル」や住民に対する「防災手帳」、そういうものも毎年検討して作りなおしていきたいと考えています。

Q：新しい「地域防災計画」はいつごろ出来ますか。

A：今、協議中でございます。いちおう「防災委員会」のなかで決定しまして、それを東京都の方に協議中です。協議が終われば出来ます。とくに、今回の「地域防災計画」の見直しで大きいのは、三原山の噴火に対する防災計画でして、これは今までの3倍ぐらいの分量になります。

Q：それは「島外避難計画」まで入ってるんですか。

A：はい。ただ、この前に桜島の方にいただいた資料をみますと、わたしもあれまでもっていきなと思ってんですけども、まだそこまで行ってないなと。出来ればあのくらいにしたいんですが。

Q：いまお話をうかがいますと、だいたい制度面とかハード面でかなり体制が整ってきたと感じるんですけど、町目で見ると、5ヶ年計画の中でなんか漏れているものがあるとか、こういうのが必要ではないかというものはありますか。

A：はい。漏れているというより、これをいかに有効に防災計画のなかに取り組んでいくか、ということが問題だと思うんですが。

さっきひとつ落としたんですけども、わたしまが今一番困っているのが気象庁関係の情報で、たとえば地震がきた、煙が何メートル上がっていますという情報は知らされても、だからこれがどうなるんだということまでの情報をわれわれは本当は欲しいんです。ただ、気象庁ではある程度わかっているけど、それをわれわれに教えていただけない、これはあくまでも行政の判断だ、といわれてしまうケースが多いものですから、せっかくこの同報無線をとりつけて、住民の大半は情報は流してくれと言っています。ところが、流すにしても事実の情報しか流せないわけで、これからどうなるんだから、どうしたらいいというふうな形にまで持っていきたいというのが、今一番の問題です。向こうの立場もあるんでしょうけども、これだけ11億もお金をかけて機械類を入れていただいたのですから、できれば早くそこまでもっていったいただきたい、それが一番期待していることです。

Q：11億円をかけていろいろな観測体制を整備しましたがけれども、そういう情報を町が得るのは、測候所から連絡がくるわけですか。

A：そうです。

Q：新しい「地域防災計画」のなかには、関係機関からの情報を判断するときに、たとえばどこかの専門の先生方に頼むとか、国のレベルにあるアドバイザー制度を頼むとかいうものはあるんでしょうか。

A：それはありません。ただ、たまたま東大地震研の観測所がありますので、われわれがそこにたずねるというケースの方が多いですね。

Q：「四者懇談会」ですか、「四者協議会」ですか、それも新しい防災計画のなかに入っていますか。

A：いいえ、防災計画のなかには入ってないです。これも、将来は完全な位置づけをしていければと。

Q：そういう場所で、行政として判断できるような情報が得られればいいんですけどね。

A：その四者懇談会には、測候所さんも入っています。しかし、やはり完全なところまではいかないですね。

Q：現在も時々開かれているんですか。

A：何かありますと開きます。

Q：昨年の11月の再噴火の時は開いたんですか。

A：ええ、開きました。

Q：では、また問題が出てくると思いますが、今度は、去年の11月16日の再噴火時の話と、それから防災訓練の状況などの話をお願いしたいと思います。

A：昨年の11月16日の再噴火は、これも測候所から微動が始まったという情報があって、われわれももしかしてという感じもあったんですが、職員の体制としては、課長までは自宅待機ということではなくて、何があっても連絡がとれる体制にしておくということで、とくに配備体制は16日に男子職員全員を動員する「第3非常配備体制」をとりました。

それと1昨年の大噴火の時と同じように、警備要員を2名1組にしまして、2時間交替で噴火の状況を逐次報告させました。たまたま、大した噴火にはならなかったものですから、住民に対する指導は注意しなさいという程度を、同報無線で流しました。このときちょうど、われわれは21日の防災訓練の準備に追われておりまして、それと重なりましてどっちに重点を置いたらいいかということになったわけですが、やはり16日の噴火のほうにしようということで、16日から宿日直を2名から3名に増員しました。そんなことくらいですね。

それから21日の訓練につきましては、本当に東京都さんにおんぶにだっこでお願いしたわけですが、住民の人たちも大変関心をもって、われわれが当初思っていました参加人員よりはるかに上回って、70%、約8,000人近くの参加人員がありました。東京消防庁さん、自衛隊さん、海上保安庁さんなど

も、本当に本番さながらに、あれだけの機動力を持った訓練をやっていただきまして、住民からも安心したというような声がでております。何があってもこの島の人たちを守ってくれる、という考えを持ったようでございます。ただ今回の訓練は、わたしは個人的に80%くらい行ったらいいんじゃないかなと思っていたんですけども、今回の残りの30%の人たちは、体の動けない人、商売で出られない人がほとんどだと思います。ですから、島民の訓練参加は最大限の人に出ていただいたということで、大成功だと思っています。

それで、とくに反省会はまだ持っておりませんけれども、各地域での声は十分にとりました。あれだけの訓練をやれたのは、もちろん国をはじめ東京都のみなさんの応援があって出来たんだと。実際には、最初のうちは住民もただ避難で歩くだけくらいのつもりでいたらしいんですけども、あれだけの訓練ができたということで、住民のほうも訓練の効果というものは評価しています。

Q：そうしますと、61年の大噴火の後に作った新しい安全対策のうち、62年11月の噴火の時に情報伝達の面は実際に作動したわけですね。

A：はい、同報無線は動きました。

Q：その噴火の直後の放送があまりよく聞こえなかった、というような話はありませんでしたか。

A：ええ、とくにありませんけれども、ただ、泉津地区と北の山地区に不感地帯がありまして、要するに戸別受信機が聞こえないんです。外に出れば聞こえるんですけど、今、それを改修っていうか、アンテナの施設等でカバーしているということです。

Q：戸別受信機の不感地域は、やっぱり中継局を作らないとダメなんですか。

A：アンテナを高感度にすれば解消できます。ただし泉津地区につきましては、今2ヶ所ある中継局のうちの1ヶ所が泉津地区にあります。中継局が一番近い地区なんですけれども、やや起伏が激しくて電波が入らないといわれまして、同報無線だけの中継局を移設するというので、何とかかろうじて今は入ってるんですけども、途切れてしまうこともあるんです。そういう場合には、外へ出ていただくと聞こえてくるんですけども、すぐに聞こえるようにということで、業者を呼びましてどういう形にすれば入るのかを調査した結果、泉津地区にある中継所をもう少し海岸のほうに持ってくれば、入るということでした。

Q：昨年の16日の噴火のときには観光客もいたと思うんですけど、とくに観光客に向けての情報は流したんですか。

A：山頂には流してるんです。

Q：さきほどの職員の「防災マニュアル」とか、住民のための「防災手帳」とかは、もう作ってるんですか。

A：防災手帳は、帰島後につくりました。防災マニュアルはまだです。

Q：防災手帳は5,000部とありますが、これは1世帯1冊配ったわけですか。

A：そうですね、はい。

Q：避難の心得も同じですか。

A：はい、1万枚。これも帰島後まもなく作ったんです。それは、東京都さんのほうで。

Q：その防災手帳は、住民の方がどういう形で家に保存していますか。

A：くわしくは調べてませんけれども、見やすい場所にあると。本当はここに穴をあけて。

Q：そうそう、電話帳みたいにね。

A：だいたいそうしてるわけです。

Q：防災マニュアルの話が出ましたが、再噴火の時にそういうものに基づいて動きましたか。

A：ええ。この原稿っていうか、元はできているんですけども、ちょっといろいろ直すところがありまして、なかなか印刷までいかないんですよ。ただそれを元にして、職員の対応は私のほうから指示を出しています。たとえば、誰々はここの出張所に行って対応しなさい、というような指示はいたしました。

Q：そうしますと、このあいだの再噴火のときの活動要領は、大噴火の時と基本的には同じようなものですか。

A：ええ。それを元にして作ってあります。というのは、みなさんに聞いても、あの体制が一番いいんじゃないかということもありまして、あれを元にやりました。

Q：このあいだの再噴火はあまり大きくなかったんですけども、まず再噴火があって、それから町の職員を現場に派遣したということですが、大噴火のときは、そのあと災害対策本部ができる段階で出張所に職員を派遣したんですね。

A：このあいだのときは、とくに女性出張所長のところに、まず応援職員ということで係長級を派遣し

てます。

Q：16日の噴火のときは、10時47分に噴火して、町のほうで災害対策本部を作ったのが10時48分ですから、猛烈に早いですね。

A：ええ。職員がすでにおりましたので態勢がスッといきました。

Q：そうすると、測候所から連絡がくる前にもうすぐ作っちゃったと。

A：はい、すぐ。一般業務をやりながら、そういうふうに対応しました。それから、女性職員は主に窓口業務のほうに専念しました。

Q：16日の噴火の時は、四者協を開くところまではいかなかったんですか。

A：そこまでは、いなかったです。

Q：61年11月の大噴火のときと違うのは、住民の避難ということからいうと自主防災組織ができたことだと思うんですが、防災訓練のときに自主防災組織の動きはスムーズにいきましたか。

A：いきました。さっきも言いましたように、約7割の人たちに出ていただいて、全班参加していただきました。これも住民からおしかりを受けたんですけれども、どうせそこまでやるなら第2次避難はバス輸送ということになってますので、2次避難まですればよかったのといわれましたが、当時は連休前のことで観光客が多くて、バスを確保できなかったということもあって、そうはできませんでした。

Q：また話が戻りますが、再噴火のときに、この再噴火の見通しについてどこかの機関に相談したことはありましたか。この前の大噴火のときは、荒牧先生や下鶴先生がいらしたということがあったんですが、今回の場合はそういう地元の判断をどういう形でやられようとしたんでしょうか。

A：さきほど言いましたように、測候所さんのほうから情報が入ってきました。測候所と、それから東大地震研からも。で、東大地震研さんのほうは、ある程度うまくとれました。そのとき荒牧先生がいたんです。状況を聞きましたら、あっても大丈夫というようなことでした。測候所のほうは、そうは言いませんけども。

Q：それから、今後の大島の防災対策を考える場合に、観光客に対してどういう啓蒙とか広報するかというのが一つのポイントになると思うんですけど、「火山センター」が今度できますね。で、火山センターにはいちおう防災倉庫があるわけですね。これは、観光客にある種の啓蒙をするというような役割を担うわけですけど、防災主管課として、火山センターにこういう機能があったらいいとかいうことがありますか。

A：これはなかの話で恥ずかしんですけども、まだそこまで突っ込んだ話はしていないんです。できたら、もう少し住民や観光客にPRできるような施設があったら良かったんじゃないかな、と思ってるところなんですけど。それで、いちおう観光コースにもなるといいますんで、大島をPRすることにも必要でしょうけれども、やはり全体の防災ということもふまえていったらいいなと。

Q：あれは、そもそも防災施設整備費ですよ。あの備蓄倉庫には何を入れるんですか。

A：いちおう、今考えてますのは毛布です。噴火で一番考えられるのは避難ということですので、現在は約1万枚ぐらい。それを、全地区に人口割りで整備してます。差木地区、それから岡田・泉津地区には、それぞれもう出来まして、毛布を入れてあります。それから泉津地区につきましては、消防協会さんからいただいた食糧もあります。

Q：これで、島には備蓄倉庫が3つ出来たわけですけど、で、元町用がそのセンターと考えていいんですか。

A：はい。元町用というより、中部地区用です。当初、われわれは200平米という希望を出したんですが、結局それが60平米になって、われわれは本当に困っちゃったんです。で、しょうがないから、60平米なら上をなるべくあけて天井も張らない縦に吊れるようなものを考えています。

Q：なるほど。それから、もうひとつ将来の防災計画でポイントになりそうなのが、義捐金なんですけど、義捐金が7億円くらい残っているという話を聞きましたが、この使いみちはまだ決まっていわけですか。

A：やはり今後なにか災害があった場合に使うということでございます。基金という形で。

Q：さきほどの話では、同報無線はその後の対策で新しくして、けっこう効果があったような感じなんですけど、そのほか、再噴火の時に移動系の無線は運用されるんでしょうか。

A：はい。移動系には消防無線と行政無線があって、消防無線は150メガ、行政無線は400メガでやってるわけなんですけども、11月の大噴火の例からみますと、400メガは島内の2ヶ所の中継だけでは完全な連絡がとれないということ、今度は東伊豆に中継所をもってきました。出来るのは2月末ですから、まだ出来ておりませんが、で、訓練や16日の噴火のときも、やはり完全な連絡はとれませんで

した。移動系ですから、災害時にどこへ行っても入らなきゃいけないんですけども、建物の影とか山の影にいますと入らなくなってしまうケースがあります。

噴火の前は、1ワットと5ワット、それから車載用は10ワットだったんですけども、人間が持つ携帯用については5ワットが最高だったもんですから、もう少しワット数が大きくなればいいんじゃないかと思っていて、10ワットに揃えたわけです。ところが10ワットでもだめです。今の通信方向は、この町役場を中心に横に走ってまして、沢とか山を越えて電波が通らないわけです。今度は伊豆にできますと、たてに電波が通るということで相当に良くなることを期待しているわけです。

Q：だいたい大島は、もともと不感地域が多いところですよ。だいたい半分くらいの地域は聞こえないと考えていいですか。

A：半分として考えていただいてもいいと思います。

Q：その不感地域はだいたいどのあたりですか。

A：今は中継所が2ヶ所あるといいましたが、この中継所は住民、要するに民家がある所に向いているわけです。ですから、裏側はほとんどだめです。で、これを解消するためには中継所をあつ2ヶ所増やせばいいんです。今回は裏側と東伊豆の2ヶ所増やして、それでカバーしようとしているわけですけれども。

Q：噴火当時は、移動系無線はいくつくらいあったんですか。1ワットと5ワットとおっしゃいましたけれども。

A：車載が8台。これは10ワットです。それから、5ワットが10台。1ワットが20台ぐらいあるのかな。それプラスですね、今回増設いたしますが、今回の噴火の経験から、避難所が27ヶ所ありますので、最低そこに1台ずつもっていけるようにということで27台増やして、それと10ワットをもう少し増やしました。

Q：このあいだの61年11月21日の大噴火のときには、その移動系無線をかなり有効に使ったと考えていいんですか。

A：ええ。まず噴火が始まると同時に2人1組で山に行きましたが、そのときにこれを使用しました。それから、各出張所にホットラインがあるんですけども、1本しかないわけですから、1本では情報連絡はどうしようもないということで、5ワットが1台と1ワットが2台、各出張所にそれぞれ置いてあるんです。それで、5ワットについては出張所と本庁と連絡がとれるような体制になっていて、1ワットについてはその地域で持ち運びして情報連絡に使うという形になってるんです。

Q：波浮あたりの混乱のことを考えますと、警察無線は割合に不感地帯が少ないですよ。これは、伊豆にすでに中継所があったからですね。

A：ありました。それと、あれは出力が20ワットぐらいで大きいのと、周波数が150メガですから。われわれのは400メガですからね。で、たまたま波浮地区でのパニックの原因は、警察無線は通じてるけど、われわれの無線が通じなかった。その原因につきましては、ここにあります本機の接点が地震時にはずれたのと、それから設備が完全じゃないといわれればそれまでなんですけれども、予備電池がなかったと。常時充電はしてたんですけども、あの時の使用回数が多かったもんですから、電池がすぐなくなってしまって携帯用無線が使用不能になっちゃった。

Q：ぼくはこの前、非常無線協議会の機関誌で初めて知ったんですけど、21日の11時頃に無線の基地局がちょっとおかしくなったと。それまでは、町の移動系無線は不感地帯が多いので、11月21日の噴火の時にあまり使えなかったんじゃないかな。警察はそういうことがないから、情報伝達のスピードの差が生まれてあいうことになったんだと解釈したんですよ。ところが今のお話ですと、町の無線も機能してただけけど、たまたま故障があってその時に使えなかったからスピードが違っちゃったんだと。そちらの解釈のほうがいいわけです。

A：ええ。私もはそう思っています。もうわれわれは、もし不感地帯があったとしても、どこに行けばそれが入るというようなことはだいたい把握してますのでね。本当にやろうと思えば、そこまで行っても通信はできるわけですから。

Q：移動系無線の子局を使うときにバッテリーが切れて、いざというときに使えないっていうことがありますね。

A：当初はですね、充電機のなかに入れてありますから、使えてたんです。ところが、使う頻度によって電池の消耗もありますので、大体2時間ぐらいいたら通じなくなりました。それと同時に、その接点がはずれてしまったというのが重なってしまったんです。ぼくはよくわからないんですが、親機のなかに差し込みがたくさん出るところがあって、それをスチール製のパチンとはめてはずれないようにしてるのがあるんですけど、それがはずれちゃったらしいんです、地震で。今度は、関係者のほ

うも改良してそういうことのないようにすると言っていましたけど。

Q：じゃあ、コンセントの接触が悪くなっちゃったということですね。

A：そうです、半分抜けたということですね。で、われわれ繁人にはどうしてもわからなくて、たまたま東京都さんの無線課の方が2名来ていたんですね。ぼくは最初、その人を知らなかったんですけど、どうも無線機ばかりいじってるから、もしかして聞いてたらさうだと。じゃあ、みてくれるというわけで、そこを開けてみてもらいましたら、専門家だからすぐわかりました。

Q：無線が使えなかったのは、11時頃から1時間ぐらいですか。

A：1時間ぐらいだったと思います。

Q：それは移動系無線の基地局だけですか、同報の基地局も両方なんですか。

A：いいえ。同報と移動と消防と3本あるんですが、そのうちの移動系だけです。同報はちゃんとなっていましたから、常時使えてたんです。

Q：今のお話で、充電してもバッテリーが2時間ぐらいでなくなっちゃうということですが、前回のよう、噴火と避難のあいだに5、6時間とかあるいは12時間もあるというような場合の無線対策を何か考えてますか。

A：予備電池を購入してあります。それはもう、噴火のあとすぐに。大噴火のときは、東京都さんに頼んで、足りなくなった電池をヘリで送ってもらったりでしたんですけど、急だったもので個数が集まらなくて。

Q：そうすると、今度は移動系の台数もかなり増えたけど、予備電源があるから12時間ぐらいはもつ、と考えていいわけですね。ところで、警戒区域を解除しましたね。あのきっかけは、何かあったんですか。

A：きっかけといいますと、住民のほうから、あそこは観光ルートだ、解除してくれという陳情がありまして、また議会でもありまして。

Q：そのときには、反対意見はありましたか。

A：反対はなかったです、それで四者懇に相談しまして。まあ、警戒区域になっているときから、観光のお客さんたちは事実上入ってまして、既成事実はありましたからね。で、警備当局の警視庁さんの方から、われわれが明確にすべきであると、立ち入りさせないならさせないようにそれなりの措置を講じなさいと強く言われておりまして、やはりなんらかの形ですっきりさせるべきではないかという話もありましたんで、それではということで解除しました。

Q：それがたまたま12月になったのは、なにかとくにあったんですか。

A：ええ、約1年経ちまして、当然再噴火はあるだろうという議論はあったんですが、その場合でもいわゆる中央火口の再噴火で、いきなり、あの地点での噴火は考えられないということですね。町に観光特別対策委員会がありまして、そちらにはかったんですが、そこで測候所の職員を呼んで事情を聞いたんです。やはり測候所のほうは大丈夫だということは言えませんが、結果的には結論がでなかったわけです。しかし、議会では解除したと。

Q：またさきほどの情報の話に戻りますが、今度はもう少しソフトの問題をお聞きしたいと思います。NHKのドキュメントを読んだり、いろいろな人の話を聞くと、11月21日の大噴火のときはさまざまな情報が入り乱れましたね。そのなかには、正しい確認情報もあったけど、流言蜚語に近いような未確認情報もあった。で、そういう情報は、電話とか無線で災対本部に入ってきたと思うんですが、災対本部としては何が誤情報か、何が正しい情報かってのは当然判断がつかなかったと思うんですよ。その11月21日の噴火の経験をふまえて、今度は確実性のある情報を収集しないと困るわけですね。そういう意味でのソフトの対策は考えてますか。

A：やはり夜間だったということもあるし、警察の警戒体制がものすごく強く、元町から外へ出られないというケースもあったりしまして、情報が入ってきても、本部の部長も危険をおかしてまで現場まで行って見てこいというような命令を出せなかったんです。職員のなかには見に行ってくれるっていう者もいたんですけど、あえて止めたりしたケースが多かった。で、それじゃあその確認は誰がするかというと、できないわけです。ですから、屋上に登ったりして熔岩流の流れを見た人たちの情報をまた本部に戻すというようなことで、結果的に誤解がでてしまったというようなこともありますので、今後は、危険っていうようなことより、そこまで何とか職員を派遣すると。

それから、マスコミがヘリコプターに乗っているような情報を放送しましたが、出来ればわれわれがヘリに乗って、その確認をしたいぐらいの気持です。ですから、わたしは災害のとき消防庁のヘリの人に乗せてもらって、ヘリから確認したいっていう話をしたんです。そういう島の地形がわかる人に乗せていただければ、もっと情報が入ると思うんですけどね。

Q：たとえば、職員の方が災害現場に行って、波浮の亀裂なんかを自分の目で見て亀裂が入ってるという情報と、人から聞いて亀裂が入っているそうだという情報を流してくるのは、相当違いがあると思うんですよ。

A：わたしがさっき言ったのは、この本庁の周辺の話です。各地域、とくに波浮地区と北の山地区は亀裂が入ったところですが、そういう情報が入ってきますと職員をやらせました。たとえば警察の方からは手をつこんで熱かったという情報があって、それは大変だ、じゃあ出張所の職員に確認してくれと。そうしたら、たしかに小さな亀裂はあるけれども、そんな爆発というほどのことはなかったと。

それと、島内での避難のときは、北の山地区から元町地区に本来ならバスで移動させなきゃいけないかったところが、誤報のために、3キロか4キロぐらい徒歩で歩いたということがありました。これはなぜかといいますと、熔岩流がもう都立の高校まで流れて、都道をふさいでいるという情報があったんです。われわれはそれを確認できないで、じゃあ北の山出張所からそれを確認しろという指示を出したんですね。で、出張所の方は、たまたま警察官が来たので、警察官にその現場を確認してくれと頼んだ。そうしたら、警察官が途中から帰ってきたらしいんですね、もう暑くて行けないという。それじゃあしょうがないから都道を通らないで下の海岸線を通して元町まで行きました。そういうケースもありました。ですから問題は、町の災害対策本部が現場の確認をしなきゃいけないかなということなんです。

Q：噴火のときに島内各地で起こっている異変を、町が中心になって情報を集めなければならないということですが、情報を集めても判断がかなり難しいんじゃないかと思います。そのへんの判断機構を町で持つにはちょっと難しすぎるんじゃないかと思うんですが、それはどういうふうに解決する方法があるんでしょうか。

A：今のやり方しかないんですね、もう少し考えるならいい考えも出てくると思うんですが。今は、たとえば筆島の変色海域が終わったあとまだ地鳴りがしてるという情報が入る。あるいは山からごうごう音がしてるという情報が入りますと、測候所のほうに調べてくれと連絡します。でも、完全な回答はきてない。

今、一番情報が入ってきているのは北の山周辺で、そのへんが危ないというような情報が入ってきます。この前も調べて、その場所へ行った時には音がしなかったんです。富士の演習じゃあないかなんて話もあります。

Q：今は、異常があった場合、その現場を確かめるのに職員が現場に行くパトロール体制になってるんですか。

A：いや、そこまではなってないです。わたしどもに連絡が入ってわたしどものほうで行ったりしています。

Q：11月21日の大噴火の時は、町としてかなり電話を使ったと思うんですけど、こないだの千葉県東方沖の地震をみても、地震が起こった直後から電話が使えない。大島の場合は、たまたま運がよくて電話が使えたということかと思うんですね。今度大災害があったらどうなるかわからない、あまり電話に期待できないのではないかな。もちろん電話を使ってもいいですけど、計画として電話に期待するのは賢明ではないんじゃないかという気がするんですが、電話による情報収集システムが今までの地域防災計画の主流でした。無線はあくまでも補助的手段だと。で、今度は位置づけを変えて、無線が主体で電話が補助手段だというような考え方が必要だと思うんですけども、この無線の充実っていうのを考えると、そういうふうになってきつつあると考えていいんでしょうか。

A：はい。そのために、27カ所ある避難所の全部に最低1台の無線機を設置して、連絡できるような体制を作ったんですから。

Q：東伊豆の中継所というのは、ホウキ山ですね。ホウキ山に中継所ができると、不感地帯は相当解決されますか。

A：されます。100%はいかないにしても、裏側にも行きますし。大島の噴火特有の、一番噴石とかスコリアが飛ぶのはだいたい裏側のほうなんです。で、その状況を調べるのに無線が通じなかったんです。また民家ありませんので、裏も完全にカバーできる体制にしなければいけないんです。

Q：三宅島噴火のときには、孤立防止用無線がけっこう活躍したんですよ。たとえば、噴火で都道が寸断されて、孤立地域ができると。都道が寸断されるから電話回線はおそらくだめだろうと。その孤立した地域がその無線を持っていますと、電波をとばしてN T Tが受けて、そしてN T Tが有線につないでくれるんで、これは緊急連絡用に有効なんです。孤立防止用無線は大島にはないんですか。

A：3カ所あります。南中北と。南部は波浮地区、中部は電話局さんのほうは町役場に置いてくれてるんですけど、まだ話し合いがついてないんです。で、中部については電話局。それから北部

は泉津地区です。

Q：11月21日の噴火の時は使わなかったんですか。

A：使いませんでした。

Q：では、去年の11月16日の噴火の時はどうですか。

A：使いません。ただし東京都さんの訓練では時々あれを使って訓練はやっています。

Q：じゃあ、使おうと思えば、使い方は知っているわけですね。

A：はい。波浮地区には波浮の小学校にあって、避難所になってます。泉津については、どこかの出張所だと思います。

Q：この役場に置くのを検討してるのは、費用がかかるからですか。

A：いえ、そういう意味じゃないんです。受け入れるのはいつでもいいんです。いつにするかって言う話なんです。うちの無線塔を使わせてくれなんていう話もありまして。ただ、うちのほうで中断所の関係でパラボラつけたりしますんで、位置とかいうのが問題になるんですよ。将来は、町役場につけることになります。

Q：ぼくは無線のメカがよくわからないんですけど、無線機をこんなに増やすといざというときに無線が輻輳するんじゃないんですか。

A：します。します。使用法について訓練を重ねて運用していかないと、混信していざというとき使えなくなる可能性は十分あります。まして、今まではたとえば波浮地区なら波浮地区だけで通信していたので、こっちまで入ってこない。こっちはこっちでまた使えるような状態だったんですけど。今度は全部入るような仕組みになりますから。

Q：この移動系無線には、子局が話していても、親局から緊急な情報を流したいというときに、強制的に子局の通信を断して流せるというメカニズムはないんですか。

A：いやそれはないです。そういう機能はあるんですか。

Q：現在の大島の無線系統についてはないんですが、そういう機種はあります。ただ、今考えられる対策としては、現在のものをどうするかということですが、無線統制をいかにかけるかということ、警防マニュアルを作るなりしてははっきりしたほうがいいんじゃないかと。

A：これだけ無線が増えますと、考えねばなりませんね。その機種はずいぶんコストが高いんですか。

Q：わたしはそんなにくわしくありませんが、ボタンひとつで割込む方法と、子局同士が話していても、「こちら何々、どうぞ」と言った瞬間にぱっと入り込んで、それからこちらの無線につながるというふうな無線機があるわけですね。ただ、現在の携帯無線はふつうの無線で1波しかないから、多重っていうか何波も持っていないと無理なんです。

A：うちのほうは、今度は中継局を当初24チャンネルを要望したんですけども、6チャンネルという指示がありまして。消防無線、移動無線、同報無線、それから全国波といっぱいあるんです。で、将来は多重の中継波も入れたいってことで、ただこれについてもうちでは400メガでやらないとうまくないんです。2ギガでやりますと、パラボラを2つつけなくちゃいけないんですね。で、なんとか400メガの中継波で許可していただきました。ただ、その代わりに6チャンネルにしろという指示を。

Q：そうすると今は空きチャンネルがあるんですか。

A：空きチャンネルはありません。監視用チャンネルを消防全国波とダブって使うぐらいいっぱいになっちゃってます。

Q：長野県西部地震では、マスコミが入りこんできて50ワットくらいの無線を使うんですね。そうすると電波が干渉して、町の無線が混信で使えなくなっちゃうということが起こる。長野県西部地震ではかなり多かったんです、それが。11月21日のときは、そういうことはありませんでしたか。

A：かなりありました。というのは、これは確認したわけじゃないんですが、マスコミが情報傍受のために使ってたらしいんです。われわれが無線でやりとりすると、マスコミの車が先取りで行って待ってたりしたのがありました。で、たまたまボコッて入ってきたのがあるんです、町で使ってない違う声がですね。われわれがしゃべっているときにも時々とぎれたり、キーンっていう音がしたりしたケースがありました。マスコミが同じ周波数を使ったんじゃないだろうかと思っています。

Q：無線の関係ですが、消防団のはさきほどの話で150メガですが、消防団も400メガの行政無線と一緒に動かせるという方法はないんですか。

A：いままではそういう形でやってきましたが、本来なら本年度から団専用の無線を整備したかったんですけども、まず63年度で、団専用無線の予算がつくじゃないかなというふうに思っています。

Q：それと、さきほどの電池なんですが、本当に十分使えるだけの電池があるんですか。

A：いや、まだ消防のほうは整備されておられませんので、整備した場合には電池まで揃えようと思いま

す。

Q: それと、ガソリンとか、そのあとの非常用の電源を確保するための燃料なんかはちゃんと整備されているんですか。

A: まず、本部には自家発電があります。11月21日の噴火のときも、当初は地震で一時停電があったようですけども、自家発電があったもんですからカバー出来ました。それから、車等の燃料につきましては、この前は全員島外避難しておりまして業者がだれもいなかったということで、われわれが使った車も動けなくなったもんですから、業者を呼びましてカギを借りてきました。ですから、給油所にあるガソリンだけで対応したと。

Q: 今の自家発電は、防災行政無線の電源が全部とれるわけですか。

A: とれますし、何十時間かもバッテリーもあります。

Q: さきほどの話ですと、町の携帯無線が充実されるし、東伊豆のほうに中継局ができるとかなり改善されるということですが、そうなりますとたとえば大噴火のときに災害現場でみられた警察と消防署の情報の行き違いは基本的には解消されるということなんですか。それともそれ以外に、警察と消防のあいだで避難についての考え方がくい違っているとか、そういうもっとソフト的な問題があるんでしょうか。

A: あります。というのは全員帰島のときに、警察のほうで作った避難マニュアルを、都側とある程度相談したんだと思いますけれども、それをまず住民に配ってしまった。その後われわれが作ったマニュアルと、たとえば地域の避難場所が違ったりしたんです。ただ、わたしどもの自主防災組織の説明会で3回ほどまわっておりますので、もうこれは住民に対して徹底していると思います。

Q: それと、当時の大噴火のときの合同災害対策本部の運営要領というか、運営のルールはあったんでしょうか、それとも単に同席したという感じなんですか。

A: いえ、ルールはありませんでした。

Q: それについては、何かその後改善されたことはありますか。

A: 地域防災計画のなかにははっきりうたいたいんですけども、まだ現段階では入ってないです。前回の災害ではあの方式が一番良かったんじゃないかということもありまして、将来、合同災害対策本部を作るんだという一項を入れたいと思います。

Q: 大噴火の直後は、情報の共有化というようなことでいろいろ改善すべき点があったという話があったと思うんですけど。というのは、たとえば町長さんから出た避難命令が、警察署長とか支庁とか東海汽船には必ずしもうまく伝わっていなかった、あるいは誤解されて伝わった、または逆に、警察の判断が町長さんには伝わってなかったとか、そういうこともいくらかあったということを知っているんですけど。

A: ありましたけども、本来はあるはずがないですね。みんな一緒にいたわけですから。町長がいて市長がいて警察署長がいて、東海汽船の支店長がいて、それから消防団長がいたわけですから。ところが、さきほどの無線ではないですが、警察署長のところに警察無線があったんですけども、それぞれの地域で独自にいろいろ指示が出て、それが100%署長のところには来なかったということもあります。そういうことで、くい違いがでちゃったんです。

Q: それから、テレビ・ラジオから出た情報が、デマに近いような形になっていろいろ流れたんですが、大噴火のときに、テレビ・ラジオの情報を意志決定やいろいろな判断をする場合にどう活用されたのか、ということをお聞きしたいんですが。それと同時に、こういうことを言ってもらっちゃ困る、というような放送もけっこう流れたんじゃないかと思うんですけども、それについて町あるいは合同災害対策本部として、マスコミと連絡をとりあうとか、あるいはデマ情報の打ち消しのためにもっとこういう具合に流してくれと申し入れることはあったんですか。

A: いや、もう避難が開始されている状況のなかでは、たぶん住民の方々はテレビをほとんどみてないんじゃないでしょうか。ただ、避難開始後の流言蜚語については、避難所等に入って口コミの形で住民に伝わったということがあったんですよ。これは、あるいは報道を通して入ってきたものもあるかもしれません。

Q: 避難所のなかにテレビのあった地区はあったんですか。

A: なかったと思います。後から入れたんです。ただ、現実にはわたしもが後から住民に言われたんですけども、波浮地区あたりでは避難所で、もう大島高校の近くまで熔岩流が来ちゃってるから都道は通行止めになっている、というようなデマというのはあったみたいですね。やはりヘリに乗っている操縦士やアナウンサーの人たちは、島のことをあんまり知らないと思うんですよ。そういうものをわれわれが乗って調べればいいです。ただ、夜間は火が近くにみえるんです。距離感がないんですよ。

ですから、そういう心配もあるんですが、それには地形を知ってる島の人の方が誰か確認したほうがいいんじゃないかと。

Q：わたしも当時のビデオをまわしてみたいんですけど、ずっと頻繁にニュースを流してますね。上からとか、どこか異常が発見されたとか、あるいは専門家を呼んできていろいろしゃべらせたりとか。ああいうことを災対本部におられてたぶんお聞きになってたと思うんですけども、それが合同災対本部の意思決定に影響をもたらしたんですか。

A：いや、災対本部の部屋にはテレビがなかったですよ。当日は、首脳部はテレビをみていませんので、テレビでそういう判断したっていうのはないですね。

Q：ただ、さっきビデオの話が出ましたが、たしかにNHKのビデオをみるかぎりでは、これは未確認情報ですがって断わりながら、ヘンテコな情報流してるんですよ。

A：ええ。そういうのは次に伝わるときは、未確認がとれてそのものに聞こえちゃうんですね。

Q：ただ、住民はテレビは持ちませんでした、ラジオは16%の人が持って出てるんです。

A：はい、ラジオは聞いていたと思うんです。たぶん、そういうのを聞いたのがデマになったと思うんです。

Q：元町から波浮にバスで行った人に何人か話を聞きましたら、持ってきたトランジスタラジオをつけっぱなしにするらしいんです。バスのなかでニュースを聞いてるわけですよ。で、ときどき音楽なんか入ったりするとうるさいと思うらしいんですけど、みんなニュースにシーンとしながら耳を傾けてね。マスコミ情報は住民レベルでは聞いていたんですね。

A：それが、避難所なんかで口コミで拡大していった。現実には、東京電力の冷却用のお湯が都道の近くに湯気になって出てるんです。そうすると、それがもうすぐ噴火だということになっちゃう。それから、ヘリコプターが元町小学校の校庭に降りると、これは報道のヘリだと思うんですけども、これがもう墜落という形になっちゃうんです。

Q：これは東京都さんにお聞きしたいんですけど、報道機関は総合防災訓練のなかに訓練の構成員として入ってませんよね。まあ、入らないのがふつうだと思うんですけど。たとえば、NHKみたいな指定公共機関をもし入れておけば、さっきの話じゃないけど、噴火があったとき、一番地形に詳しい町の職員がヘリに乗って状況がみられる。それはNHKにとってもいい情報源になるし、町にとってもいいことだと思うんですよ。つまり、報道機関は防災機関の側面もあるわけだから、防災機関として訓練のときに町の職員と一緒にヘリコプターで一周するとか、そんな形のを訓練のなかに入れておけば、いざというときに、両方にとって都合がいいと思うんです。これから、そんなことも必要じゃないかって気がするんですけどね。

A：大噴火のときも、熔岩流の位置関係がマスコミにはわからなくて、朝日新聞のH記者という人がヘリに乗って、火葬場のすぐ近くまで流れているということがわかりまして、それから熔岩流の位置関係がマスコミにわかるようになったんですけどね。やっぱり確認するのは、地元の人間のほうがいいですよ。それに、われわれ40過ぎの人間になると、昭和26年の噴火も経験しましたし、ある面での度胸がまるっきり違います。警察の方には申し訳ないんですが、警察は2年ぐらいて移動しちゃうもんですから、土地感がまったくないんですね。で、いざ災害になると交通規制をしちゃう。そういう体制でしたら、警察官が確実に現場まで行って確認した情報を流してもらわないと、デマにつながっちゃうという恐れがあるでしょうね。

Q：警察官はだいたい2年ですか。

A：ええ、ほとんど2年ですね。

Q：ばくは、このあいだ災対本部に来たときあの電話があったかどうかははっきり記憶ないんですけど、災対本部にあるあの電話はホットラインですよ。

A：そうです。

Q：あの電話は、一般電話と違いますね。さっきのぞいてみたら、下に字が書いてある。

A：わたしのところにある赤い電話は、受話器をとるとすぐ都の災対とつながるんです。ホットラインです。あれは噴火中とか、避難中に装置をつけていただきまして大変助かりました。今、役場とホットラインを結んでいるのは、ほかに測候所と東大地震研と警察です。それから、各出張所にもホットラインをつけました。

Q：ホットラインというのは、NTTの専用線ですか。

A：そうです、専用線です。

Q：じゃあ、一般回線と違うからふくそうは関係ないわけですね。

A：そうです。ただし、消防無線につきましては、無線の中継ではなくてNTT回線を使った中継回線

線になってまして、差木地の出張所に無線でつながってますし、泉津の出張所もその回線を使ってるわけですね。それがホットラインと共通ですから、ホットラインを使っていると無線が使えなくなる。これは、中継回線は別個にしなくちゃいけないと思います。それと、中継回線を無線にしないと、やはり災害時に切断された地域ではまったく消防無線が使えなくなってしまう。

Q: そうすると、こうですか。元町で消防無線の端末から声をだすと、元町の基地まで無線で受けて。

A: 元町で声を出しますと、N T T回線で差木地の出張所、泉津の出張所まで伝わるわけで、そこに基地があるわけですね。そこから電波が出ます。ですから、そのあいだに切断されると消防無線が使えなくなる。今回の災害も地震がそうとう起きましたので、切れないことを願ってました。で、今度はホウキ山に中継所をつくることになりましたので、それは解消できます。ただし、これは予備として今まで通りとおきます。

Q: そうすると、この地帯の無線のアンテナはどこにあるんですか。

A: この屋上にあります。

Q: ここにあるんですか。このアンテナから差木地までN T T回線で結ばれているということですか。

A: いえ、本機からN T T回線でいってるわけですね、消防無線につきましては。ただし、元町地区をカバーするためにアンテナがついてます。南部・北部地区には届きませんので、それをN T T回線で一回もって行ってそこから無線を出しています。

Q: とところで、大噴火の時に、当時出張所の方で避難誘導をする時ですね、出張所長さんが指揮命令系統の中心になるのか、あるいはそこに参集した分団長さんがなるのかを協議して決められたと思うんですけど、今の段階では、やはり出張所長さんのルートを意思決定の中心におきながらやるということでしょうか。

A: 今は団は無線を持っていませんので、本部からの指示はいったん出張所へ、そこから団に伝わっていくという形になっています。

Q: 東京都さんの書かれた報告書によりますと、泉津地区は所長と分団役員の討論の結果、中継地を一本化し、それ以降は泉津地区の指揮権は消防分団の把握ということに決めたとありますが、これは、出張所の所長さんがたぶん女性だったからかなと思うんですけども。

A: いえ、泉津の所長は女性ではなくて、男性です。

Q: そうですか。地域防災計画上、出張所の位置づけは地区災対本部みたいな意味をおかれてるのかということと、もし地区災対本部であれば、その地区災対の本部長は分団長なのか所長なのかということとはっきりしないもんですから。

A: 地域防災計画上では、はっきりした位置づけはありません。これは前からの慣例なのでしょうけれども、町職員と消防団は一体になって対応するという事になってますので、出張所長が指示命令することもあるでしょうし、主に団が中心になることもあります。ただ、泉津地区は単独で泉津港から避難してるわけですね。ですから、他の地区とは違った行動になったと思うんです。また、泉津は出張所が避難所になっていましたから、そういう関係もあったと思います。ですから、本部からの指示は団と一緒にして対応しろと。ただ全体からみても、なかには出張所長が指揮をとったところもあったんですが、ほとんどは分団長の指揮下にあったんです。出張所経由ではほとんど指示命令がだされておらんから。

Q: それから、大噴火の時には島外避難をご経験されたわけなんですけど、その後東京都さんと協議されている中味は島外避難をも考慮していると思いますが、そういう島外避難を体験されて、島外避難にそなえて町として準備しておくべきこととしては、どういうものがあるんでしょうか。もうひとつは、その受入れ先の機関ではこういう点に注意したらいいんじゃないか、あるいは受入れ機関に対して、町としてこういうことをもっと配慮しなきゃいけないんじゃないかということがございましたら、教えていただきたいんですが。

A: まず一番問題になるのは、どこの地区はどこの避難場所に行くかの受入れ先を決めておいてほしいということです。今度、東京都さんでは場所までではなくて、たとえば元町地区は何区に行くということまで決めてもらいました。ただ、わたしがたまたま桜島さんの計画を見せさせていただきましたら、どこの体育館へどこの地区がいくんだということまでできてますんで、できれば東京都さんもそこまで整備していただきたいなと思います。

それともう一つは、前回の避難でいちばん問題になったのが、島外避難で乗船したときに、家族がバラバラになってしまった場合があったんですね。それでも、住民の人たちは何もいわないで指示に従って乗っていただいたわけですから問題なかったんですけども、その後に家族はどこにいるんだろう、親戚はどこにいるんだろうという問い合わせが、相当あったんですね。それを解消するためにも、

事前にそういうものがあればスムーズにいったんじゃないかなと思います。できれば、そこまで東京都さんをお願いしたいわけです。

Q：逆に、静岡県の方では東伊豆なんかが入れたんですが、一番困ったのは、要するにいつ何人避難者が来るのか、これがわからないんで、食料や毛布の調達をどうするかというのが、非常に困ったと。なんか、そういう避難所をもうけとけばある程度解決できるということになるんでしょうか。

A：そうですね。それと、避難のための乗船のときに船同士の連絡がとれないですから、どこがどこへ行ってるのか、それに何人乗せられるかという把握ができなかったんです。そういう問題もできております。やはり避難住民全体の人員の把握ということで、乗る時の乗船名簿がすぐできれば一番いいわけです。それも今後の課題ですね。単に名簿を作るといっても大変なんですよ。ただ、今度は自主防災組織がありますから、それでけっこうカバーできるんじゃないかなと思うんです。

Q：たとえば、東海汽船のサルビア丸に何人乗ってるかということ、もし今後、たとえば東伊豆町が受け入れた場合に、東伊豆町で知りたいときには町に聞けばわかるということになるわけですね。たしか前回は、東伊豆町は県にも聞いて、県の振興センターに聞いてもわからない、県は県でわからないから東京都に聞いた、東京都はたぶんこちらの方に聞いたけれども結局わからなかったという話なんです。しかし今度からは、要するに東伊豆に依頼した段階で、町なり都なりから東伊豆町に何人いくということとはわかるわけですね。

A：ええ。まあ、緊急避難ですから一人ずつの確認まではできないと思うんですけども、それぞれ班長と副班長ができておりますので、住民の人数くらいは把握できるようになると思いますね。

Q：それから、自主防のことを教えていただきたいのですが。自主防の結成経過については、先ほどご説明があったんですが、現在の結成の経過のなかで自主防に一番期待しているのは何であって、その組織状況はどうであるかを教えていただければと思うんですが。

A：自主防は、知事の帰島条件のなかに帰ったらすぐそういうものを作りなさいという指示がありまして、まず当初一番危険地域であった波浮地区の人たちについて作ったんですね。それがきっかけで全部できたんですけども、もともとは、知事の指示とそれから警察さんの指導のもとでやったわけです。けれども現在のところ、せっぱつまって早急に作らなきゃいけないということで作った無理が今出てきているところもあるんです。というのは、班長や副班長に指名された人たちの責任感がすごくありまして、できたら交代させてくれという人たちがだんだん最近でてきたんです。こちらとしては、あくまで自主防災組織であるから自分たちのなかで交代などはしてくださいとお願いしているんですが、町長もそれを大分心配しまして、資機材などを配っている指導はしているんですけど。なお、そのなかで特にこれはいいい考えだなと思ったのは、班長と副班長のヘルメットを地域カラーにする。で、地域で色をかえると、われわれも誰がどこにいるか、どの地域の人がどこにいるのかすぐわかりますから、こういう面ではすごくいいわけです。

それに、今後この防災組織が（これは町長の考えなんですけれども）、防災だけじゃなくて、昔の隣組というか、昔は大島もお互いに結びつきが強かったんですが、それがだんだん薄れてきたと思うんですけど、そういうものが解消できる方向にこの自主防をもっていったらどうかと町長からも言われてますんで、防災のみならず地域全体のお互いのきずなというものをこういうもので強めていく。まあ、そういうふうにもっていかなきゃいけないなと思っています。

Q：北海道の有珠山がそういうことになっているんですね。虻田町って町がありまして、そこも災害が起こるまでは自主防がなかったんですけども、災害が起こってから自主防災組織ができて、それがそういう形になっているんですね。ところで、自主防災組織の構成メンバーは何人くらいなんですか。270班とありますが。

A：バラバラですけども、多いところで40人ですね。

Q：それは、集落単位でつくってるわけですね。

A：そうです。地区別で、班別になっています。

Q：そういう自主防災組織をつくるにあたって、一般住民に対して特別な広報活動はしたんですか、自主防の必要性とかを。

A：いえ、めだった広報活動はしてません。われわれがまず声をかけたのが消防団です。そして、その人たちがだんだんまとめていった。

Q：自主防災組織の役割は、避難するときとまって逃げるといことですか。

A：はい、そうです。なぜこういうことが必要になったかというと、前回は全員島外避難ということで、われわれ当初は全員島外避難したと思ってたんですが、なかにはかくれて残っていたと。今後はそういうことが絶対ないようにということで、各地域の班の班長が点検するというのが目的です。です

から、自主防災組織という大きな言い方じゃなくて、避難誘導班という表現の方がいいんじゃないかなともいわれてますけれど、われわれはそれだけじゃなくてもっと広い意味で考えてますから、自主防と呼んでます。

Q：このあいだの再噴火とか防災訓練を通じて、自主防の問題点がある程度現われてきたというような検証をされたことはないんでしょうか。

A：ありました。というのは、われわれが自主防を作ってからですね、はたして避難場所までどのくらいで着くのかというようなことが心配だったんですけれども、今回の訓練では、遅いところで30分くらいでした。ただ、班長さんのなかには、ここなんか30分かかるんだから近くに避難場所をつくってくれという声もありますけれども、行政側としては、なるだけ1ヶ所に集めたいということもあって、その意見はいれてないんですけれども、遠くから何人もひきつれて30分かけて歩くというのは困る、もっと近い場所につくってくれというような要望があったことは事実です。

Q：避難所なり避難場所は、今後はこういう火山噴火を考えたら海の近くというのが基本方針になるんじゃないですか。このあいでも指定された避難場所と違うところに避難していましたが、今度はこのあいだ避難したところを避難場所にもってきているわけですか。

A：そうです。一般的な災害での避難場所と噴火時の避難場所と異なるところがかなりあるんですね。そこで今度は、島外避難もあり得るということも考えて、なるだけ海に近いところを選んでいきます。

Q：今年の11月18日の再噴火のときに、自主防災組織は活動しなかったわけですか。

A：三原山噴火を想定しての避難では、住民を含めた自主防はどうして三原山が噴火しているのにその近くの山の避難所に避難しなければいけないのか、という大きな反響がありました。これはやはり第一次避難で、次に島外避難の二次避難場所としては、海に近いところを考えていますからと説明していますけど。地区によっては相当の抵抗がありましたね。実際に噴火が起こったとき、はたして山の方の避難所まで行ってくれるのかなという疑問はありました。

Q：住民のほうでは、噴火したらすぐ島外避難ということも考えているんですね。

A：われわれは、島内で安全な場所にまず避難をして、それでもどうしてもない場合に最終的に島外避難という考えでおります。そこで意見が食い違ったりしてるわけですね。

実は自主防は3月に結成されたんですが、結成後に8集落の全270班の自主防役員の方に集ってもらいまして、今後の教育とか9月1日の防災訓練についての打ち合わせ等をしたんですけど、そのなかでもいろいろな反響がありましたね。班長さんが相当責任をおそれておりまして、どの位の範囲まで責任があるんだろうか、当初は自主防組織を作りなさいなんてうまいことって、という批判がありました。

Q：責任っていうのは、どういうことですか。

A：やっぱり取り残された人もでてくると思うんですね。当然、拒否する方もでてくると思うんですね。そういう人への対応がどこまで自分たちの責任なのか、まあ、班長さんとしては考えるでしょうね。その辺は、やはり町の職員なり消防団が責任をとることになるんでしょうかね。

Q：自主防災組織は何かがないとできないのが現状なんですね。それで、これからの対策としては班長さんや副班長さんがたぶん一年交代とかあると思うんですが、それと訓練の関係ですね。訓練は1回あったんですけれども、この先の見通しというんですか、あとはもう、尻切れトンボになるっていうのが、こういう自主防災組織がかかえる難しい問題なんですけれども、そのへんはどうお考えなんですか？

A：そこまでは考えておりませんけれども、そうならないように、もちろん訓練のほうも繰り返したり、それから、さっき言いました地域に密着した組織になっていく指導をこれから徐々にしていくつもりでおります。防災は防災で、このまましばらくいていくこともありますんで、違う面で活性化も図らないといけない。

また、経済的な援助ということなんですけれども、昭和63年度から当面、通知を出したりする郵便料ですか、この予算は町でだしてやることにしました。

Q：昭和62年度の自主防の助成はもらいましたか。

A：はい、いただきました。

Q：何に使ったんですか。

A：ほとんど資機材です。ヘルメットは入ってないと思いますが、避難弱者のための担架とか、車椅子、誘導灯とか、腕章ですね。

Q：それはもう、自主防に渡してあるんですか？

A：はい、渡してあります。

- Q：そうすると、たとえば歩行困難なおじいさんやおばあさんとか、そういう人たちも自主防単位で避難させると。
- A：はい、原則はそうです。それで、それでもやむをえない場合は、消防団のなかに救助班ができていますので、団にも担架とかを配備して、そこがやります。
- Q：そうすると、避難場所の変更指示とか島外避難の指示がまたあるとしたら、今度は町から消防団に、消防団から自主防の班長にというルートをたどるわけですか。
- A：その前に同報無線でやるわけです。
- Q：たとえば、同報無線ですとそれぞれの班長さんに細かい指示を出すっていうのはなかなか難しいですよ、それぞれの班長さんにトランシーバーを渡して、必要な情報は直接自主防の班長に流すとかいうことは考えていないんですか。
- A：そこまでは考えていませんが、いちおう避難場所に集合した場合には、消防団員が必ずそこへ行くことになっているんです。
- Q：このように 270 班に分かれて避難することになると、班長さんがある程度町からの情報ルートを確保しないと混乱に陥る可能性があると思うんですよ。それだけ自主防災組織に重要な役割を期待しているとしたら、トランシーバーとかいうのが必要になって気がするんですけど。
- A：ただ普通のトランシーバーですと、電波の関係で通信が不可能なんです。で、避難場所に指定しているところには屋外用の同報無線が聞こえます。それと、消防団員もさらに来年には消防無線を整備しますのです。
- Q：このあいだの噴火の時に、藤倉学園とか老人施設とかは先に避難させましたけど、そういういわゆる災害弱者が多く入っている施設に対しては特別な避難対策は考えてるんですか？
- A：地域防災計画にはとくにに入れてありませんけれども、まず情報伝達を可能にするために、戸別受信機をつけます。また老人ホームについては、町の消防本部と老人ホームとのあいだにホットラインをつけるようにしています。ただ、藤倉学園についてはそこまでまだやってないんですけど、もう同報無線が流れるものですから。避難については老人ホームが一つのブロックになってるわけです。それプラス近隣の一般住民の応援協定もできてます。
- Q：災害が起ったら、バスを優先的に配車するとかいうことは？
- A：はい、それは町のトラックはすぐ行くことになっています。前回の教訓が生きているわけです。
- Q：避難道路の照明は、それぞれの柱ごとに非常電源があるんですか？
- A：いえ、それはないです。
- Q：それだと停電になりますねえ。バッテリーをつめておくとそうとう高いんですか。
- A：そうですね。津田沼のあたりに 1 か所照明がついてますが、けっこう高いもんですから。
- Q：全部というよりも、2 基か 3 基おきぐらいにそういうのがついていると、いざというときにも大丈夫っていうか。
- A：避難所にはそれぞれ非常電源がありますけど。
- Q：伊豆大島の場合、ピーク時には 1 日何人ぐらいの観光客がくるんですか。そういうピーク時の観光客に対して、たとえば住民が呼びかけるとか、いろんな施設の管理者から呼びかけてもらうとかいうことでだいたい補足できるんでしょうか。
- A：一番のピークは夏ですね。それに対しては、同報無線をシーズンだけ仮設のものを付けると。さらに、観光客がいそうな所にもつけると。それと、たとえば山頂でついている組織がありますが、それがイコール自衛消防で、それに観光客もお願いしています。さらに旅館にも、その責任者に必ず呼びかけてくださいというふうなしくみになっています。ただ、いちばん心配なのは釣り客対策ですね。都の災対のほうからはそれをやれといわれましたが、そこまでやると、莫大なお金がかかるんですよ。
- Q：どうも長時間、いろいろ貴重なお話を聞かせていただいてありがとうございました。

東京大学新聞研究所「災害と情報」研究班

報 告 書 一 覧

1. 「地震情報の伝達と住民の対応－いわゆる『余震情報パニック』に関する事例研究－」 1978年12月
2. 「地震予知情報への対応」 1979年 8 月
3. 「続・地震予知情報への対応」 1980年12月
4. 「災害警報と住民の対応－大府市の倉庫火災における住民の対応」 1981年 1 月
5. 「東京駅八重洲口地下街の通行量及び地下街利用者の実態」 1981年 2 月
6. 「災害常襲地域における住民の災害観に関する調査報告－その 1－」 1982年 3 月
7. 「誤報『警戒宣言』と平塚住民」 1982年 8 月
8. 「1982年浦河沖地震と住民の対応」 1982年11月
9. 「誤報『警戒宣言サイレン』と三島市民」 1982年12月
10. 「1982年 7 月長崎水害における組織の対応」 1983年 6 月
11. 「1982年 7 月長崎水害における住民の対応」 1984年 3 月
12. 「1983年10月三宅島噴火における組織と住民の対応」 1985年 2 月
13. 「1983年 5 月日本海中部地震における災害情報の伝達と住民の対応」 1985年 3 月
14. 「東京都民の地震予知情報への対応」 1985年 3 月
15. 「1984年長野県西部地震における災害情報の伝達と住民の対応」 1985年 9 月
16. 「東海地震と清水市民」 1986年 3 月
17. 「都市災害の情報問題－その 1－」 1987年 3 月
18. 「チリにおける地震に関する調査」 1987年 3 月
19. 「巨大地震と東京都民」 1987年 3 月
20. 「1986年伊豆大島噴火における災害情報の伝達と住民の対応」 1988年 1 月
21. 「1987年千葉県東方沖地震における災害情報の伝達と市町村・住民の対応」 1989年 1 月

噴 火 と 防 災
—伊豆大島噴火後の防災対策と住民心理—

平成元年3月20日 印刷
平成元年3月31日 発行

編集兼発行 東京大学新聞研究所
東京都文京区本郷7丁目3番1号

印刷所 三鈴印刷株式会社
東京都文京区小日向4-4-12
電話(941)1181
